風土記の丘埋蔵文化財調査報告書第１集

甲斐茶塚古墳

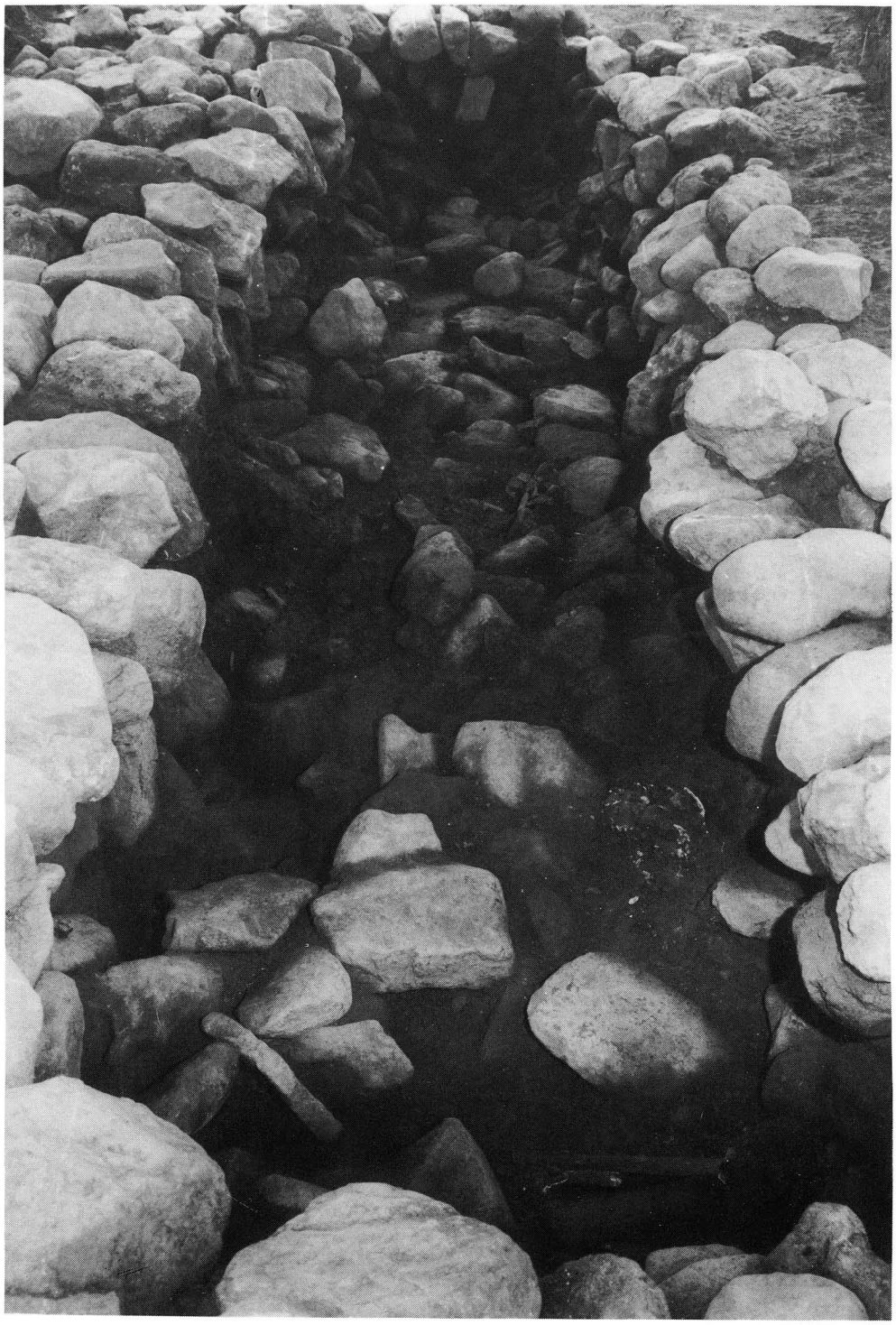
昭和54年３月

山梨県教育委員会

甲斐茶塚古墳

昭和54年3月

山梨県教育委員会



序

風土記の丘公園 建設予定地内の 茶塚古墳は， 従来までは 八乙女塚古墳・茶 塚（杯塚）古墳と呼称され， 丸山塚，大丸山塚に伴う陪塚的な性格が与えられておりました。

本県の風土記の丘建設は着々と進行しておりますが，今回調査した茶塚（杯塚）古墳の現状は桑畑となっており， 地主の開墾の際に石室の一部が確認されたものです。現状のままでは，石室の自然破壊につながると考え， 県文化課が石室保存のため発掘調査を行い， 石室内部の副葬品を取り上げ，石室内には砂利を入れ石室の保護整備を行いました。 この結果，八乙女塚と茶塚は二つの小円墳ではなく前方後円墳として考えられるようになり時間的にも銚子塚， 大丸山よりも新しく位置する古墳とされました。

この報告書は今回の調査結果をまとめたもので，僅か数日で執筆され， ここに刊行の運びとなったので， 不備な点が多々あることと思いますが，調査事実をすみやかに報ずる本抄刊行の一面の目的に 幾分なりと添い得ることを大きな喜びとするものであります。

山 梨 県 教 育 委 員 会

例　　言

1.　本報告書は，昭和52年山梨県・風土記の丘公園建設予定地内の茶塚古墳，石室保護整備に伴う発掘調査の調査報告書である。

2.　本書は期間内にまとめることが要求されており，調査結果について充分な検討，研究の時間的余地がなく，調査によって検出された石室，副葬品を多く図示することに重点を置き，文章の記述については極力少なくした。

3.　遺物整理は中央大学，山梨大学の学生によった。鉄器実測は内藤和久，高橋央修，伊庭章一，塚原康徳が、トレース・製図は小林広和，里村晃一が行い，図版作成は中央大学，山梨大学学生が行った。三環鈴，鈴杏葉の分布図は仲子和美氏によった。

4.　原稿執筆は本文末尾に記し，編集は小林広和，里村晃一が行った。

5.　本報告書の関連遺物，図面類は県文化課に保管してある。

発 掘 調 査 の 組 織

調査員及び発掘担当者

小林　広和（県文化課文化財主事）

里村　晃一（平塚市立横内小教諭）

補助調査員

菱山かつよ，小林和夫，中山誠二，長谷川一正，菊地建一，高橋央修，下山良明，浜田清崇，萩　剛二，遠藤和子，岡村和子，香川洋子，桜井節子（以上中央大学）

細田俊哉，内藤和久，守屋誠司，須藤茂男（以上山梨大学）

遠藤秀樹（専修大学）

（事 務 局）

山梨県教育庁文化課

課　　長　　山寺　　勉

課長補佐　　前島　昭造

風土記丘担当（副主幹）　岡　　俊彦

〃　　（主　査）　山田　辰雄

文化財担当（副主幹）　波木井市郎

〃　　（主　査）　笠井　鎮雄

目　次

（序）

第一章　はじめに

第一節　調査にいたるまでの経過 …… 1

第二節　調査経過 …… 1

第二章　本墳の位置と歴史的環境 …… 6

第三章　本墳の形態

第一節　墳丘の現状 …… 11

第二節　築成について …… 13

第三節　墳形について …… 14

第四章　埋葬主体部

第一節　石室 …… 17

第二節　遺物の出土状態 …… 22

第五章　出土遺物

第一節　武具 …… 25

第二節　馬具 …… 34

第六章　まとめ

第一節　遺跡について …… 38

第二節　遺物について …… 40

第三節　築造年代 …… 43

1　曽根丘陵における前方後円墳の分布 …… 44

2　曽根丘陵における前方後円墳の変遷 …… 45

3　曽根丘陵前方後円墳群における本墳の位置 …… 48

第四節　成果と課題 …… 56

図 版 目 次

1. 石室上部構造及び天井石 ……57
2. 石室掘り上がり図 ……58
3. トレンチ設定 ……59
4. 石室断面図 ……60

写真図版目次

1. 茶塚古墳周辺（その1） ……61
2. 〃 （その2） ……62
3. 茶塚古墳遠景 ……63
4. 茶塚古墳石室上部構造（上）；天井石（下） ……64
5. 石室掘り上げ前（上）；掘り上がり（下） ……65
6. 木心鉄板被輪鐙及び帯先金具 ……66
7. 三環鈴 ……67
8. 衝及び肩甲 ……68
9. 短甲 ……69
10. 小札（その1） ……70
11. 〃 （その2） ……71
12. 鉄鉾 ……72
13. 鉄鉾拡大，広根鏃及び剣破片 ……73
14. 鉄鏃 ……74
15. 人骨 ……75
16. 出土状況 ……76

挿　図　目　次

1.　茶塚古墳・周辺地形図（その１）……7
2.　茶塚古墳・周辺地形図（その２）……8
3.　茶塚古墳・墳丘測量図……12
4.　墳丘第１トレンチ・セクション図……13
5.　茶塚古墳・墳丘想定図……15
6.　石室発掘経過図……18
7.　石室実測図……20
8.　石室断面図……21
9.　出土状況図……24
10.　遺物実測図（その１）……26
11.　〃　（その２）……27
12.　〃　（その３）……28
13.　〃　（その４）……29
14.　〃　（その５）……30
15.　〃　（その６）……31
16.　〃　（その７）……32
17.　〃　（その８）……33
18.　〃　（その９）……35
19.　〃　（その10）……35
20.　東山古墳群地形図……41
21.　前方後円墳変遷図……47
22.　東山古墳群関連図……49
23.　三環鈴実測図……50
24.　馬具類実測図……51
25.　三環鈴分布図……54
26.　鈴杏葉分布図……55

第一章　はじめに

第一節　調査にいたるまでの経過

甲府盆地の周辺には，曽根丘陵をはじめとして，笛吹川，荒川，相川等の扇状地形がよく発達し，山梨県内に存在する古墳の大部分が盆地の周辺地域に分布している。

特に前期古墳の分布の著しい曽根丘陵は笛吹川の左岸に位置し，東八代郡境川村より西八代郡市川大門町にいたる，東西約10㎞，南北約3㎞，海抜320m～400mの丘陵地帯であり，前面は甲府盆地に急傾斜をもって臨んでいる。笛吹川を眼下にし，甲府盆地を一望する景勝の地には，大丸山古墳・甲斐銚子塚古墳・天神山古墳・小平沢古墳・王塚古墳・大塚古墳，それに「赤烏元年」鏡を出土した狐塚古墳などの多数の古墳が存在する。

甲斐国造墓に擬定される甲斐銚子塚，大丸山古墳を含む東山古墳群一帯の歴史環境は，古く旧石器時代に遡る。米倉山遺跡を中心に分布するが，資料的には断片的なものである。縄文時代，弥生時代にいたっても資料は他地域よりも豊富であり，このような環境を背景に風土記の丘公園の構想が立てられ，建設事業も着々と進められている。今回の茶塚古墳の発掘の直接の動機は，開墾時による偶然の石室発見によるものである。従来までは，杯塚とも呼ばれ，大丸山，銚子塚等の陪塚としての性格が与えられていたにすぎなかった。又斜面上に位置し，南側部分は，土砂が流出し墳丘の一部が埋没され，墳丘の高さは顕著ではなく，主体部は削平されたものと解釈されていた。この様な状況の中にあって，石室内部も盗掘を受けていない事が想定され，現状のままでは，自然破壊による石室の破壊と盗掘による破壊の恐れが生じたため，石室内部の保護整備のための発掘調査を行う運びとなった。かくして1977年7月10日県文化課に茶塚古墳調査会が発足し，8月10日から現地調査を開始した。

（小林）

第二節　調査経過

地主をはじめ地元の人々の話によれば，今回調査を実施した茶塚古墳の前方部は，明治以降今日に至るまでの間に，掘られたことがないといわれている。平坦な前方部は周辺の大規模な古墳を見なれた人々にとって，古墳として意識されなかった面もあったようである。調査に先立って石室の天井石の一部が確認されていたため，当初は前方部の頂部に埋葬主体部である竪穴式石室の存在を予測して調査の計画を立てることにした。

前方後円墳という前提に立ったが，前方部と後円部が切られているため，墳形確認のための周溝等の検出が必要であった。しかし以下に述べる如く，集中豪雨により調査期間が

実質的に短縮されたため，墳形の追求は途中で断念することになった。

ここでは主体部の調査を中心とし，墳丘の調査を補足して，調査の概況を記述していくことにしたい。

6月20日　晴，現地を踏査して測量の計画を立てた後，調査についての打ち合せを行う。

6月21日　晴，測量計画にもとづき，トラバース測点・補助用の測点を選定し杭をうつ。

7月1日　晴，トラバース測量を行う。後円部の中心にあたる部分は，地主の許可が得られず，測点の設定を断念した。

7月2日　曇り，前方部墳頂に設けたトラバース測点より平板測量を開始し，前方部の実測をほぼ終了する。

7月3日　晴，前方部の外周の平板測量を行う。

7月4日　晴，後円部の外周の平板測量を行い，墳丘の測量は後円部の中心部を残して終了した。

測量ができなかった後円部については，発掘調査が開始された段階で折をみて測量をする予定であったが，ついに地主の許可が得られず，墳丘の実測図は後円部の中心に空白部を残すという不備な図となった。この部分については，大縮尺の地図より推定される等高線を記入し不備を補うことにした。

8月11日　晴，午後から発掘器材を現地に搬入し，器材入れのテントを設置する。前方部の石室上を中心として約50m四方にわたって桑畑の桑刈りをおこなう。見通しがよくなり前方部の外形が一目で明らかとなり，墳丘周辺を踏査し周溝確認のためのトレンチ設定の計画を立てる。

8月12日　晴，前日に引き続き桑畑の桑刈りと，墳丘北部の竹やぶを刈りトレンチの設定を行う。前方部石室を中心に墳丘を下った地点より，放射状に幅1m，長さ20mのトレンチを5本設け，トレンチ内の桑の抜根にはいる。墳丘上では石室の位置を確認するため，既に天井石の確認されている部分を拡張した。その結果当初想定した南北方向にのび墳頂部の直下に位置すると思われた石室は，東西方向に広がり墳頂部より北に寄った位置に墳丘の主軸にそった東西方向に石室が築かれたことが判明し，一部の天井石被覆礫群と天井石の上面が露出した。そこで東西と南北の主軸と平行，直交の二方向のセクションベルトを設定し，さらに調査区域を拡大した。

8月13日　雨，早朝より作業を開始し，セクションベルト・トレンチの測量をするため平板を設定し，併行してセクションをとりはじめるが，すぐに雨がはげしくなり作業を中止する。本日はこれ以後，石室にビニールシートをかぶせ，たまった雨水の排水に費されたため，やむなく午後石室上にテントを設置した。

8月14日　曇りのち晴，石室上のテントを取りはずしセクションベルトの北半部を拡張した。耕作土の下層は粘土を含む黒褐色土で非常に堅くしまっているため，掘るのは容易ではない。この土層中より土師器の小破片を若干検出した。南北方向のセクションベルトは北側半分の実測が終了したため夕方除去し，天井石上に見られる天井石被覆礫群の北半部を露出させた。被覆礫群は径20～10cmで石室全域に及びそうであるが，部分的には存在せず，天井石が直接露出する個所も認めら

れる。日没直前に平板を設定し，本日の調査区域を測量し作業を終了した。墳丘上のトレンチはセクションベルトの延長上に十文字に設定してあるが，表面の耕作土を排除したにとどまった。

8月15日　曇り時々雨，前日露出させた北半部の天井石被覆礫群の清掃を行い，写真撮影終了後東西セクションの実測に着手する。耕作土下層の黒褐色土は被覆礫群まで到達するが，天井石が露出した部分では天井石相互の隙間には，灰色を呈する粘土が詰められている状態が観察された。東西セクション図作成後，南側へと拡張したが，石室上部の礫群全域を排土するまでには至らなかった。墳丘上のトレンチでは，南北のセクションに続くトレンチの墳丘中段で径20cm前後の石を数個まとまって検出したため，ふき石又は列石の可能性も考慮し，その部分を拡張するとともに，そのトレンチの西側にもう一本のトレンチを設定し確認することにした。

8月16日　曇り，石室上部の土砂を排除するが，南側は墳頂部に向うためよくしまった黒褐色土の堆積が厚くなり作業は難行した。また朝夕は雨のためビニールシートをかぶせる作業等も行ったため，石室上部の排土作業は完了しなかった。

8月17日　雨，終日の豪雨のため石室上のトレンチの排水に追われる一日となった。

8月18日　雨，交通機関もマヒする様な集中豪雨に見舞われ，作業はまったく進行しなかった。今後天候の好転が期待薄なので，石室上部に再びテントを設定し，以後実測終了し写真撮影までの間はテントは撤去しないことになった。

8月19日　雨，石室上のテント内での作業となった。雨水が流れこむため排水用の溝を掘るなどの作業を行いながら，天井石被覆礫群を全域にわたって露出させ，1m方眼の遣り方を組むための杭を打ち基準の水糸を張る。墳丘周辺のトレンチは三日続きの雨のため，満々と雨水をたたえるプールとなった。

8月20日　晴，久々の青空ではあるが今後の天候を考えると，テントを取りはずすことは躊躇させられるため，蒸し暑いテントの中の天井石被覆礫群の実測を開始する。1m方眼の中間にさらに一本水糸を張り，50cm方眼の遣り方を組み，縮尺十分の一で東側はほぼ終了した。被覆礫は角のとれた河原石で，礫の少ない部分では天井石が露出し，石室中央部の天井石は平坦で広がりをもつが，他は細長く面をとった切り石が多いようである。墳丘外周のトレンチはまだ水がたまったままである。

8月21日　晴，久しぶりにテントをはずし，のびのびと作業を行う。午前中に天井石被覆礫群の実測を完了し，礫の表面の清掃後写真撮影を行う。夕方から被覆礫群を除去し天井石を露出する作業にとりかかる。礫は粘性の強い黒褐色土でかたく固められるため，礫をはがすのは容易なことではない。午後になりようやく墳丘外周の各トレンチ内の水がひき，明日より墳丘上・墳丘外周の調査も可能となった。夜宿舎で図面の整理をし天井石被覆礫群の実測図のトレースをおこなった。その結果黒褐色土中より土師器の破片を検出した個所は，被覆礫が欠け，天井石が直接黒褐色土と接することが判明した。

8月22日　晴のち曇り，天井石の上部に残る黒褐色土を除去し清掃を行う。併行して天井石外部の石積みの範囲を確認するため，石

室のトレンチを南北に拡張する。天井石は棒状の切り石状のものが十個と平坦な一枚石が中央に配置される。石室西側の天井石は二〜三個石室内に落ち込んでいる様であり，中央の一枚石に接する天井石も落ち込み，これらの部分は天井石被覆礫群が少なく破壊された可能性も考えられる。ノーマルな状態の天井石相互の隙間には，その隙間を埋める程度の河原石が詰められ，さらにその間に粘土を充塡している。しかしその粘土の多くは石室内に落ち，天井石の落ち込んだ部分の流入した土砂とともに，石室内はかなり埋まっているようである。夕方雲行きがあやしくなってきたため再びテントを設定し作業を終了する。墳丘上では南北セクションに続くトレンチの南側を掘り始めたが，石室上部と同様の黒褐色土が墳頂部に向い厚く堆積するため作業はあまり進行しない。墳丘周辺のトレンチの調査は状態が悪いためあと一日まつことにした。

8月23日　曇り，午前中天井石の清掃を行い昼に写真撮影を終了する。午後は実測のため再び50㎝方眼の遣り方を組み実測を行う。明日業者に天井石を移動する作業を依頼してあるため，可能な限りの人員を投入し実測を夕方完了した。石室東端の径70㎝の楕円形の石は石室の奥壁に乗る部分が大半であるが，一部は石室内に突出し天井石に含められる。この石と石室内に落ち込んだ天井石も合わせると，天井石は合計十六枚を数える。墳丘外周のトレンチは作業を再開したが，北側では水が湧き出し作業に支障をきたした。墳頂より北へ20㎞の地点で，砂岩を含む礫が幅2〜3㎞で検出されたため，その西側に平行にトレンチを三本設定し広がりを追求したが，西側に行くに従い礫の幅がせばまるようであり，これらが墳丘とどの様な関係にあるかは不明である。夜宿舎で天井石の実測図を整理しトレースを終了した。

8月24日　曇り一時雨，午前中業者により天井石が除去された。その後石室周辺を清掃し写真撮影を行う。石室内部はやはりかなりの土砂が流入しているが，石室東寄りに頭蓋骨や大腿骨等一体分の人骨が集中し，他の区域では鉄片が若干と西側に土師器片が確認できる。石室側壁は河原石が積まれ構築されたもので現状では三〜四段を数える。午後実測の準備を行い石室の断面図をとる。墳丘外周のトレンチは昨日に引き続き礫の範囲の確認を行うが，各所で水が湧き出し作業は不可能となった。

8月25日　曇り一時雨，石室内部に流入した土砂を排除する作業を行う。この土砂は10〜20㎝に達し，その下に敷石が存在することが判明した。遺物は全般的に鉄器片が出土したが，石室の西北コーナーより北側壁にかけて輪鐙が一対と鉄剣らしき棒状の鉄器が検出された。石室中央部の天井石が落ち込んでいた部分では，敷石よりも浮いて10〜20㎝程度の石が存在し，天井石被覆礫群の礫の一部が石室内に落ち込んだものと思われる。墳丘外周のトレンチは昨日と同様の状態で作業は進行しなかった。

8月26日　曇り，石室内部の遺物の検出を行うが，鉄片が数か所にまとまって検出される程度で，原形を知り得る様な資料は少ない。人骨の位置が東側に寄りすぎ状態も不自然であることや，遺物の量的な少なさから考えて既に盗掘を受けたことは確実であろう。夕方輪鐙の南に接している石の間から三環鈴

の一部が認められ，石の奥へと続くようであった。墳丘外周のトレンチの状況は好転せず，これ以上墳丘の調査に力を入れることは，調査期間・人員等からみて困難となったため，今回は主体部である石室の調査を完了させることに重点を置き，墳丘・墳丘外周の調査は次の機会をまつことにした。

8月27日　曇り，午前中石室内部の遺物を残したままで清掃し写真撮影を行う。午後から遺物の出土状態を実測しながらあげていくが，小破片が多く作業の途中で日没となり中断した。人骨の集中した石室東側でも鉄片がかなり出土した。

8月28日　晴，遺物の取り上げ作業に終始したが，終了せず一部を明日に持ちこした。併行して墳丘のセクションを取るためのトレンチを掘る作業を行う。夜宿舎で出土品の整理を行った結果，金箔の付着した鉄片が若干検出された。また他の鉄片中には鉄鏃や刀子等も認められるが，ほとんどは少破片であることや錆が表面を覆うため形状は明らかにし得ないものである。

8月29日　晴，遺物の取り上げを完了し，清掃後写真撮影を行う。敷石の実測に着手する。敷石は石室底部の全域に及んだが，上部の平坦な円形の石が用いられるため，随所に隙間がみられる。午後からは側壁の実測のための基準線の設定を行う。

8月30日　晴，石室の側壁・奥壁の実測を開始する。一方，墳丘上のトレンチを掘る作業も続くがあまりはかどらない。奥壁と側壁の一部の実測が終了する。

8月31日　晴，午前中に石室の実測が終了，午後は天井石を石室横に移動させて写真撮影を行い石室の調査は終了した。

9月1日　晴，石室は調査終了後保存されることになっているため，側壁が崩れる恐れのある敷石を除去した後の調査や，石室外の控え積みの調査は実施しないことになった。本日は墳丘上の後かたづけと，トレンチを掘る作業に終始した。

9月2日　晴のち曇り，午前中トレンチ掘りを行い，午後は器材を入れたテントを撤去し，器材を宿舎に移動する。

9月3日　晴，墳丘の南北方向のセクションをとる。

9月4日　晴，現場の残務整理に終始した。

9月5日　晴，業者による復元作業に立ち合う。石室内には砂利を詰め側壁を固定した後，天井石を元の位置にもどし，天井石被覆礫群をのせ土砂を埋め作業を終了した。これをもって茶塚古墳の調査は一応完了した。

測量・墳丘の調査に不備な点も残ったが，今回の調査の主目的である埋葬主体部の調査は，雨で遅れたが計画に従って作業は進行しかつ終了することができた。8月11日より調査を開始しはや26日間がすぎ去った。この間集中豪雨の時は石室内の排水に，また盗掘防止のための見張り等，昼夜をわかたず発掘参加者が交替で続けるという困難な作業の連続であったことを最後ではあるが明記しておきたい。　（高橋央修）

第二章　本墳の位置と歴史的環境

海に面することのない県の一つである山梨県の地勢は，まさに多くの山々とその間を縫って流れる大小河川によって織りなされるといってよい。本県はいわゆる中部高地の一角を占め，四囲を数々の高山にかこまれる。すなわち，南方は富士山がその巨峰を横たえ，東は丹沢山地に，さらに北方へは関東山地の雲取山・三宝山・金峰山と標高 2,000m を越す山々が続き，茅ケ岳を介して八ケ岳に至っている。また西側は南アルプスの連山がつらなり駒ケ岳・白根山・荒川岳・赤石岳と標高 3,000m 級の山々が壁となってそびえている。この様に本県を囲む山々は屏風の様に連なり外部との連絡を困難なものとしている。この山々の僅かな隙間を流れ出す河川ぞいに交通路は開かれ，山中湖に源を発し関東平野を流れ相模湾にそそぐ相模川は，本県を主に上流部は桂川と称される。また甲府盆地の水路を集め，南下し駿河湾へと流れ出す富士川流域も，桂川流域とともに主要な交通路となっている。

甲府盆地は山梨県のほぼ中央部に位置し，周囲の山々の高さからすり鉢の底の様な状況を呈する。地形は北西方向に当る諏訪盆地，さらに遠く松本平へと続き，これらと一構造盆地をなすものである（山梨県地質図編纂委員会 1970）。

本県は甲府盆地を除くと平地に乏しく，富士北麓の清流を集める桂川ぞいの狭少な河岸段丘の続く郡内地方と，富士川中流域の平坦地程度しかなく，甲府盆地が主要な生産基盤となっていることはいうまでもない。

この甲府盆地の主要河川は，笛吹川水系と釜無川水系に二分される。両者は盆地南西部の鰍沢口付近で合流し富士川となる。そのため盆地は両水系を中心にY字状の広がりをみせ，釜無川上流は諏訪湖畔に続き，笛吹川上流は北西へ大菩薩峠を経て奥多摩へ，また雁坂峠を経て秩父を介して埼玉・群馬方面に，東は笹子峠を経て郡内へ，南東は御坂峠を経て富士北麓へと続く経路が開かれている。この富士北麓と盆地とを隔てるのが御坂山塊であり，山梨県の主要な前期古墳の集中地域である曽根丘陵は御坂山塊よりテラス状に張り出している。この曽根丘陵直下を笛吹川は西流し，丘陵が途切れる上流で金川・日川・重川等の支流に分かれ，多くの扇状地を形成し複雑な複合扇状地となっている。盆地北側は笛吹川と釜無川に挟まれ，中間には大蔵経寺山・愛宕山が突出し，北西の釜無川水系では丘陵状の地形が八ケ岳山麓に向かって続いている。

本墳は盆地南縁部の曽根丘陵上に位置している。曽根丘陵は御坂山塊より続く丘陵であるが，東は境川村より西は市川大門町に至るもので，東西約 12.5km，南北約 3 km の広がりが認められる。標高は 270～400m と一様ではなく，丘陵の先端近くには東より坊ケ峰（392.4m）・東山（340.3m）・米倉山（380m）・王塚（341.8m）等の高位段丘と，これらの間を丘陵を

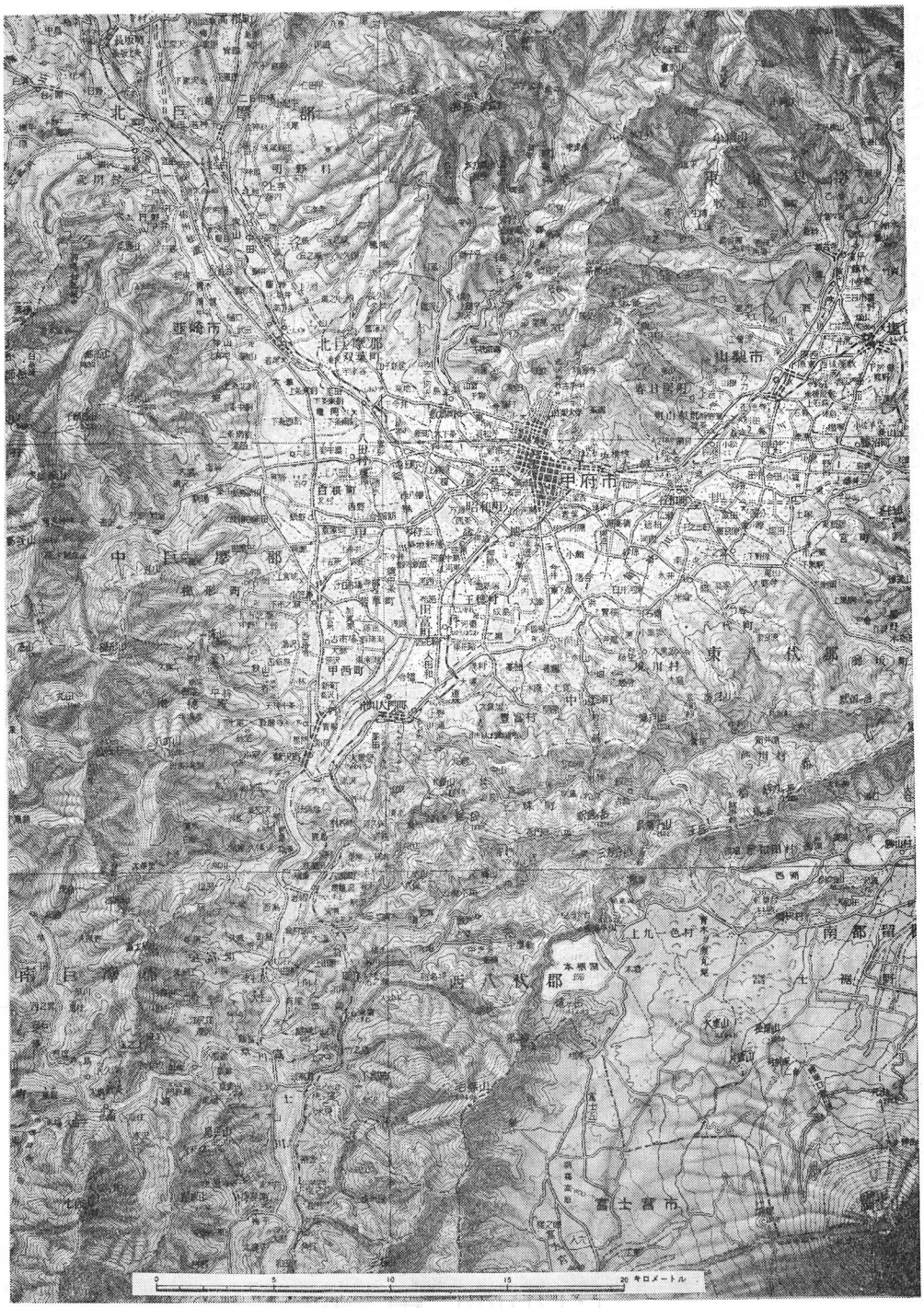


図 1　茶塚古墳・周辺地形図（その1）

図 2　茶塚古墳・周辺地形図（その2）

分断する様に東より境川・狭間川・芋沢川・間門川・滝戸川・七覚川・浅利川が盆地に向って流れ出し，平坦な低地を経て笛吹川に至る。この曽根丘陵の中央部が中道町にあたり，滝戸川を挟み東山と米倉山が対峙している。東山北麓には多くの古墳が点在し，傾斜変換線付近に銚子塚古墳・丸山塚古墳・大丸山塚古墳が占地し，本墳はこの一角を占める。

本墳の位置する曽根丘陵より盆地を南北に縦断すると，丘陵上の東山は標高 340m を計り，北に向って下り傾斜変換線付近で 260～255m となり，255m 弱で低地が続き笛吹川左岸の堤防（258m）に至る，この間約 600m である。笛吹川右岸は盆地を南北に流れ笛吹川に合流する荒川と濁川に挟まれた低地が続き，左岸より 1～2 m低くなり 3 kmほど続き，その先は僅かに上り勾配となり 4 km で約10m 高くなり，盆地北縁部の愛宕山の傾斜変換線に至り，愛宕山で 427.9m を計る。

曽根丘陵を中心とする地域の歴史的環境は，古く旧石器時代に遡る。米倉山を中心に旧石器時代に属する遺跡の分布が知られるが，現在のところ断片的な資料に止まる(山本1955他)。しかし本県において旧石器時代の遺跡は，富士川下流域の富沢町を中心とする遺跡群（富沢町史編纂室1971他）と，近年発見された郡内の都留市と道志村の境界付近の杯窪遺跡が調査された程度で，両者とも地形上の制約から小規模な遺跡であり，本県において該期の大規模な遺跡が発見されるとすれば，曽根丘陵上の地域をおいて他にはないであろう。

縄文時代は早期より後期まで各時期にわたり資料は認められているが，該期の調査が北巨摩・峡東・郡内の地に集中し，曽根丘陵上での調査は少なく，中道町地内では上野原遺跡の調査が知られる（吉田1972）。

弥生時代の遺跡の調査は著しく遅れている。断片的な資料が採集され遺跡の分布が推定されているにすぎない（山本1974）。その成果によれば曽根丘陵上には遺跡の分布が密であるという。しかし該期の住居址はいまだ一基も発見されないというのが現状であるが，近年弥生時代末期に位置づけられる方形周溝墓が峡東の地で発見され（山本他1974），引き続き調査が継続されその数は増加する様である。さらに盆地西部の敷島町で方形周溝墓・住居址の発見があり，また曽根丘陵西端の三珠町においても方形周溝墓が認められ，弥生時代終末より古墳時代初頭にかけての様相はしだいに明らかにされつつある。また本墳の北側の低地を中心に，弥生後期には谷水田が開かれたとする指摘があり（山本1974）今後の調査の進展に期待が寄せられている。

この様な状況は古墳時代前半においても同様である。地表に存在を示す古墳については分布が確認され，出土遺物等もよく知られるようになったが，それらの存立基盤となる生産地帯・集落址の調査はほとんど行われず，境川村で数基の住居址が調査されたにすぎない（萩原他1974）。

前期古墳については，本墳の周辺に銚子塚古墳・大丸山塚古墳・丸山塚古墳と，本県でも最大級の前方後円墳が集中し，銚子塚や大丸山塚は京都府大塚山古墳・岡山県車塚古墳出土鏡と同笵関係が指摘されている（小林1961）。以上の様な古式前方後円墳の分布から，本県への古

墳文化の波及経路は，東海地方より富士北麓を経て右左口峠に至り，古式古墳の集中する本地域に到達したとする中道往還が唱えられて久しいが，（藤森1966）それ以降調査の進展もなく，富士川遡上説が別の視点より提示された（角川1970）以外は著しい成果は得られなかった。そこで本県の古墳の成立は，前Ⅱ期に大和勢力の東国支配のための前進拠点として，銚子塚古墳を始めとする大型の前方後円墳が構築され，その拠点が東漸するにしたがい，その政治的意義が消失し古墳の規模も縮少するという評価が定着するに至っている（甘粕 1966）。

成立期の古墳は本墳周辺に集中したが，これらに続く時期の古墳は曽根丘陵上全域に拡散し，西より大塚古墳・天神山古墳・本墳（茶塚古墳）・八乙女古墳群1号・2号墳・八代銚子塚古墳が認められるが，その規模は縮少し最大の天神山古墳も銚子塚古墳に及ばない。これらの古墳の副葬品の内容は正式な調査が本墳が最初であることから不明な点が多く，天神山古墳以外は既に盗掘の厄にあっている（小林・里村1975A）。

後期古墳時代のメルクマールである横穴式石室墳は，曽根丘陵上には少なく，曽根丘陵の東に続く扇状地地域に分布が密である。このことは主要交通路が中道往還より御坂峠を経て河口湖畔に至る律令時代の官道御坂路が既に開かれ，横穴式石室墳の副葬品に見られる馬具等から，馬匹による文化に移行すると考えられている（藤森1970）。前方後円墳は王塚古墳・八代狐塚古墳の帆立貝形の墳形のものが残る程度で，大規模な古墳は，姥塚古墳（大塚1966）・地蔵塚古墳（小林・里村1975B）・加牟那塚古墳・万寿森古墳（小林・里村1975C）等の大型横穴式石室墳が主流をなし，これらは曽根丘陵上では築かれることはなかった。また群集墳の分布は盆地北縁にも拡大し，これらの地域を中心として国分寺・国分尼寺が建立され，国府も設置され(木下1962)，古墳時代は終焉を迎えるが，本墳の北方盆地を挟さんで対峙する大蔵経寺山周辺では，横根積石塚群（飯島他1974）を初めとする特異な積石塚の分布が知られ，古墳時代の終末に色彩りをそえることになる。

（菱山かつよ）

参　考　文　献

甘粕　健：1966「古墳時代の展開とその終末」『日本考古学』Ⅴ所収

飯島進他：1974『甲斐の古墳』Ⅰ

大塚初重：1966「山梨県姥塚古墳について」『富士国立公園博物館研究報』16号

角川源義：1970「あづまの国」『古代の日本』7所収

木下　良：1962「国府研究の諸問題―甲斐国府をめぐって」『文化史学』21

小林行雄：1961「同笵鏡考」『古墳時代の研究』所収

小林広和・里村晃一：1975A「山梨県境川村八乙女古墳群の現状」『信濃』27―6

小林広和・里村晃一：1975B「甲斐国分寺周辺における後期古墳の様相」『古代学研究』77

小林広和・里村晃一：1975C「山梨県の大型横穴式石室墳について」『信濃』27―4

富沢町史編纂室：1971『富沢町の先史文化』

萩原三雄他：1974『京原』山梨県教育委員会

山梨県地質図編纂委員会：1970『山梨県地質誌』

山本寿々雄：「1974方形周溝墓等の調査」山梨県教育委員会

第三章　本墳の形態

第一節　墳丘の現状

茶塚古墳の占地する曽根丘陵は，南方の御坂山塊より続く丘陵地帯の総称である。御坂山塊に属する日蔭山は標高 1025.3mを計り，その西方を通る右左口峠は標高 850m前後をピークに南北に下る。曽根丘陵は中道町地内においては 310～330mのなだらかな丘陵地帯をなし，丘陵先端部の高位段丘である東山山頂で 340.2m を計り，その先で急激に傾斜し盆地に至っている。

本墳は西に滝戸川，東は間門川によって切られる東山斜面の北側に位置している。この一帯は古墳の集中する地域で，斜面上には多数の円墳・小型前方後円墳が分布することが知られるが，著名なものとしては丘陵上の大丸山古墳，斜面を下った銚子塚古墳の両前方後円墳と円墳の丸山塚古墳という本県においては最大級の規模を有する古墳に近接する。丘陵上の大丸山塚古墳は標高 315～305m を計り，盆地に向かい急傾斜して下った傾斜変換線が標高 260～270mで，その先の標高 250～255mの地点に茶塚古墳は位置している。すなわち大丸山塚古墳を下った地点といえる。また本墳の西方には標高 250m の等高線ぞいに丸山塚古墳，さらに銚子塚古墳が続く。銚子塚古墳は標高 260m を計るが，盆地が西方に低く傾斜すること，傾斜変換線の方向を考慮すれば，この三古墳は本墳より西南方向に一列にならび，近似する立地条件をもつといえよう。

本墳の実測図（第３図）は墳丘の最高部の任意の地点を０m としたもので海抜ではないが，大縮尺の地形図との対比から－４mの等高線が，標高 255m 前後にあたるものと思われる。埋葬主体部の存在する墳丘の東に続く墳丘は樹木が生い茂り，この両者の隔たりは 10m しかない。すなわち両者は距離的には別個のものとは考えにくいのが現状である。しかし東側の墳丘は測量が実施出来なかったため実測図に空白部を残す。周辺部よりの観察では，西側の墳丘が１m前後高く規模も大きいことは容易に看取される。墳丘の南には東西方向に一本の道路が走り，一段高くなっている。さらに道路の南側は桑園・果樹園に利用される上り勾配の斜面となり丘陵へと続いている。道路より北側は墳丘もふくめ桑園が一面に広がりなだらかに下り，標高 280m 前後でほぼ平坦面となり水田が続き笛吹川堤防に至っている。

西側の墳丘の最高位より北に寄った位置に埋葬主体部が存在し，－１m までの等高線はほぼ円形となるが，－２m では東西の墳丘を接続することなく東側の丘墳の南方を通過し，両者が別個の墳丘という状態を示す。－３m は両者をつなぎ，－４mに至ると東側の墳丘は既に終了し変化はない。この－４mの等高線にそって一段下がり，小川が流れ一部は竹やぶが存在し桑園と境をなしている。西側の墳丘の埋葬主体部より北半は低くなるに従い等高線は直線状を呈

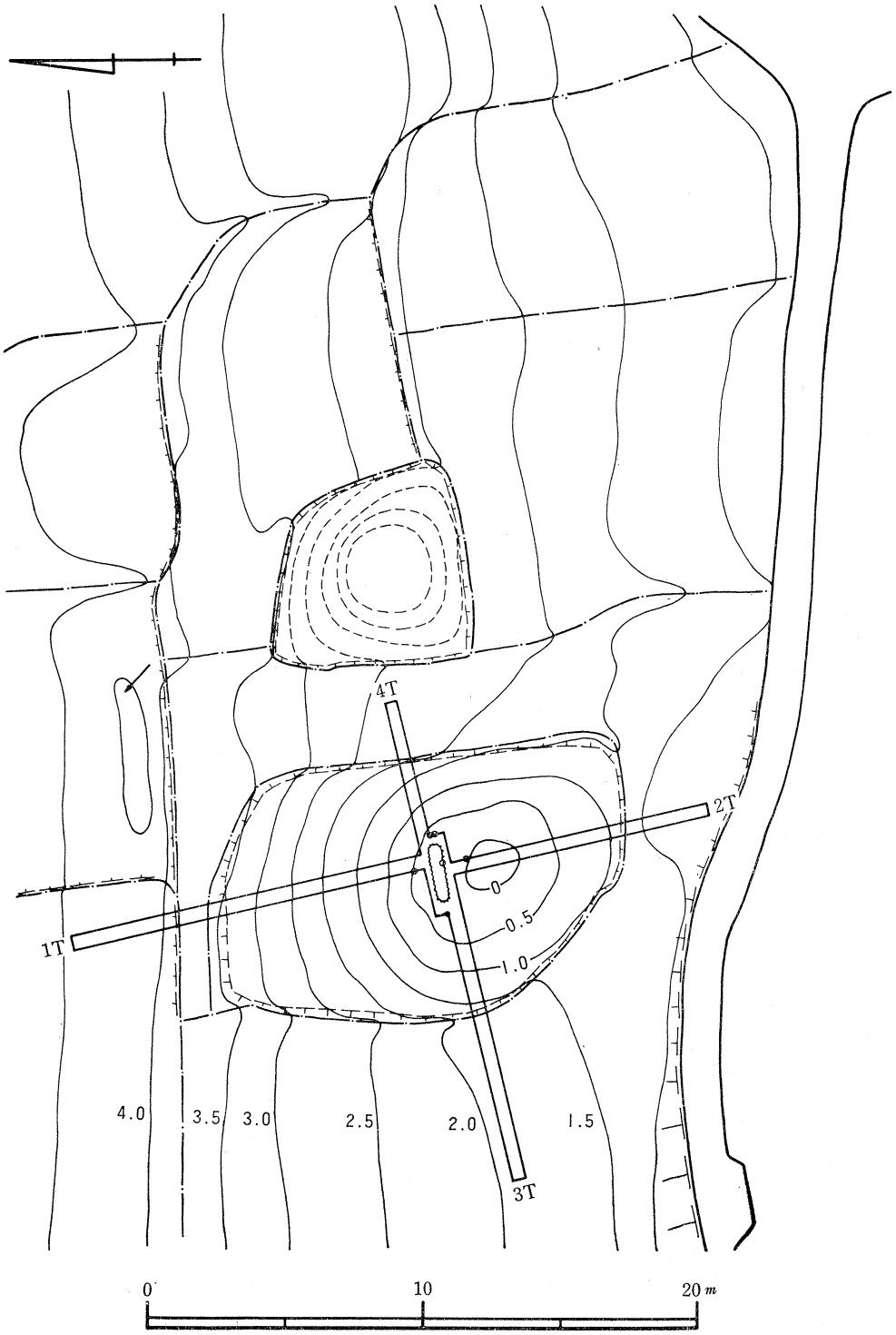


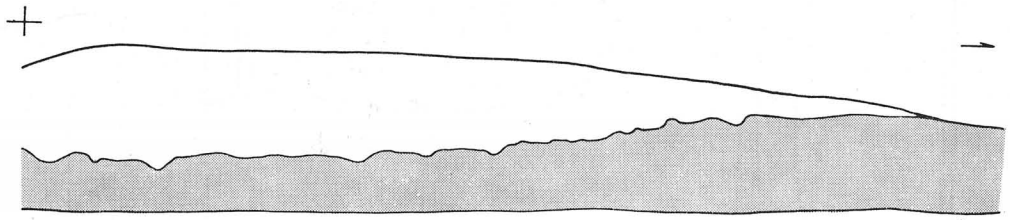
図 3　茶塚古墳・墳丘測量図

するが，南半は比高が小さく特徴的なものは見い出せない。両者とも現状の墳端は著しく切り立った状態で，周囲よりかなり削られたことは明らかである。そのため平面形は多角形を呈する。

本墳の北方の笛吹川堤防上より遠望したプロフィールは，両者一連の前方後円墳に近く2基の独立した墳丘とは考えにくい。

第二節　築成について

埋葬主体部の位置する西側の墳丘は全域を桑園に覆われ，周囲の桑園の平坦面とは明瞭に異なる。墳丘の調査は埋葬主体部の主軸方向と，主軸と直交する方向にトレンチを設定したが，墳端を確認するには至らなかった。各トレンチの状況はほぼ一様で，耕作土30～50cm程度をもって第一層をなす。続く第二層は粘性の強い黄褐色土で堅くしまっている。部分的に桑の根がはいり込み切れるものの，墳丘全域に認められ墳丘築成時の外表面となったものと思われる。調査はこの第二層の上面を確認するにとどまった部分が大半を占めるため，本墳築成前の地表面の状況を充分把握し得るものではない。しかし埋葬主体部の南側，すなわち本墳の現状での最高部を第三層まで掘り下げている。この第三層は第二層にも増して堅くしまった粘土層で黒褐色を呈するが，上面は凹凸が認められ南方に向い幾分高く傾斜し，墳丘の南端部では第二層が消失し，第三層が耕作土と接し傾斜は逆に低く落ちている。第三層の状況から判断すれば，第三層の上面の南北に下る斜面上に主体部を構築し第二層の黄褐色土をもって墳丘を築き，南側は一部地表面（第三層）を削って墳形を整えたものと思われるが，道路の下となるため不明である。



第1層　黄褐色土 粘性強くハード所々にローム・ブロック及び2cm～10cm大の小石赤色及び黄色スコリアを含む
第2層　黒褐色土 粘性強くハード0.5mm～5cm大の小石・カーボン粒子・赤色黄色粒子を含む

図 4　墳丘第2トレンチ・セクション図

第三節　墳形について

既に述べた様に墳丘の調査がはなはだ不備であるため，明確な墳形・規模を提示することは不可能である。ここでは現状から考えられる墳形・規模の推定を試みたい。

本墳が東側の墳丘も含めた前方後円墳であろうとする前提に立って記述を進める。東側の墳丘の調査がまったく実施されない現状では，東西いずれかを前方部・後円部と推定することは将来逆転することもありうるが，現状では平面形が東側が円形，西側が方形であり，両者のプロフィールからも東側が後円部，西側が前方部であると考える。

さて墳形の復元であるが，現地表面の形状の変形は著しいものがある。一例をあげれば本墳の調査中に，集中豪雨により1m近くのトレンチが2～3日の間にみる陰もなく埋めつくされるという現象を目のあたりにした。本墳の現状がいかに当時の状態と隔たるかはいうまでもないであろう。

主軸は西側の墳丘の埋葬主体部の主軸の延長線が，東側の墳丘の中央を通過することから，墳丘の主軸とも一致するものと考える。復元の基準となる尺度は埋葬主体部である石室の内部の規模しか拠るところがなく，これによって本墳の構築企画全体を律し切ることは困難である。そこで西側の墳丘の石室の中心部と東側の墳丘の中心部の距離21m（両墳丘の主体部間の距離と推定）を基準単位として復元する。後円部の径はこの21mを直径とする円が，現状の東側の墳丘を一まわり大きくする程度となり，主軸上に本墳の後端を定める。前方部は現状からは北半分を想定し，その対称形を南半分に求めた。前方部巾は40m前後となり，本墳の全長は42m程度で，基準単位の2倍となる。以上のことから本墳は後円部の直径が墳丘長の二分の一，また前方部巾がほぼ墳丘の全長に匹敵するという，非常に前方部の発達した墳形を想定することになった。このことは前方部の高さが後円部のそれを若干上まわっていることからも妥当な結果であろう。

（香川洋子・岡村和子）

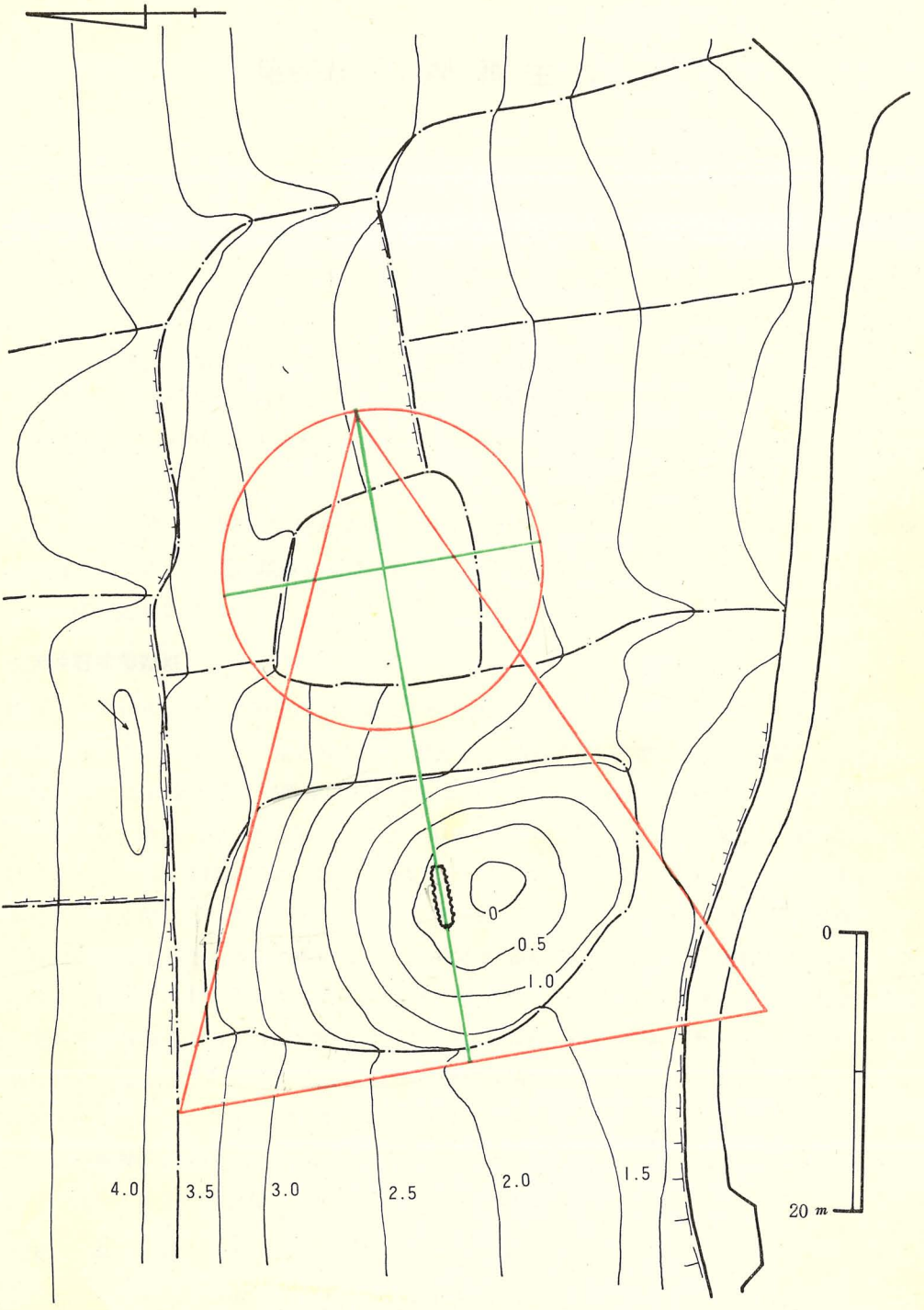


図 5　茶塚古墳・墳丘想定図

第四章　埋葬主体部

第一節　石　　室

本墳の調査の端緒となったのは埋葬主体部である竪穴式石室の天井石の一部が耕作中に露出したことによるが，その位置が現状での墳丘の頂部より北に寄ることから，最初は石室の位置が南北方向，すなわち墳丘の主軸方向に直交するものと想定して調査が開始された。調査が進むにしたがいその主軸方向は予想に反し東西方向であること，石室上部はかなり墳丘が削られ，天井石の上部を全面にわたって覆う礫群がすぐ露出したこと，また貧弱な墳丘に比較して入念に構築された大型の竪穴式石室がしだいに姿を現わしたことである。ここでは発掘の経過を追って順次記述を進める。

なお，東側の墳丘の頂部にも埋葬主体部が存在したらしいが，地主の話等を総合すると，竪穴式石室であること，既に盗掘を受けていること等であるが，今回の調査の対象外となったためここでは記述をさける。

＜天井石被覆礫群＞

耕作中に発見されたのは石室の中央部にあたる大型の天井石の一部であった。そこでこの地点を中心としてトレンチが設定されたが，天井石上部には広く礫群が天井石を覆うことが明らかとなった。これを天井石被覆礫群と仮称しよう。この天井石被覆礫群は大きいものは人頭大，小さいものは拳大で，天井石の上部は小型のものが充塡され，二重三重になるため，天井石はほとんどその姿を認めることはできない。周辺部にいくに従い大型化し人頭大のものが外部を巡るように位置し，構築時に何らかの配慮があったものと思われる。天井石被覆礫群に用いられた石材はまったく加工の痕跡はなく，付近の笛吹川の河原等より運ばれた河原石であり，角がとれたものが大部分を占める。北半部や東端部は石室上に礫が配置されるだけであるが，南半部や西端部は石室外にも密度は落ちるものの礫の配置が認められる。石室上部の墳丘が削られていることから，北半部や東端部の礫群は墳丘の斜面上に幾分転落したものと思われ，北・東のトレンチ内から時折礫が検出された。

天井石被覆礫群は中央部と西側の一部に認められず，天井石が直接露出する個所が存在する。この部分では若干の土師片が検出され，一部は天井石が石室内に落ち込んでいる。

＜天　井　石＞

天井石は全部で15枚認められ，縦長の面のとれた角柱状の石材が主に用いられている。天井石の隙間には拳大の礫が充塡され，さらに灰色の良質の粘土によって完全に密閉され，さらに先述の天井石被覆礫群により覆われるという入念なつくりが窺える。

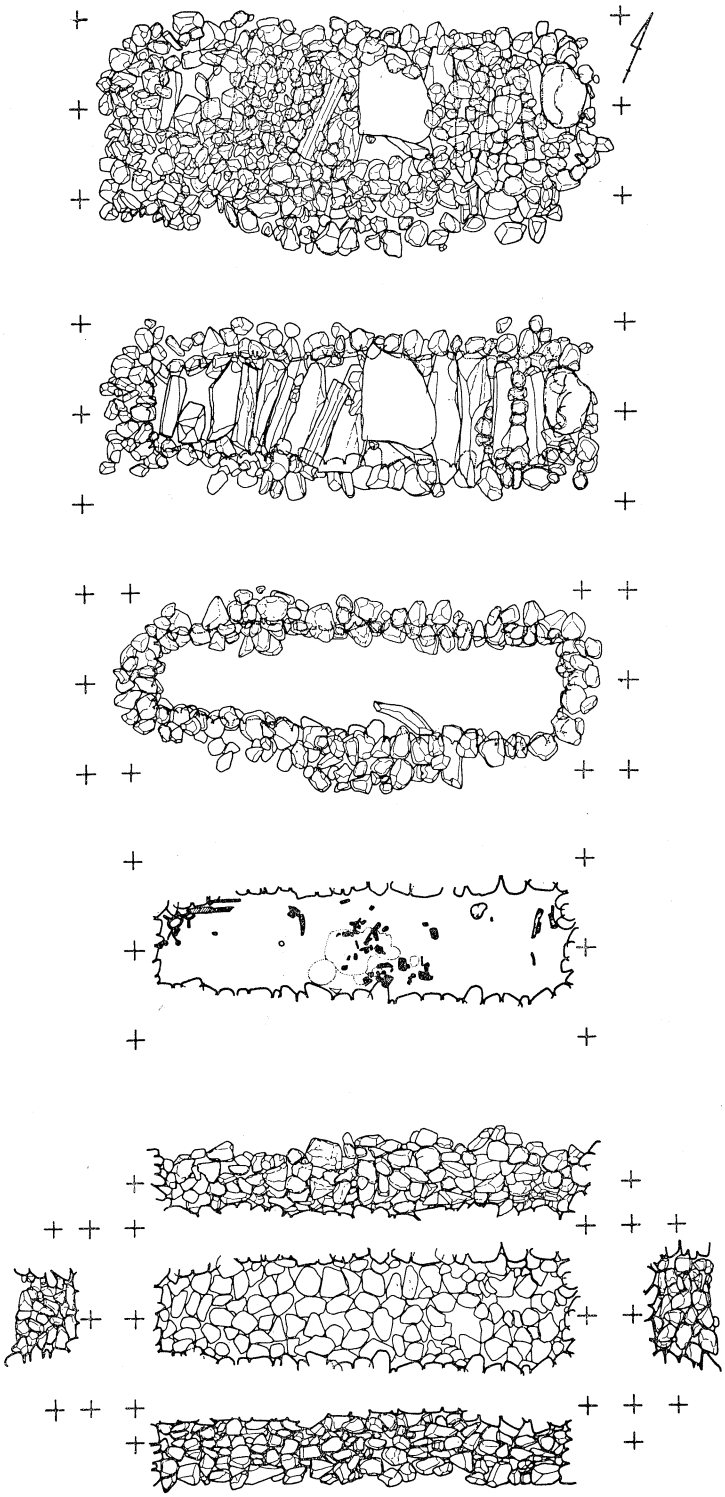


図 6　石室発掘経過図

天井石に用いられた石材は礫群の礫とは異なり本墳の周辺では産出し得ないものであり，搬入品であることは明らかである。これらの石材は断面が整えられ，接する天井石相互においては逆方向に整形され隙間が生じにくいように配慮され，いずれも石室の巾を僅かに上まわる程度であることから，搬入後に加工され石室上に構架されたものであろう。

天井石被覆礫群の存在しない部分は，天井石が石室内に落ち込み，西側では2枚中央では1枚が落ち丁度人間一人が出入りするのに充分な穴がぽっかりあいている。中央の天井石だけは平坦で広がり角柱状の他のものとは異なるが，この天井石は石室巾を完全に満たし切れず，石室内に落ち込んだ一枚の天井石は，この空間を埋めるため縦方向に構架されていた可能性もあろう。東端の奥壁上の石は大型で一部が石室内へ突出している，これも天井石に含めると全部で16枚となるが，この石は未加工である。

天井石に接する側壁最上部の石材は北半部では幾分石室内に張り出すように構築され，人頭大の礫を主としその隙間を埋めるように小型の石材が認められるが，これらのほとんどは河原石で加工はないが，一部には角柱状の大型のものも交じえる。

＜側　　壁＞

側壁は乱雑に河原石が積まれただけの様で現状では隙間が随所に認められ，決して丁寧に築きあげられたといえるものではない。しかし南北両側壁とも石室内に落ち込んだ石材が多く認められ，これらは小口を壁面に位置する様に積まれたものが多く，その他の石材も加工こそないものの平坦な面を壁面に位置させようとする配慮が認められ，当時は現状よりは整然とした壁面が構築されたものであろう。

北壁は南壁に比べ大型の石材が多く認められ，斜面という意識が働いた結果であろうか。両側壁とも石材は4～5段に積み上げて構築するが，概して下部にいくに従い石材が小型化する傾向が認められる。石室の最下段では小口積みを中心として上端面をそろえながら順次上部へと石材を積み上げ壁面を構築したものであろうが，大きさの不揃いな未加工の石材を4～5段積み上げることは困難な作業であり，所々に拳大の礫をつめる結果となっている。

＜奥　　壁＞

側壁と同様に河原石を積み上げたもので，下部へいくほど石材は小型化の傾向をたどるが，側壁と異なり小口の意識が少なく，中には縦方向に石材を充塡するかの様な構架方向が用いられ，側壁と類似した形状ながら規模の相違から強度等の意識が少なく，単に面としての壁面構築に終始したかの様な感がある。南側壁側は東西両壁とも石室内に傾斜するのに対し，北側壁側の奥壁は逆となっているが，こちらは石材が石室内に崩れ落ちた結果であり，本来は南側同様に内側に向かい傾斜するものと考えられる。

プランからもわかるように本石室は明瞭な矩形ではなく，側壁と奥壁の境がはっきりせずコーナーがカーブするため，側壁と奥壁のいずれを先に築いたか明らかではないが，いづれが先にせよ，両者併行して作業は進行したものであろう。

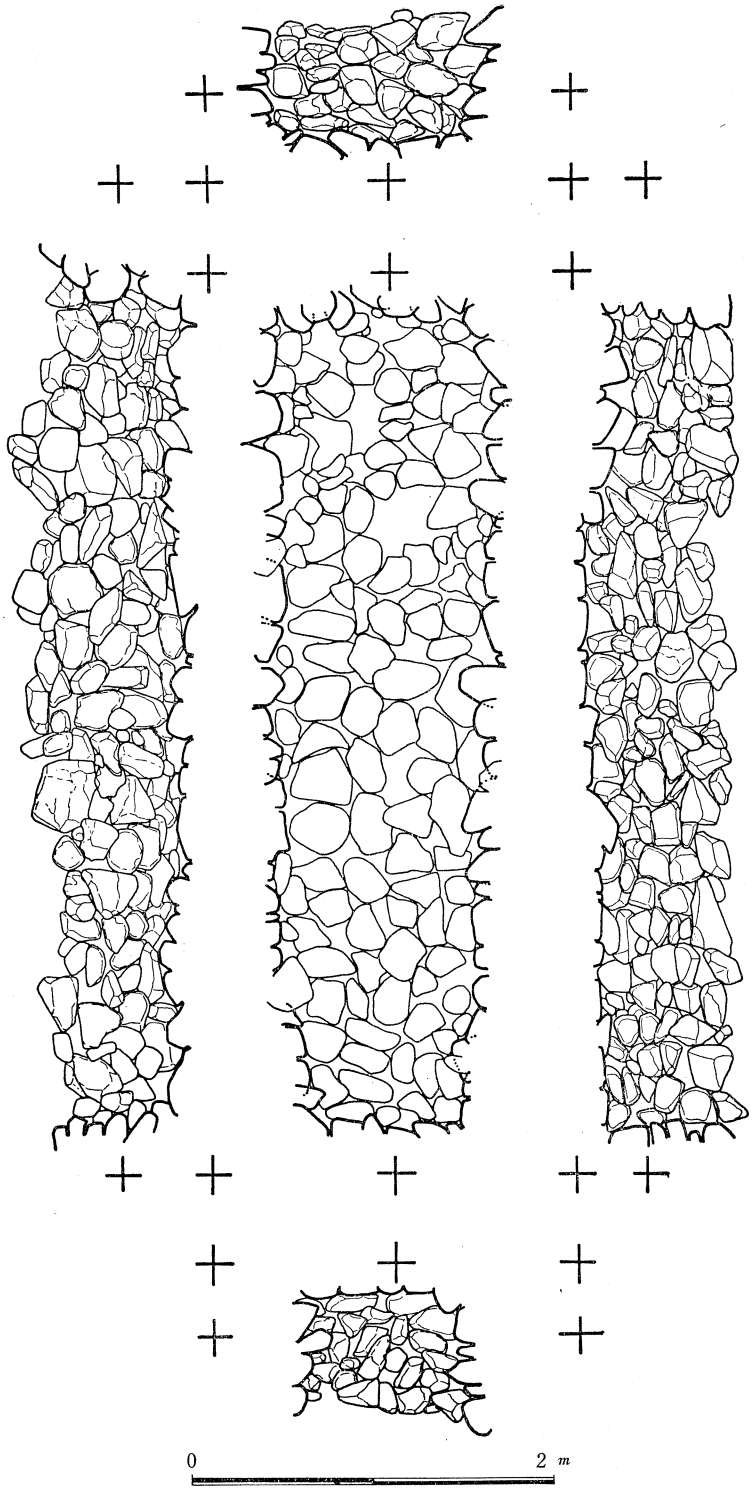


図 7　石 室 実 測 図

1層　茶褐色土層
2層　黒褐色土層
3層　黒褐色土層
4層　黒褐色土層
5層　茶褐色土層
6層　褐色土層
7層　茶褐色土層
8層　黒褐色土層
9層　黒褐色土層
10層　黒褐色土層
11層　明褐色土層
12層　茶褐色土層
13層　茶褐色土層
（図版4参照）

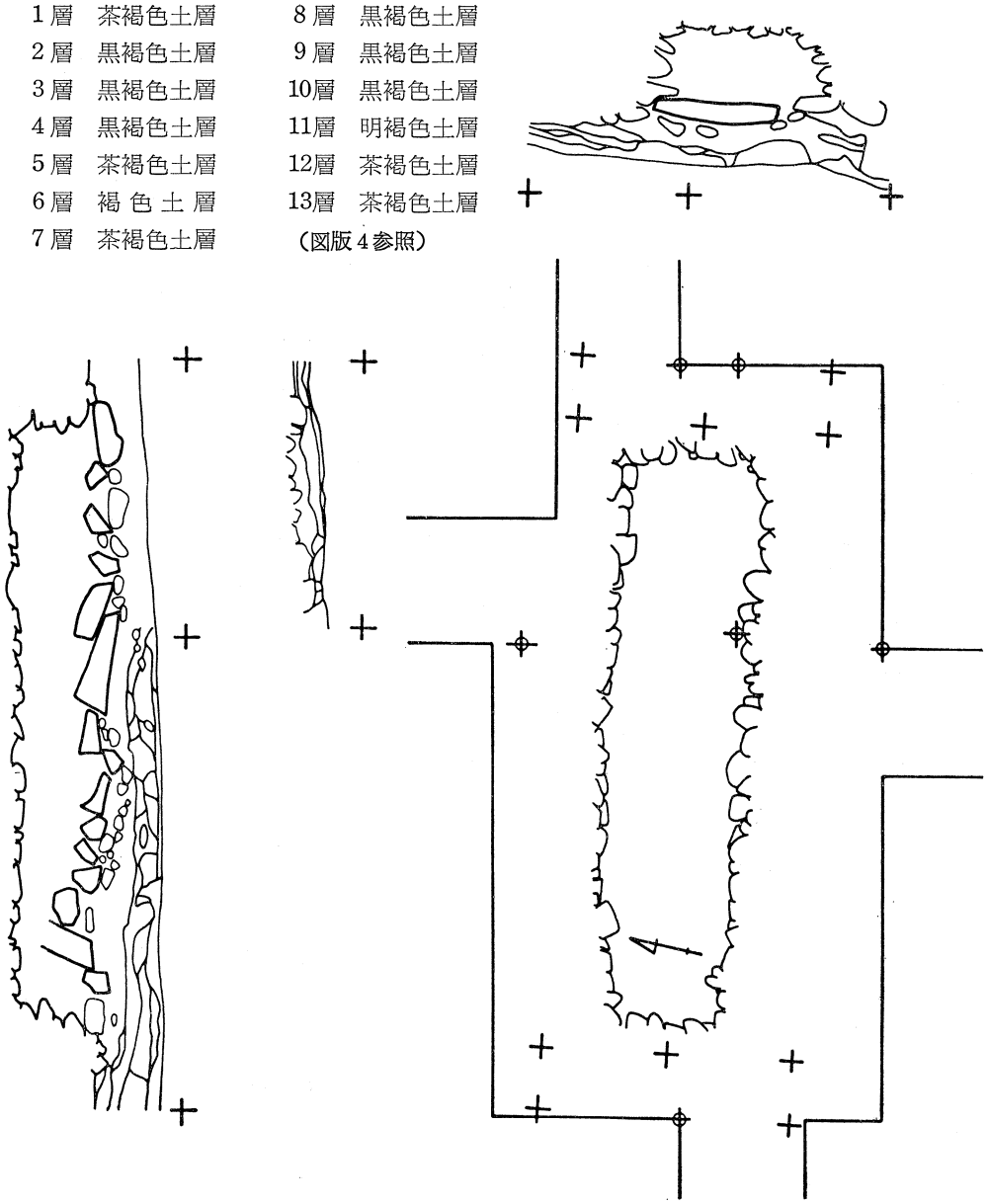


図 8　石 室 断 面 図

＜敷　　石＞

石室内部には天井石の落ち込んだ部分から土砂が入り込み，また側壁・奥壁の崩れ落ちた石材が散乱していた。これらを除去していく過程で副葬品が検出され，その下には石室の床面全域にわたる敷石が認められた。この敷石に用いられた石材も特に加工された痕跡も認められず，河原石の平坦なものを選択したものにすぎない。そこで当然のことながら敷石面は平坦な一平面をなさず，段差や凹凸が随所に存在するが，石室中央は両端に比べ幾分低く窪んでいる。この敷石は側壁の下にはいり込むものは少なく，側壁・奥壁の完成後ないしは作業開始後に，布設された可能性もあろう。壁面完成後に敷石が敷かれたとすれば，石室が天井石を除いて完成した段階で埋葬がおこわれたことになり，一般の竪穴式石室における埋葬の順序と異なることになるが，本墳の様に墓坑を掘らず地表面に石室を築く場合，外的要因等を考慮すれば，逆の順序も一考を要するであろう。しかし今回の調査では敷石を除去し，調査を進めたわけではないため，あくまで推論の域を出るものでないことはいうまでもない。

＜規　　模＞

主軸は北東一南西方向で，全長4.52m，幅は東1.12m，中央1m前後，西0.84m，高さ0.6～0.7mを計る。石室幅が西に向うに従い減少するのは，天井石の石材が小型化することに対応し，石材による規制が働いた結果と考えられる。

本石室の上部を覆った土砂の北半部はほとんど流失し天井石被覆礫群・天井石が僅かの耕作土の下に存在した。しかし本石室が盗掘にあったという話は伝えられていない。東側の墳丘（後円部）の埋葬主体部は何度も掘られたようであるが，本石室の存在は一般に知られず，平坦な墳丘は古墳としての意識をも人々に与えなかったようである。しかし実際には二ケ所の盗掘坑が存在し，副葬品の主要なものは大半が持ち去られていた。この盗掘はおそらく盗掘坑の周辺より検出された土師器片の時期，すなわち平安期以降の古い時代の仕業であり，そのころには本墳の墳形も変形は少なく，充分に古墳と認識できる状況にあったものであろう。

第二節　遺物の出土状態

既に盗掘を受けていたため，副葬品の全貌を明らかとするには至らないが，残存する遺物によって概略は把握できるものと思われる。石室内部における遺物の分布は非常に偏りが認められ，石室中央部を中心とするブロックの二ケ所に集中し，北東部の人骨を除くと他の場所からはほとんど遺物が検出されず，図示した様に石室東西に大きく空白部が存在する。遺物の集中する部分は盗掘坑と一致または近接することから，これらの遺物は盗掘坑を開口する際に流入した土砂で埋没し偶然にも盗掘の災いを免れたものが多く，副葬時の原位置を保っている可能性が大である。逆に他の部分に副葬された遺物はそのすべてが持ち去られ，結果として遺物分布の空白部が残ったものと考えられる。特に本石室の被葬者であるはずの人骨は，石室の東端

に移動された様な不自然な位置に散乱する。残存する遺物は武具・馬具等の鉄製品が大部分を占め，僅かに金銅製の帯金具・金箔を施した鉄片と，崩れ落ちた石材の下から青銅製の三環鈴が認められたにすぎず，目ぼしい副葬品は盗掘により完全に持ち去られたものと思われる。

中央のブロックでは南側壁ぞいに土砂が流入し石材の散乱が著しい。これらを除去していく途中で次々と鉄製品が検出された。ここでは武具が主体をなし，短甲破片，鉄製小札・鉄鏃が多数検出された。それに続くブロック中央部では，短甲破片，鉄製小札・鉄鏃に混って頸甲破片と考えられる鉄片，金銅製小札・金箔を施した鉄片が検出されたが，いずれも小型の製品ばかりである。さらにブロックの北西端は他と若干隔たるが，石材の間から短甲の破片が検出されている。

本墳の性格を明らかにするために重要な遺物は，石室北西隅を中心に出土した馬具を主とする一群であろう。北側壁ぞいに二本の鉄鉾が検出され，一本は壁面に接する様に，他の一本はこれと平行し，一部は接し錆付いて水平に存在した。鉄鉾の西より石室のコーナーにかけては一対の木芯鉄板被輪鐙が検出された。コーナーに位置する鐙は完形品で，石室の壁に立て掛ける様に位置し，他は欠損品で上半部が石室内に位置するが，下半部は先の完形品と接し同様に位置することから，当初は完形品と並べて立て掛けてあったものが，鉄部の腐食によって半分に折れ，上半部が石室内に落ちたものと考えられる。コーナーをまわって奥壁ぞいには，奥壁より崩れ落ちた石材の中から，衝・引手等の馬具が続いて発見され，さらに奥壁中央に接して石材の間より三環鈴が検出された。

人骨は石室北東部に位置し，頭骨が北側壁東端より1 m 隔った位置に顔面を下に向けて位置し，他の部分の骨片は存在せず孤立する。北東コーナーでは大腿骨片が3本石材の間に埋って検出されたが，やはり他の骨片は認められなかった。石室内に流入した土砂の中からは木炭片が時折検出され，出土した鉄片の中に釘頭と考えられる製品も存在することから，被葬者は木棺によって埋葬されたものと考えられるが，その位置は現状の様に石室の隅ではなく，遺物の集中した中央ブロックを中心としたものであることはいうまでもない。馬具・武具等は今回検出された副葬品の一部にすぎないが，埋葬時には武具・馬具一式が，さらに遺骸を飾った装身具等も存在したことは想像に難くないであろう。　（遠藤和子・桜井節子）

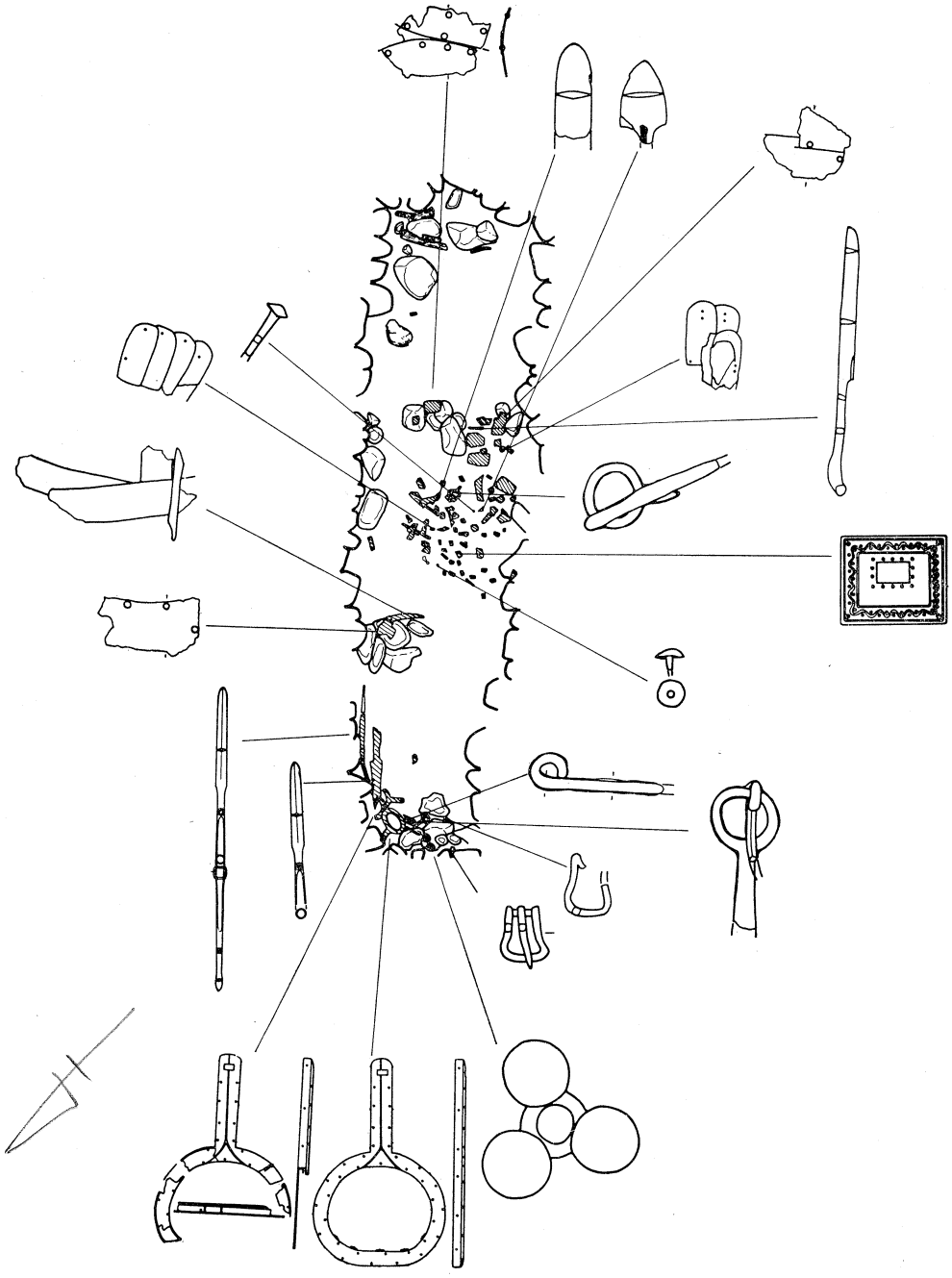


図 9　出 土 状 況 図

第五章　出土遺物

第一節　武　　具

○横矧板鉄鋲留短甲（第10図）

石室内中央付近に散乱して出土しており，埋設時の位置はほぼ中央にかけて位置したものと考えられる。いずれも破片であり原形をとどめない。

破片 №1は胴部下半部にあたる個所であり，外側にゆるやかな湾曲を呈している。鋲留は8ケ所に検出が可能であり，ほぼ等間隔に認められる。破片の現状では三枚の鉄板の組合せにより，一枚の連続した鉄板と同様の効果をもたせている。つまり二枚の鉄板の端を合わせ，その裏側に一枚の鉄板をあてがい，表面より鉄鋲留する技法が認められ，横矧板鉄鋲留短甲の最も発達した段階の技法の一つとして特徴づけられているものである。№2～8は №1と同一個体と考えられるものであるが，現状では二枚の鉄板を直接重ね，鉄鋲で固定している様にみえる。№4においては，鉄板下半部に剝離痕が検出され，表面における鉄板の欠損が明らかとなり，この様な破片自体も №1と同様な仕上り面を構成していたものと考えられる。

○鉄小札（第11・12・13）

鉄製の小札は錆化が著しく進行する性質から，革も紐も小札と一緒に錆びて固まった例が多くの報告書に記されているが，本墳においても二段ないし一段の5個から2個の小札が綴じたままの形で固着した塊が数個検出されている。

小札の形態には頭円下直のものと，隅丸長方形のものの二種類が認められ，前者の方がやや小形である。石室内中央部のみに集中して出土したものの，量的には著しく少なく挂甲一領分には致底及ぶものではない。

○冑地板（第12図 31・第13図 5・7）

冑は地板をごく僅かに遺存するのみで，原形を復元することは困難である。

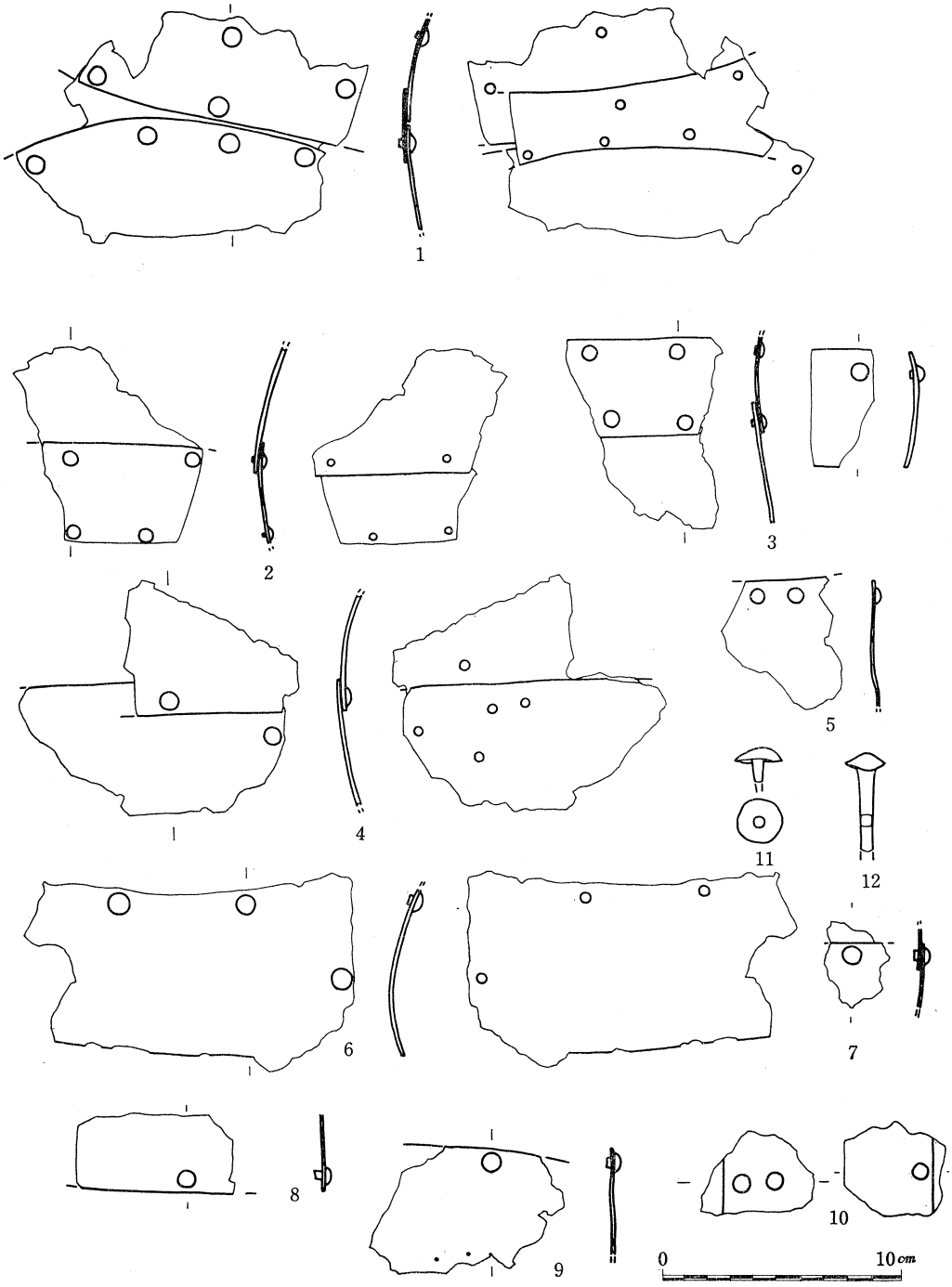


図 10　遺 物 実 測 図（その1）

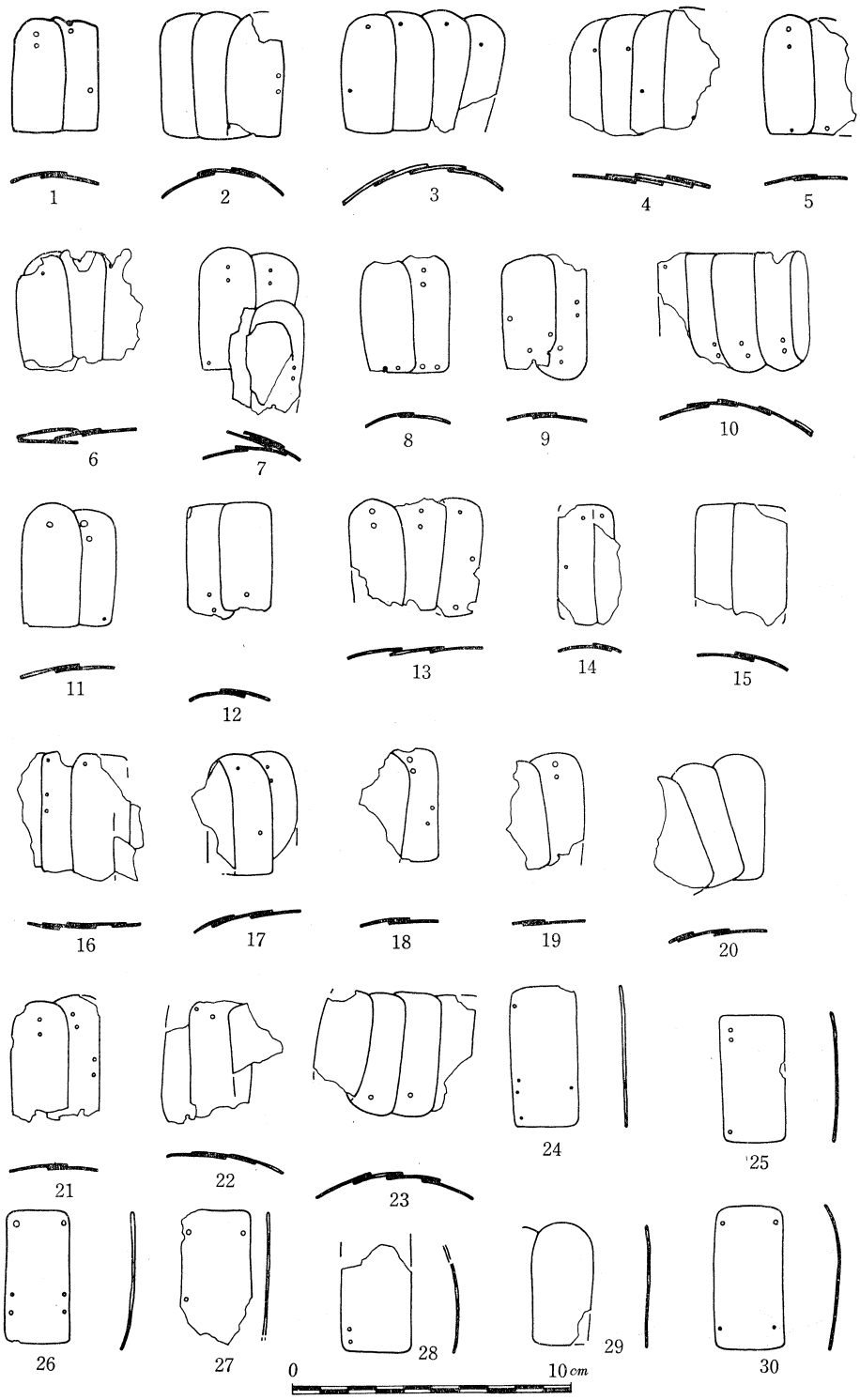


図 11　遺　物　実　測　図（その2）

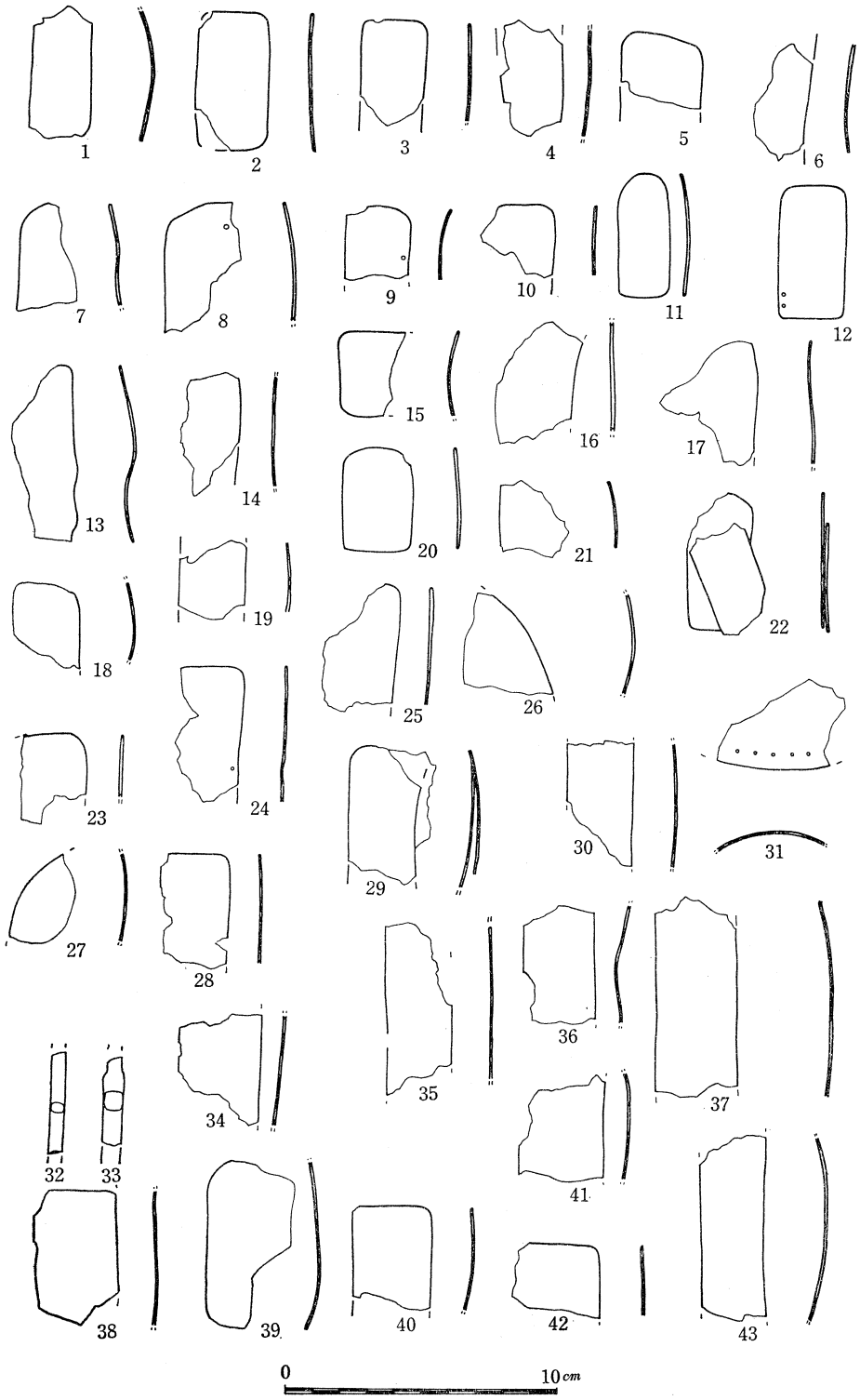


図 12　遺 物 実 測 図（その3）

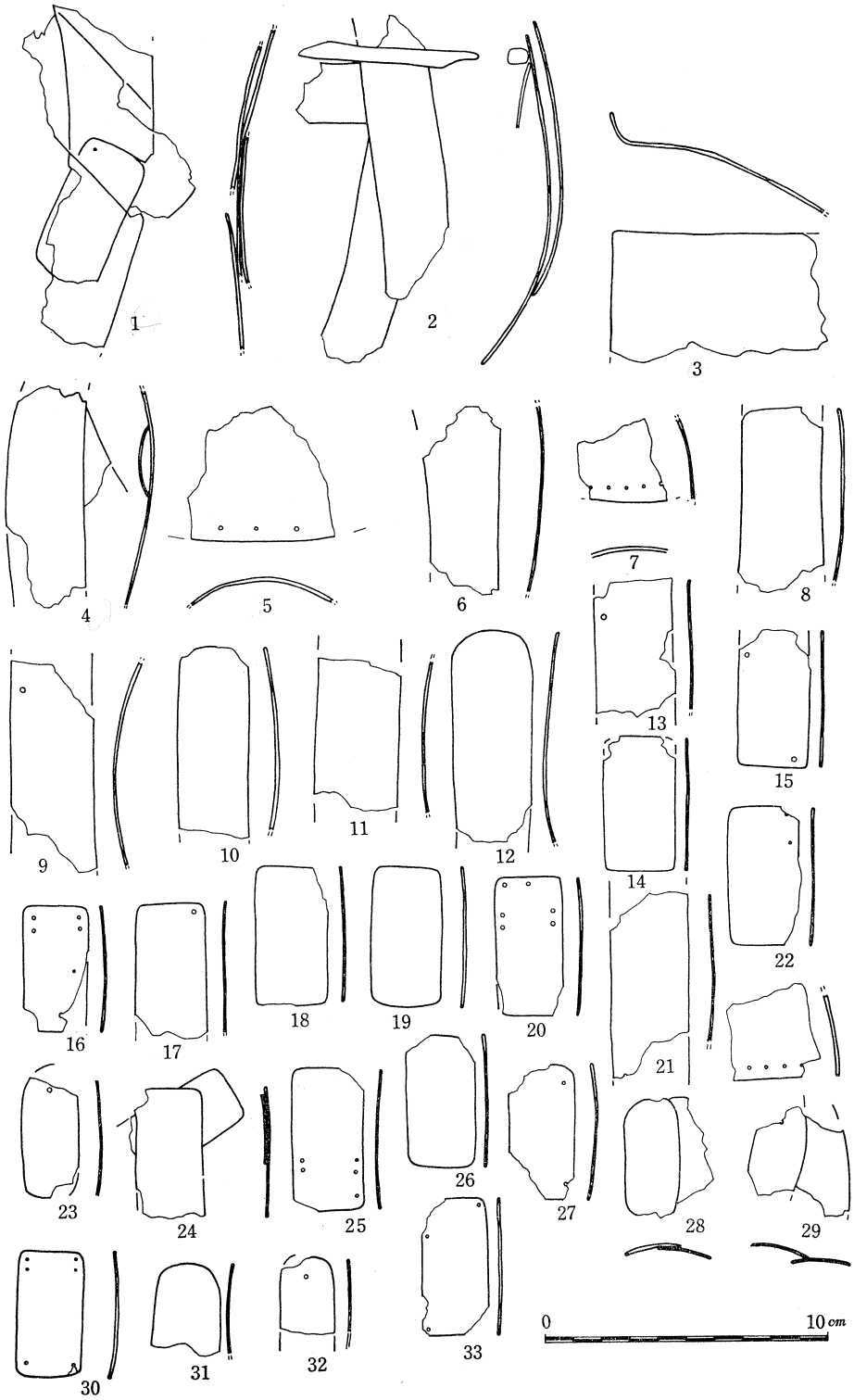


図 13　遺 物 実 測 図（その4）

◦**金銅製小札**（第14図）

保存状態は極めて悪く，緑青が吹き出している点，重量が著しく軽い点等を考え合せると，銅板を用いているものと思われる。板の表面に直接金箔を塗る方法ではなく，板との中間には他の物質が認められることから，漆を塗りその上に金箔を塗った可能性が強い。

形態は細長い長方形を呈し，四隅には小孔が認められる。長さ約 4.1*cm*，巾 1.4*cm*を計る。この他には金銅製品は帯金具と思われるもの一点が検出されるのみであるが，盗掘を受けている点を考えれば，金銅製品の数量はさらに増加するものと思われる。

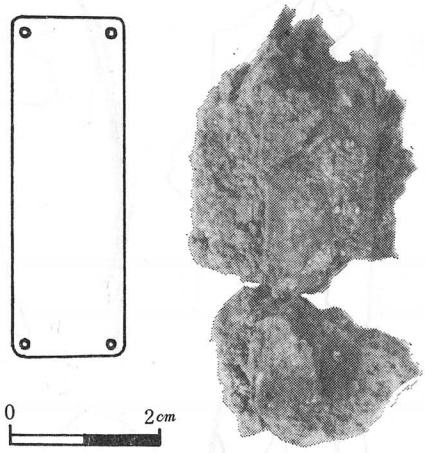


図 14　遺物実測図（その５）

◦**その他**（第13図）

（13図—３）は鉄頸甲の小破片と考えられるものであるが，破片自体が少なく断言はここでは行わない。しかし鉄頸甲であるならば，打延式で低い襟をもつものと思われる。

（13図—1・2・4）は肩甲の一部と考えられる帯状板の破片である。

◦**鉄　鉾**（第15図）

石室西側の北壁沿いに二本検出された。そのうち一本は完形に近いものである。

№2 は全長91.2*cm*・刃身 25*cm* を計る。鉾身は細身で袋は円形断面を呈し，袋下半部の柄は断面円形で基部に至るとレンズ状断面を呈し巾広となる所謂石突とされる部分である。また袋中央部においては鉾身と石突との接合が行われており，目釘穴が一対づつ貫通して二ヶ所に設けられ，鎹型金具によって固定されている。袋内には木質が多量に残る。刃身の断面は菱形に近く，刃中央には稜をもち，刃関は撫角で小さい。

№1は，鉾身 27*cm* でやはり細身のものである。刃巾は 4 *cm*・刃長 21*cm*・袋直径 2 *cm* を計る。この二本は重って出土しており，先端は錆化しそのまま固着して離れない。

◦**鉄鏃・剣**（第16・17図）

鉄鏃には片刃箭式・三角形式の細身のものと，広根鏃の二種が認められる。片刃箭式の鏃が量的に最も多く，16図４・６は基部が湾曲している。また鏃の刃部に続く棒状部は茎として存在するものではなく，さらにこれより下に茎が存在する。（第16図12・24・37，第17図８—10，66～69）これらは五世紀後半に出現するとされる細根式の範疇に属するものである。

16図９は広根鏃であり，刃部下端中央に木質痕が認められる。８は先端部のみで現存長 6.5 *cm*・刃巾 2.5*cm* で断面は菱形を呈することより，剣としての性格が与えられるものである。

（内藤和久）

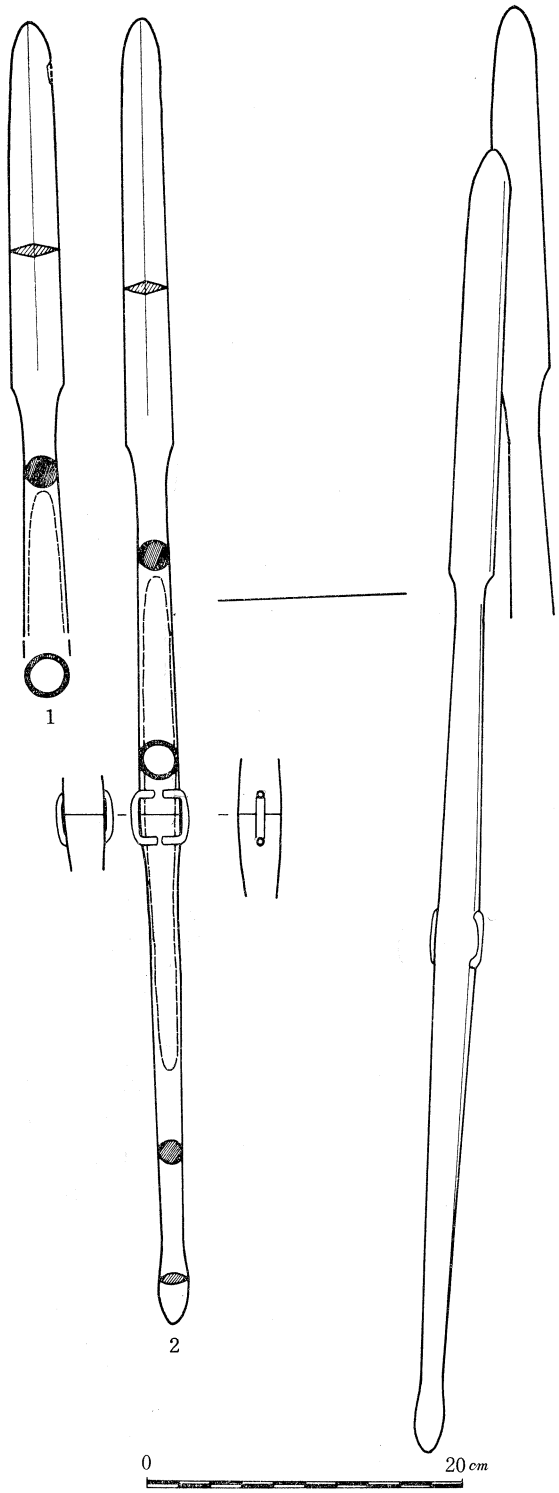


図 15　遺　物　実　測　図（その6）

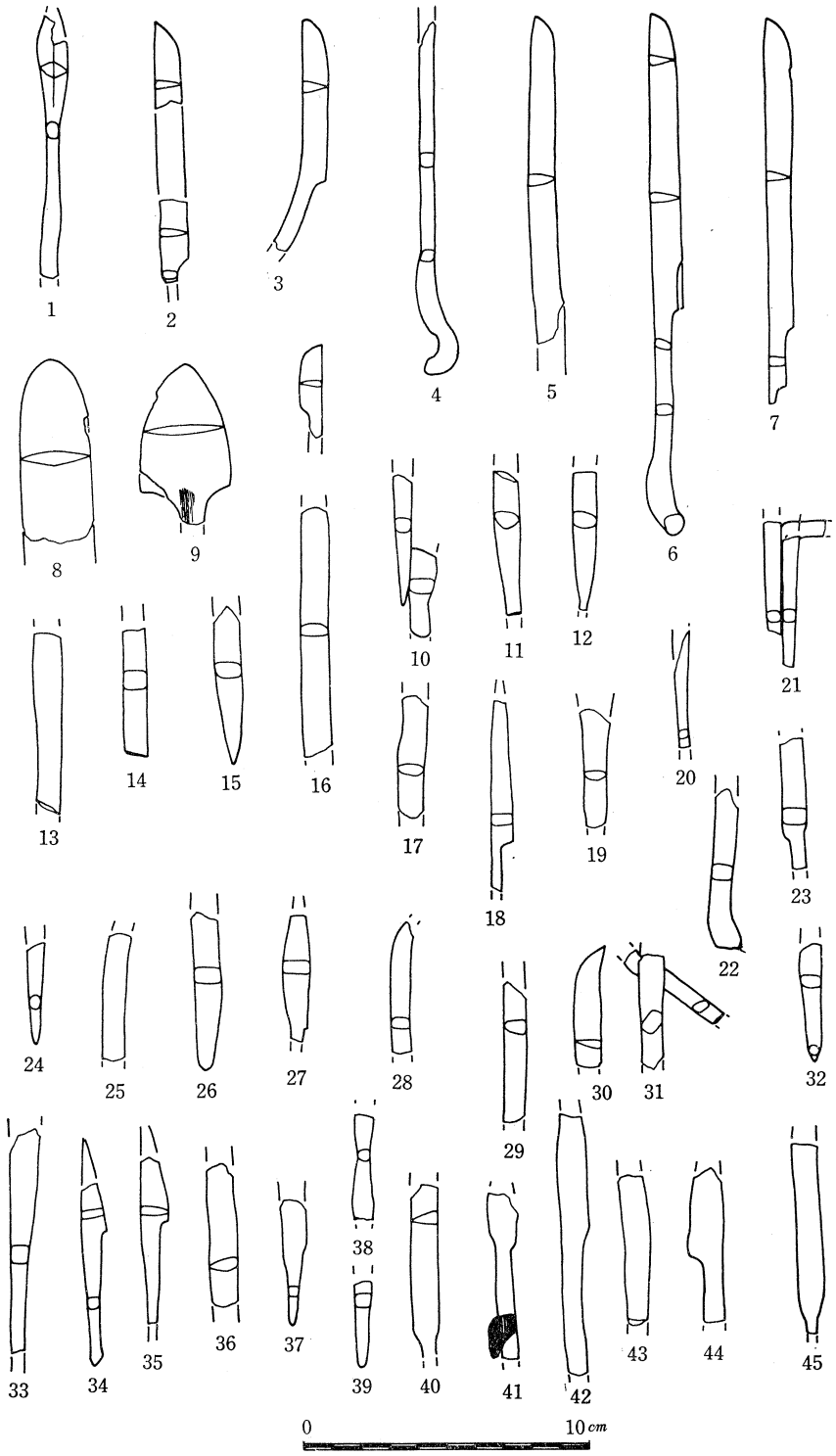


図 16 遺 物 実 測 図（その7）

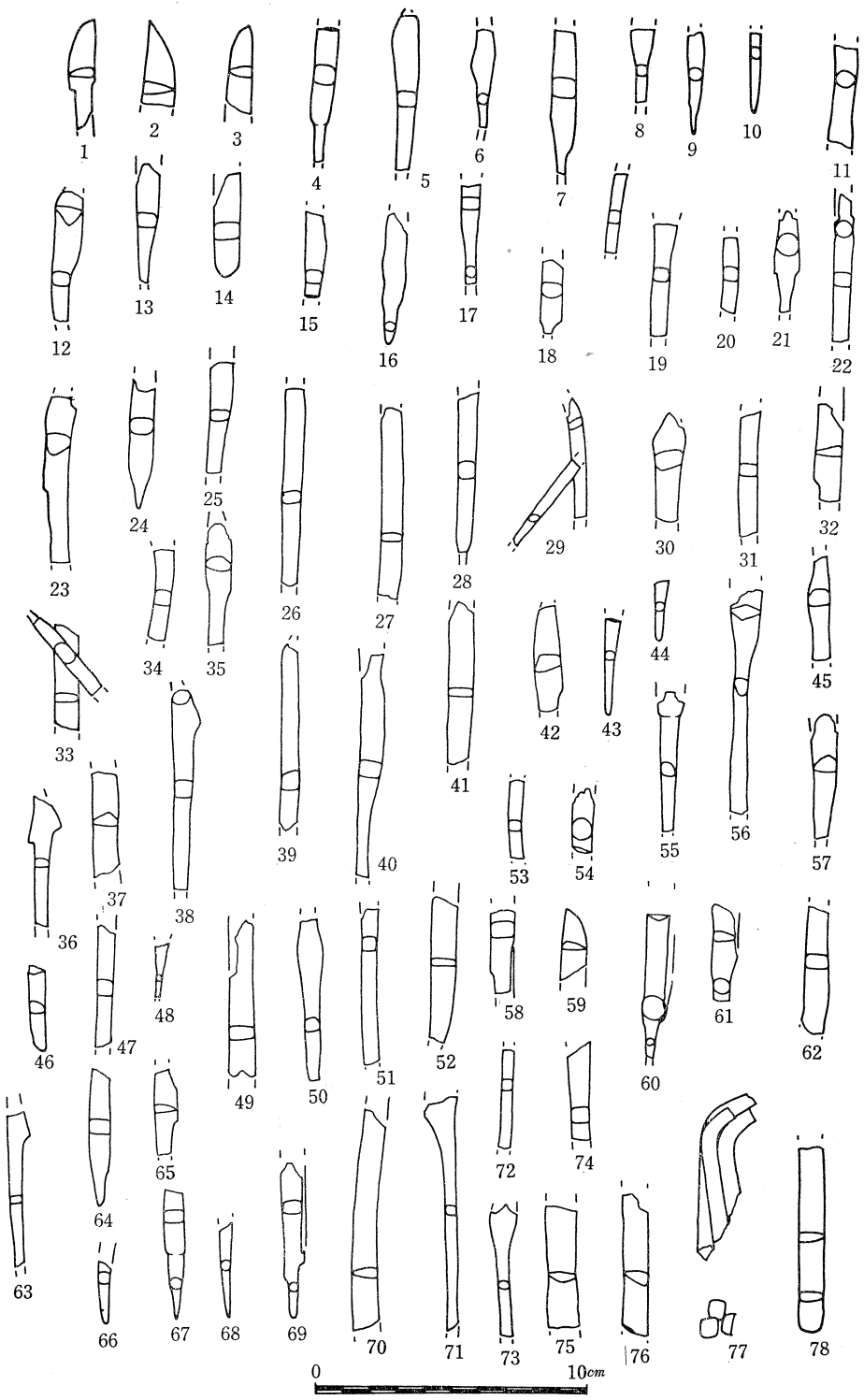


図 17　遺　物　実　測　図（その８）

第二節　馬　　具

◦木芯鉄板被輪鐙（第18図）

一対が石室西壁よりに出土した。No.1は完形品で，筍形の吊手を前方に着けたもので全面が鉄板によって包まれている。

断面は柄・輪ともに内側面が直線上を呈するのに対し，外面は凸レンズ状のゆるやかなカーブをもたせるもので，ドーム型に近い。

輪状部は円径縦16.5 *cm*・横17.9 *cm* で断面梯形をなし内側が広い。踏込みは柄状部と側面巾が同一であり開かない。また方形の鉄金具が5個打たれ，滑留の機能をはたしている。

吊手は細長い平行な板で覆われており，上辺は丸みを有する。外板を木心に留める釘打ちの状況は吊手では内外面ともに両側中央，及び下端で留めている。

輪状部は内外面両縁沿いに交互に施され一周する。内外側面は巾の中央一列に丸釘を打ち，釘頭はきわめて低いものである。

木芯は輪郭に沿って曲げてあり，吊手部では輪状部から来た木を肩で上に曲げ，中心線で腹合せにし中央と下端とで釘でつなぐ。曲げにより生じた吊手下端の空間は，三角形の木によって埋められ，その上に三角板をはめ込み，三角板底辺沿いの中央前後面に一ケ所留められている。また内側辺中央に，二ケ所釘留が認められる。

木芯鉄板被輪鐙はタイプA：輪鐙の柄が比較的太く，柄の頭が丸く形づくられ，輪の上部，柄につながる部分と踏込みの部分とが同じ巾に作られており柄の下方においては三角板をはめ込んだもの。タイプB：輪鐙の柄が細長く，柄の頭が角ばる形につくられ，踏込みの部分が輪の上部よりずっと厚くなっており，巾は逆に少しづつせばまる形態のものの二つのタイプに分類されている。両者の先後関係は前者が後者に先行する傾向が認められ，製作手法は各報告書の図版等よりの観察であるが，タイプAでは杯の前後面において，柄の中心線で鉄板を合せ，柄の縁辺に沿って釘づけしているのに対し，タイプBでは柄の中心線に釘づけが行われており，タイプAの様に柄の中心線での鉄板の接合は考えられない。

茶塚古墳出土の輪鐙は，前後面の形態に限っていえば，柄が細く頭が丸い点を除けば，タイプBに近い様相を呈する。しかし側面では踏込みは柄の厚さと計測値が一致しており，タイプAに属し，Bの様に開かない。

製作手法は，釘留の位置が輪状部では釘留が外沿い・内沿いと交互に施されており，それらが一周する。タイプAに代表される新開1号墳では，釘留の位置は肩部から底辺にかけて，輪のほぼ中心に向って放射状を呈する様に，内外縁辺沿いに釘留が施され，輪状部を一周する。タイプBの長持古墳の例は輪状部上辺から下半に至るまで，茶塚古墳同様に釘留が縁辺に沿って，交互に行われている。しかし底辺では中央に釘留が行われており，茶塚とは若干の差が認められる。さらに側辺部においても長持山古墳では，踏込みの巾の広さからくる補強であろう

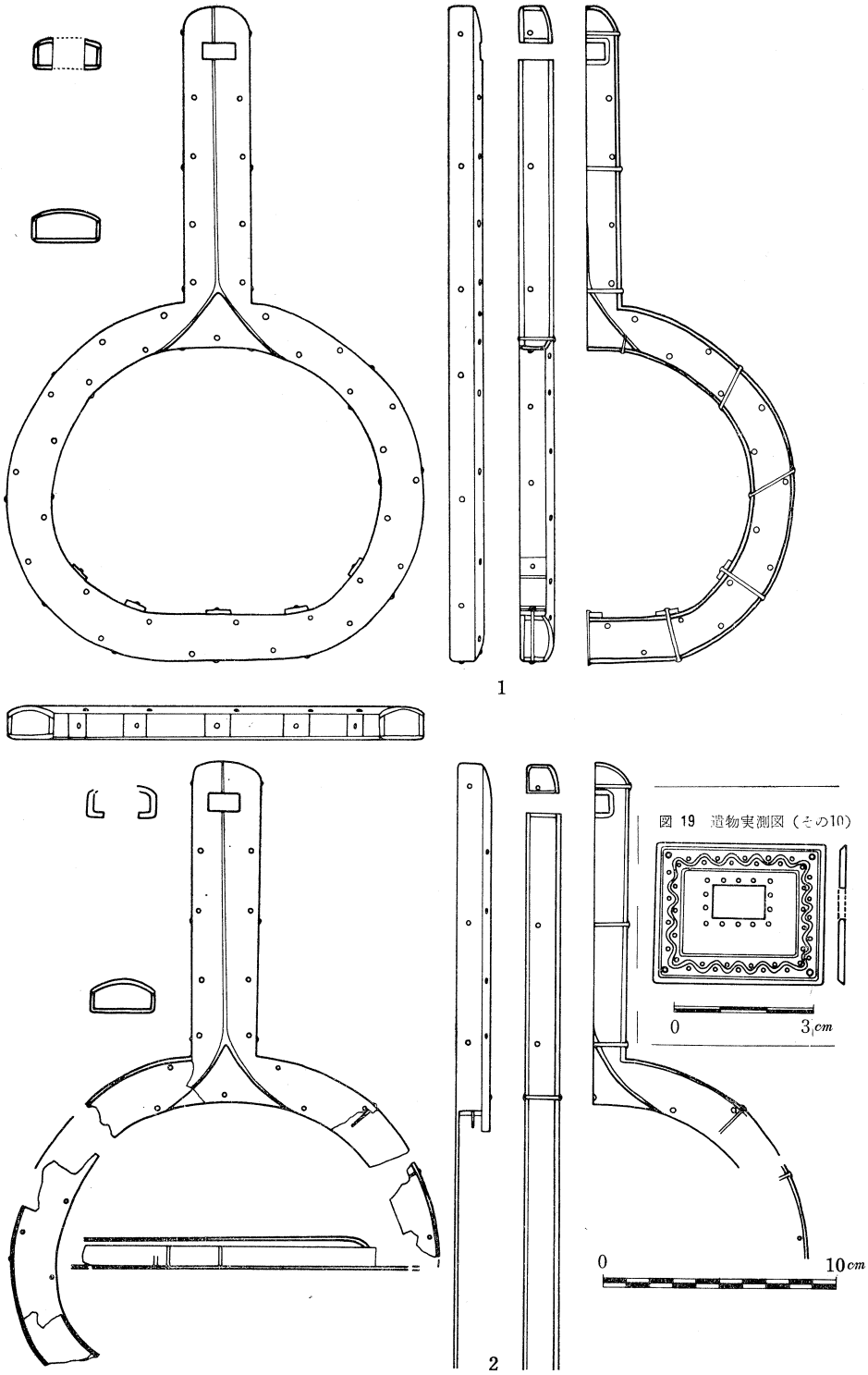


図 18 遺 物 実 測 図（その9）

か，釘留の数は増大し，茶塚古墳・新開古墳等にみられる踏込みの巾の広がらないタイプの釘留とは異ってくる。

№2は№1と対をなすもので，柄・輪状部の上辺部の輪の一部が検出された。下半の輪状部・底辺ともに欠損している。

№1の釘留についての観察は，釘の頭が著しく低いため肉眼による観察は不可能であり，X線写真によったが，№2の欠損部より内部構造の観察が可能であった。上記の観察メモはこのX線写真と№2によるところが大である。

以上茶塚古墳木芯鉄板被輪鐙は，柄の部分が細長く頭の丸いものであった。前後面では，柄の中心線に接合部分があり，柄の下方，輪状部の上辺の空白部分には，三角板をはめ込む手法を用いていた。さらに前後面の釘留は交互に縁辺沿いに行われ，踏込みは開かないという特徴を示した。これはタイプA・Bの両者の技法を兼ね備えており，A・Bの中間型式として把握が可能である。既にタイプA・Bは，AからBへの移行が指摘されており，茶塚古墳におけるその位置は，柄の中心が木芯及び鉄板を合せる点，さらに柄の下方部において，空白部に三角板を組み込ませる方法，輪の縁辺沿いに交互に低い鉄釘で留め一周する方法，また側面の形態が古い輪鐙の特徴を示す踏込みが開かない形態をとる点は，タイプAに製作技法が近似しており，それぞれを継承発展させたものとして，その推移が把握されるのである。また柄が細長く輪状部の釘留が縁辺沿いに交互に行われる技法は，後出のタイプBに引きつがれ，さらに発展した様相を認める。

◦**三環鈴**（第23図）

石室内の西壁付近より木芯鉄板被輪鐙と共に出土しており，馬具類の一種として考えられる。青銅製で表面は一部緑青を吹き出しているが，全体的には黒色を呈している。鈴内側面は緑青が全面を覆っている。

三個の鈴のうち完全な形を残すものは一つで，他の二つは片方・半分づつ欠損している。鈴径4.6㎝，環径4.5㎝，外形11.1㎝で鈴の位置は環を三等分した位置に付けられ，鈴は環に食い込ませた形態を呈する三分の一型食込式の三環鈴で，北九州から西関東一帯までに広く分布するものである。

鈴子は大体のものが石であるように本例もチャート質の1㎝大の自然小石を用いている。食込式三環鈴では京都以久野古墳群と共に5㎝以下であり小型の部類に属するといえる。全般的に食込式三環鈴は，鈴径5㎝以上で鈴杏葉と伴出関係を示している。

茶塚古墳では先述した木芯鉄板被輪鐙の比較的古手の馬具とセットをなして出土している点，さらに東国に多くみられる鈴杏葉との伴出はみられないなどの理由から，三分の一食込み式三環鈴の中にあっては古い位置付けが可能かと考える。

◦**帯金具**（第19図）

鉄地金銅製で中央には長方形孔を有する。孔の周辺には孔にそって列点文が14個施されている。またその外側では直線の沈線が0.4㎝巾をなして平行に施され，その中に波状列点文による文様帯が一周する。

◦**轡**（第24図）

第24図は衝であり，24—1・2は衝及び引手と考えられ，断面は方形である。

◦**鉄鋏具**（第24図，3・4・5）

長さ3.8㎝，巾3.2㎝の小形品である。頭は直線を呈し，底に至ると巾はせばまる。針は底部に捲きつけられ，断面は方形である。4・5も3同様の形態を呈するものであるが4は底部及び右下端を欠損し5は左辺及び頭部のみが残存したものである。

（中山誠二・小林和夫）

第六章　ま　と　め

第一節　遺跡について

＜占　地＞

茶塚古墳の位置する曽根丘陵は甲府盆地の南縁部にあたり，丘陵上より盆地を一望できる。そこで当時の支配層は自己の治める地域を眼下にする丘陵上に好んで古墳を築いたため，多くの古墳が丘陵上に点在する。しかし本墳は先述の様に，丘陵を下った傾斜変換線付近に築かれたものであった。本墳の西方に続く丸山塚古墳・銚子塚古墳も同様の立地条件が認められ，大丸山塚古墳が丘陵先端と占地を異にする。曽根丘陵全体を見た場合，丘陵上に占地する古墳が主体をなし，斜面を下った平坦地に近い位置に築造された例は，本墳の東方に位置する八乙女古墳群に認められる程度で数少ない。しかし茶塚古墳周辺ではこの比率は逆転し，傾斜変換線沿いに古墳の立地が移行したかの様な感を受ける。これは本地域が先学により既に指摘された古墳時代前期における文化の波及経路とされる中道往還の，盆地側の出入口に当るという地理的要因に拠るところが大きい（藤森 1966）。

本地域が他地域に比べ大型古墳の集中することは，支配者層の本地域への強い指向の現れであるといえよう。そこで古墳の立地条件としては良好な丘陵上に限らず，平坦地に近い低地に占地し，さらには地理的要因を先行させたかの様な古墳の立地が認められるのである。

茶塚古墳が丘陵上を避け低地に占地したことは，本墳の性格を考える上で重要な視点となろう。すなわち銚子塚古墳・大丸山塚古墳の様な大型古墳であれば，立地条件もその規模により制約される可能性も大きい。しかし本墳程度の規模であれば，本墳南方の東山斜面はなだらかな部分が多く，築造可能な場所は少なくないからである。銚子塚古墳・大丸山塚古墳・丸山塚古墳は，本県における最大級の最古の古墳であるという評価は既に定着して久しい。茶塚古墳はこれらに比較して，遺物の様相からも新しい時期が想定されるが，著しい相異点は墳丘の規模の差である。しかし上述の様に占地においては前期の大型古墳と強い関連・指向が認められ，茶塚古墳はこれら甲府盆地に覇権を唱えた前期の強大な支配層の後継者として活躍し，またはその立場を主張した首長の奥津城であったことがその占地より窺えるのである。

＜墳丘の形状＞

本墳は丘陵上に占地せず，なだらかな斜面上であるため，築成には若干の地表面の起伏の利用はあったとしても，盛土が主体をなしたことは明らかである。セクションの観察により，南半は一部を削り整形し，北半は盛土による築造の可能性を指適した。しかし墳丘の調査が不充分であることから，墳端を確認するには至らなかった。主に現地形の観察により前方後円墳と

推定し墳形を想定したが，墳丘の外表面にはほとんど埴輪片列石等は認められず，古墳の企画を示す遺構も各トレンチより検出することはできなかった。

後円部径 20m 前後・全長 40m 強・前方部巾40m の規模を有する前方後円墳と推定した。規模については地形の変化が著しいため，詳細は今後の調査に期することにしたい。しかし前方後円墳とする根拠は本墳の横断面よりの観察で十分であり，外形についても前方部の発達した形態であるとする推定は変化がないと考える。

付近の銚子塚古墳は全長 167m，大丸山塚古墳全長 120m弱，丸山塚古墳径67m を計るが，茶塚古墳の全長が 40m程度にすぎず著しく小型である事から，調査以前はこれら大型古墳の陪塚とする推測もあった。しかし調査によって出土した遺物より，大型古墳に後続する新しい時期の所産であることが明らかとなった。また前方部が発達し後円部を上まわるという特徴が認められ，一般的な前方部の発達が時代の推移と関連する現象と一致する。しかし本県においては前方部の発達には見るべきものがなく，中期から後期にかけての前方後円墳は，むしろ王塚古墳・八代狐塚古墳の様に帆立貝型の墳形を呈するものが認められるぐらいで，本墳の形態は特異な例といってよい。これは本県においては前方後円墳の埋葬主体部が，竪穴式石室・石棺が主体をなし，横穴式石室を有する例がなく，前方後円墳の消滅後に，横穴式石室が埋葬主体部として出現するという特色に拠るものである。無論本墳は副葬品の様相より中期古墳の特徴的遺物が認められ，横穴式石室が一般化する時代の所産でないことはいうまでもない。

<石　室>

墳丘の主軸方向に河原石積みの竪穴式石室が，埋葬主体部として前方部に設置されていた。石室上部の盛土の大半が流失し，石室上部は耕作土に接する部分も認められた。しかし盗掘による破壊を一部に認めるものの，他は遺存状態が良好であった。

石室上部の外被施設は天井石上部全面を覆う礫群で，天井石外部では配置の密度が落ちるため天井石被覆礫群と称したものである。前期古墳には京都府元稲荷古墳・大阪府茶臼山古墳の様に，石室の壁面を築いた石材と同様の扁平な石材を主に，石室外部まで広く認められる例が集成され，石室壁面の補強・雨水の流入防止という一般的な目的外に，寒冷地対策としての意義づけがなされた（斉藤 1978)。茶塚古墳においては天井石被覆礫群と称した様に，天井石とその周辺に限定されたものであり，天井石の補強・隙間充塡による雨水の流入防止に主眼がおかれたものと考えられ，礫と天井石との隙間には小石を埋め，さらに盛土とは別の粘土により密閉され，礫の間や上部の盛土も粘性の強い土砂を用い堅くしまっていた。本県において竪穴式石室の調査例には大丸山塚古墳があり，側壁には板石が用いられたが，天井石上部は拳大の河原石により外被施設とし，さらに粘土を覆った例が知られる（三木 1975）。

茶塚古墳の石室規模は全長約 4.5m，巾 1 m前後，高さ 0.6～0.7mを計る。本県では竪穴式石室は他に銚子塚古墳・丸山塚古墳・八乙女２号墳，特異なものとして石室と石棺が上下に組み合わせた大丸山塚古墳の例が知られる。銚子塚古墳・丸山塚古墳は安山岩系の板石を用い壁

面が構築されたもので，いずれも前期に特徴的な狭長な石室で，前者は全長6.6m，巾0.93m，高さ1.35m，後者は全長6m，巾0.9m，高さ0.92mを計るが，側壁が内傾し前者は天井石近くの側壁上部では持送りにより近接し，天井部の空間は僅かで天井石も巨大な石材は不要となる。後者は15枚の天井石が用いられている（山本 1968・三木 1975)。また八乙女2号墳の石室は全長5.15m，巾1m前後，高さ1mで粘板岩系の割石を主に側壁を構築するが，側壁は直立し，側壁中には扁平な花崗岩の石材を混え，奥壁は花崗岩の一枚石が用いられるという新しい要素が強い。特に天井石は7枚現存し巾1mを計る巨大な石材が用いられる（小林・里村 1975）。天井石の構架法は天井石相互の空間に，同様の大型の天井石を積み重ねられ，奥壁とともに，横穴式石室のそれに近い。茶塚古墳例の縦横比は以上の中でも最も大きいが，天井石・壁面の状況・外被施設等の技術面では前期の例に近く，銚子塚古墳・丸山塚古墳と八乙女2号墳の中間に位置づけられる石室であるといえよう。

第二節　遺物について

盗掘により副葬品が完存する訳ではないが，本墳よりの出土品には武具と馬具に大別出来る。武具は盗掘抗と一致し完全なものは少ない。しかし馬具は盗掘坑と隣接しながらも壁面沿いに置かれたため，石材の下になるなどしてよく残り，原位置を保つと考えられるものも認められる。

＜武　　具＞

鉄鉾・鉄剣片・鉄鏃等の攻撃用武具と，胄地板・短甲片・挂甲片（鉄小札）・頸甲片の防御用武具さらにそれらを飾る金銅製品に区別できる。

攻撃用武具の中では鉄鉾が注目される。二例が検出され，両者は壁面沿いに馬具に近く配されたため，盗掘を免れたものである。一例は完形品であり鉾身と石突との接合部には，目釘穴を通して『鋺』型金具により芯棒と固定され連結されている。この接合部は木製の芯に別々に鉾身と石突を固着すれば，両者は連結され事足りる訳であり，一般には各々別個の金具により固定される。本例の様な鉾身と石突の両者に跨る金具が用いられることは，接合部の強化と考えられ興味深いが，他の例が錆化により不明瞭な部分に当るため今後の検討によっては類例の増加もあると思われる。

鉄剣については破片を一例のみ検出するに止まったが，埋葬時には当然主要な副葬品として多数副葬されたものと思われ，配置も石室の主要部を占めたことは想像に難くない。しかしそのことが逆に災いして盗掘者に容易に発見され持ち去られ，破片を残すのみとなってしまったことはまことに残念である。

同様のことは防御用武具についてもいえる。短甲は破片よりの観察では横矧板鉄鋲留短甲と考えられるもので，技法的にも発達した段階に位置づけられる。また挂甲を構成する小札や金

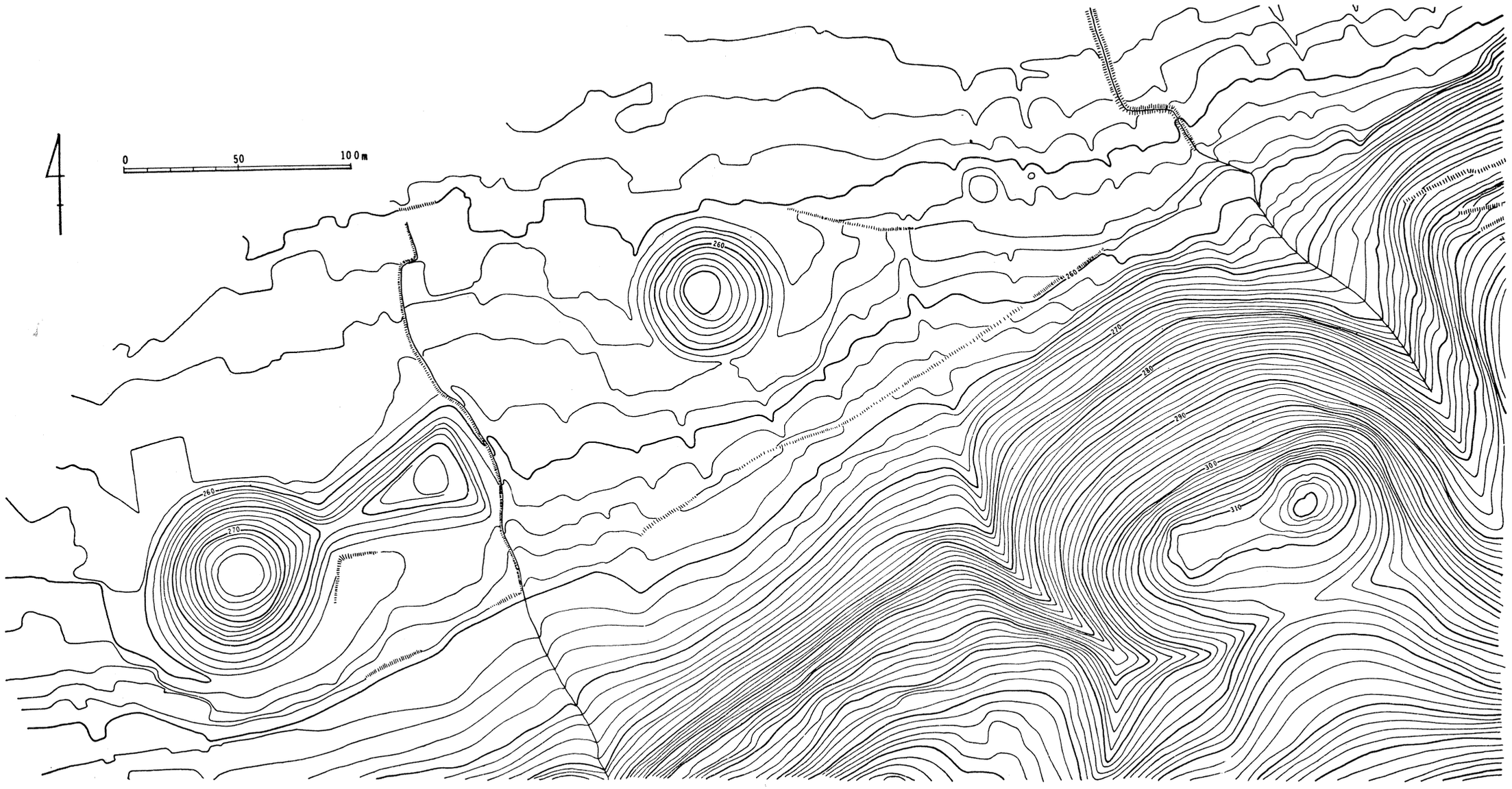


図 20 東 山 古 墳 群 地 形 図

銅製品は次に述べる馬具と関連深い遺物であるが，一例の帯金具と考えられるものは，長方形の金銅製で眉庇付冑に施されることの多い波状列点文が認められる。同様のものは兵庫県亀山古墳・西都原地下式横穴4号では，横矧板式の短甲の開閉装置の金具として用いられるものも認められ（小林 1974），いづれとも決し難いが，本墳の出土遺物中では最も装飾性が強い遺物である。

茶塚古墳において特筆すべき遺物は馬具類であるといってよいであろう。特に木芯鉄被輪鐙・三環鈴は古式の馬具として位置づけられ，本墳の年代決定に大きな役割を果すものと期待される。

木芯鉄被輪鐙は外形より，柄の頭部が丸く短く，踏込み部と柄部の巾が同じ形態から，柄の頭部が角ばり細長く，踏込み部が柄部より開く形態のものへと移行することが知られる。（小野山 1966）便宜上前者をAタイプ，後者をBタイプと区別した茶塚古墳出土例は，外形は前者に技術面では後者に近い要素が認められ中間形態といえ，編年的にもA・Bタイプの中間と考えられる。

初期の馬具と伴出する特徴的遺物とされる三環鈴は，本墳の場合木芯鉄被輪鐙・衝等の馬具の集中する一角より出土したため，馬具の中に含めることが可能である。年代が下る三環鈴には短甲等を飾る用途が考えられる点で，本例の出土状態の把握は重要である。しかし形態は大型の三分の一食込み式に属するもので，6世紀型の範疇に属するものである（石山 1968）。ところが本例は大型とされたものの中では，京都以久田野古墳群に次いで小さく，以久田野例が四分の一食込み式である点から，本例が大型三分の一食込み式の中では最小となり古い位置づけが可能となる。

以上の様に遺物から導かれた年代は一定のものではない。当然これら遺物には使用・伝播・搬入・あるいは伝世に要する期間が介在する以上一定値に収束することは困難であり，畿内より隔たる東国においては著しい現象である。本墳の場合も遺物個々の年代より築造年代を決定し得ないのが現状であり，遺物群の組み合せが重要となる。木芯鉄板被輪鐙と三環鈴が伴出する例は，最古の馬具より6世紀代の新しいものまで認められるが，初期の馬具のセットにおいて特徴的なものは杏葉の有無であり，杏葉のないものが古式とされる（小野山 1966）。茶塚古墳の場合盗掘による欠如とも考えられるが，馬具類の遺存が良好である点，木心鉄板被輪鐙の形態等からも，杏葉を伴なわない古式の部類に属する馬具と考えられる。

第三節　築　造　年　代

茶塚古墳の築造年代を検討する資料として，今回の調査による成果だけでは不充分であった。たとえば遺物の場合5世紀前半より6世紀代に至る時間の幅が存在し，特定の遺物による時期決定を困難とする。絶対年代，編年上最も有効と考える遺物においてすらこの状態であり，他から得られるものはさらに少ない。ここでは本県における前方後円墳群の変遷の中で茶

塚古墳の位置をとらえることを主眼とし，環境・立地・墳形を主に石室形態・遺物を補いながら相対年代を考え，絶対年代を遺物から導き出すという方法をとる。これは遺物の副葬品という性格的な面もあるが，本県において中期古墳の出土資料に貧しいことによるところが大きい。

1. 曽根丘陵における前方後円墳の分布

丘陵上には前方後円墳・円墳が多数点在するが，ここでは前方後円墳を主とし，内容の比較的知られる円墳を加え西より順に述べる。

＜大塚古墳＞ 丘陵突端部に占地する前方後円墳で，南北方向の主軸は70mを計る。前方部は開墾により削平され旧状をとどめない。周辺には円筒埴輪片が散布し，竪穴式石室を有したが，乱掘され遺物は散逸し石室も破壊された（山本 1968）。

＜王塚古墳＞ 丘陵突端の頂部に占地する前方後円墳で，前方部を盆地に向け現状で65mを計り帆立貝形の墳形が考えられる。主体部を中心に半径20mに円筒埴輪列が認められ，合掌形に組み合わせられた石室より，鉄兜残欠・短甲・挂甲片・直刀・鉄鉾・鉄鏃・頸鎧の副葬品が知られる（仁科 1931）。

＜小平沢古墳＞ 丘陵の突端に占地し全長45m前後で，前方後方墳の可能性がある。主体部は乱掘され不明で，二神三獣鏡が出土したと伝えられる（小林・里村 1978）。

＜天神山古墳＞ 自然地形を利用した，全長132mを計る前方後円墳で，主軸は南北方向で前方部が盆地を向く。後円部径67m，高さ12m，前方部高さ7mを計り前方部は低いが，後円部に比べ前方部が発達した墳形を呈する。また墳丘から鬼高期の甕の出土が報じられた。数少ない未発掘墳である（山本 1960）。

＜銚子塚古墳＞ 全長167mの前方後円墳で，東西方向の主軸をなす。後円部径85m・高さ17m，前方部幅63m・高さ7mを計る。主体部は主軸と45度前後で交差する竪穴式石室で，副葬品には鼉竜鏡・内行花文鏡・人物画像鏡・三神三獣鏡・四神四獣鏡の五面の鏡と，車輪石・石釧・石製杵・勾玉・管玉の石製品，斧頭・鎌・刀子・鉄剣・直刀等の鉄製品，さらに貝輪が認められている（上田 1930）。

＜丸山塚古墳＞ 径67m・高さ7mの大円墳で，東西方向に竪穴式石室が築かれた。副葬品には四神四獣鏡・鉄剣片・鉄斧・鎌・石釧が知られる（上田 1930）。

＜大丸山塚古墳＞ 自然地形を利用した前方後円墳で全長120m弱の規模で，前方部は平坦で後円部に比べ5m低い。主体部は主軸方向に，石棺上に竪穴式石室を乗せる二重構造をなす。石棺からは石枕・鏡三面・管玉・ガラス小玉が発見され，石室内からは釿・短冊型鉄斧・鑿鉋・のみ・のこぎり・小刀・鎌・鉄剣・直刀・鉄鏃・短甲の出土が知られる（上田 1945）。

＜八乙女1号墳＞ 自然地形を利用した前方後円墳で，主軸は北東－南西方向で，全長約75mを計る。主体部は主軸にそった組合せ式石棺で，全長2m弱・幅0.5m・深さ0.35mを計る。

遺物は鉄剣・直刀・刀子・鉄鏃が知られる。

＜八乙女2号墳＞ 径約45m・高さ7m弱の円墳である。頂部は削平され北東－南西方向に竪穴式石室が築かれるが，既に開口され遺物は残らない。

＜八乙女3号墳＞ 全長約80m・後円部径約50mを計るが，前方部は墓地に利用され変形が著しい。後円部中央にも大きな窪地が存し，大形の石材が散乱する。石材の状況から主体部は石棺あるいは横穴式石室の可能性もある（八乙女1・2・3号墳，小林・里村 1975）。

＜八代狐塚古墳＞ 主軸は東西方向で全長約50mの帆立貝形前方後円墳であり，扇状地に占地する前方部より鉄剣・直刀の出土が知られる（小林・里村 1978）。

＜八代銚子塚古墳＞ 丘陵上に占地し標高 400m 前後で前方後円墳中では最も高い地点である。主軸は北東－南西方向で全長約85mを計る。主体部は既に掘られ，鏡・直刀・勾玉・のみ・斧の出土が知られたが現物はいづれも散逸してしまった。墳丘上や周辺に円筒埴輪片が散乱する（森 1975）。

2. 曽根丘陵における前方後円墳の変遷

本県における最古の古墳は従来より銚子塚古墳・大丸山塚古墳・丸山塚古墳を当てることが定説となっている。いずれも竪穴式石室を有し，古式古墳に特徴的な遺物である鏡・石製品・玉類が認められ，特に鏡は銚子塚古墳では人物画像鏡が岡山県車塚古墳・群馬県三本木古墳出土鏡と，大丸山塚古墳では三神三獣鏡が岐阜県打越古墳・静岡県銚子塚古墳出土鏡と同笵関係が指適された（小林 1961）。これにより編年的位置が確立し，実年代として4世紀末より5世紀初頭に位置づけられた。

近年この三墳の西方に位置する小平沢古墳の実測の機会を持ったが，前方後方墳の可能性が考えられ，出土遺物で現存するものは少なく，鏡の存在から古式古墳の様相が認められる。平面図で見る限り前方部が平坦でまったく開かず，墳形からは銚子塚古墳・大丸山塚古墳より古いと考えられるが，小平沢古墳の占地が前方部に向う斜面上であることに拠るもので，別名の瓢箪塚の様に前方部が幾分発達した墳形を呈する（小林・里村 1978）。しかし占地は丘陵突端頂部で，銚子塚古墳・丸山塚古墳の傾斜変換線上はいうに及ばず，丘陵上に占地する大丸山塚古墳と同様標高 320m 前後を計るが，低地との比高は小平沢古墳の方が大きく，仰ぎ見る位置といえ立地からは小平沢古墳が先行する。また古墳文化の波及経路である中道往還との位置は小平沢古墳が中道往還を眼下にし，銚子塚古墳は出入口にあたるが，大丸山塚古墳は距離点に隔たりがある。また小平沢古墳が前方後方墳とする前提に立てば，長野県弘法山古墳・静岡県小銚子塚古墳の成立が前方後円墳に先行し，前方後方墳が築かれたとする交代型（茂木 1976）の例となる訳である。いずれにせよ小平沢古墳の場合出土遺物も限られ主体部も不明であり断定できないが，ここでは銚子塚古墳・大丸山塚古墳に先行させ最古に位置づけるが，その差は小さいと考えられる。

4世紀末より5世紀初頭と短期間に，甲府盆地の一角に集中して一斉に，小平沢古墳→銚子

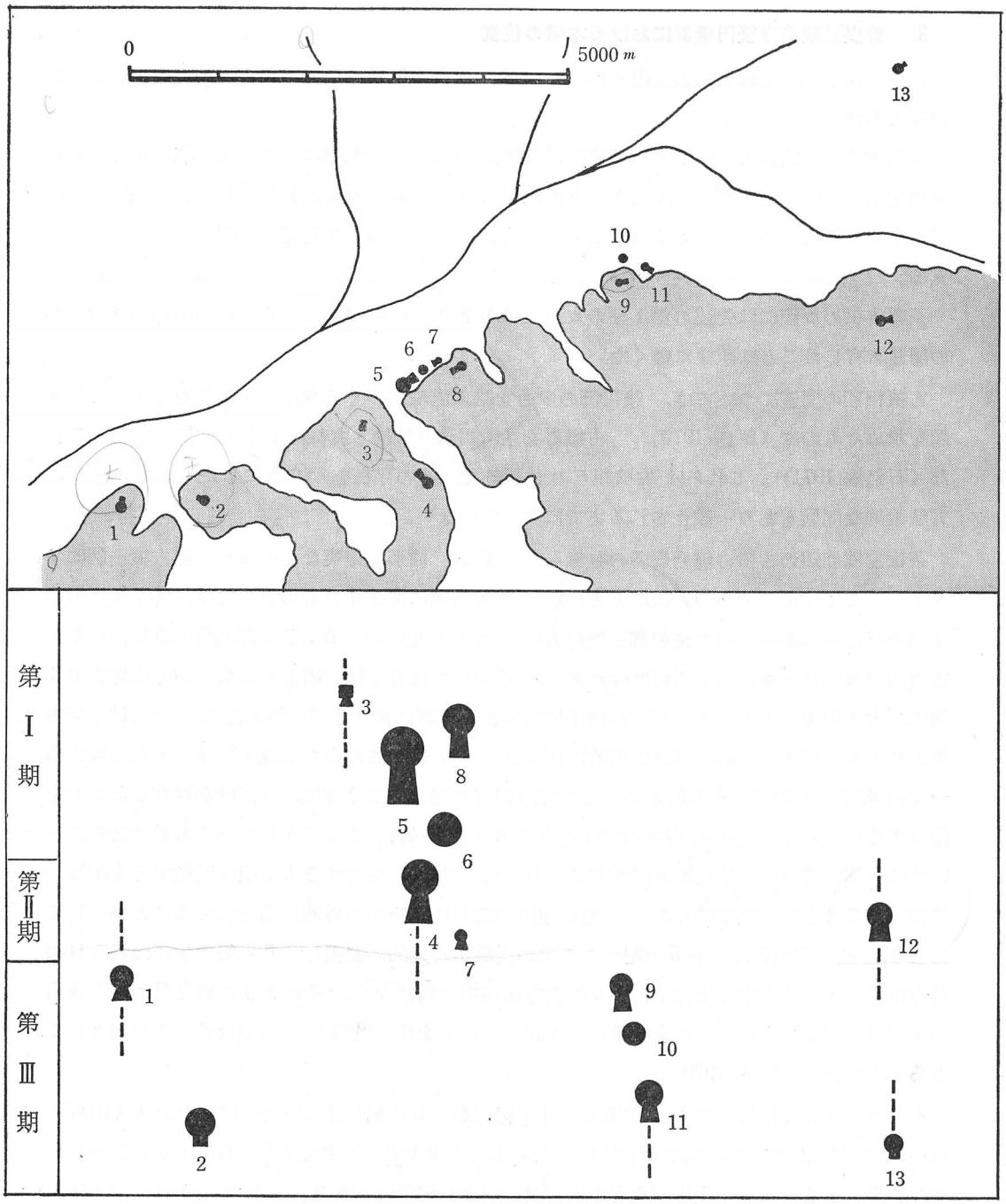
塚古墳・大丸山塚古墳・丸山塚古墳という本県最大級の古墳が築造されたとは考え難い。やはりこの三者にも年代的にはともかく，築造順が存在したと考えるのが妥当であり，先学業績から大丸山塚古墳→銚子塚古墳の順が定着した感がある（藤森 1966・三木 1976)。

丸山塚古墳は円墳である点，石室の状態も銚子塚古墳より新しいことから後出のものと考えられるが，銚子塚古墳・大丸山塚古墳については先述の様に立地では大丸山塚古墳・中道往還との位置関係では銚子塚古墳が先行する様相を呈し，鏡の同笵関係は大差がない。墳丘は銚子塚古墳が167m，大丸山塚古墳が120mで，銚子塚古墳がまさり，築造企画（上田1975）に従えば 6：3：2 で静岡県松林山古墳とともに東国におけるA型式となるが，大丸山塚古墳の場合丘陵上に占地するため墳端は明瞭とはならず，銚子塚古墳に比べ前方部の開きが小さいとする説もあるが，地形上の制約も考えられ判断できない。主体部は銚子塚古墳が古式古墳に典型的な竪穴式石室であるのに対し，大丸山塚古墳が石棺上に竪穴式石室を乗せる二重構造であるが，やはり古式の京都府妙見山古墳との類似が指適されている。遺物は鏡については既に述べたが，銚子塚古墳では車輪石・石釧・貝輪が認められ，大丸山塚古墳では鑴鉋・のみ・のこぎり等の工具が認められる。大丸山塚古墳出土の短甲は竪矧板革綴式で類例は京都府大塚山古墳・大阪府紫金山古墳という全国でも最古に属する大型前方後円墳に認められているにすぎない（小林 1974）。しかし銚子塚古墳の同笵鏡にもこれらに劣らぬ古式古墳である岡山県車塚古墳が知られ，いずれを先行させるか決しかねる。

曽根丘陵全域を見ても，小平沢古墳・銚子塚古墳・大丸山塚古墳・丸山塚古墳に匹敵する古墳は見られず，本県においては成立期の古墳は地域的に限定され，これらを便宜上第Ⅰ期とする。

これらに続く古墳は天神山古墳・八代銚子塚古墳・大塚古墳が上げられ，曽根丘陵東西両端に広がり，茶塚古墳もこのグループの中に属する。天神山古墳は銚子塚古墳につぐ規模を有する。地域的にも第Ⅰ期の古墳に近く，これらの系譜を引くとすれば，後続する古墳と考えられる。八代銚子塚古墳・大塚古墳については資料が乏しく，これらの前後関係は明らかでない。一応第Ⅱ期とする。

八乙女古墳群以下をもって第Ⅲ期とする。八乙女1号墳は遺物から前Ⅳ期の様相が認められ，立地・主体部から1号→2号→3号の順が考えられる。王塚古墳は遺物から後期の様相を呈するが後円部径は約65mで後円部のみは天神山古墳に匹敵する規模であるが墳形は帆立貝形である。同じく帆立貝形の八代狐塚古墳は後期の横穴式石室墳の分布する扇状地の平坦部に占地することから年代を引き下げ，これらをもって第Ⅲ期とする。以上の様な前方後円墳は時代の推移とともに規模が縮少するが，分布は拡散していく。第Ⅰ期古墳の集中した地域では，第Ⅲ期には有力古墳が認められず，前方後円墳の時代は終焉を迎え，支配層の墳墓は大型横穴式石室を有する円墳へと移行する。



第21図　曽根丘陵前方後円墳分布図　編年表（平面規模比較）

1 大塚古墳　2 王塚古墳　3 小平沢古墳　4 天神山古墳　5 銚子塚古墳
6 丸山古墳　7 茶塚古墳　8 大丸山古墳　9 八乙女2号墳
10 八乙女3号墳　11 八乙女1号墳　12 八代銚子塚古墳　13 八代狐塚古墳

図 21　前方後円墳変遷図

3. 曽根丘陵前方後円墳群における本墳の位置

曽根丘陵上の前方後円墳の変遷を概観したが，次にこれらの中で茶塚古墳の位置を詳しく検討してみたい。

茶塚古墳出土遺物より得られた年代は，初期馬具より5世紀第二の四半期・挂甲の存在から5世紀第二の四半期・短甲の型式から5世紀第三の四半期に上限を押さえることができる。馬具が中間形態をとるものがある点，墳形を考え合わせ，本墳の築造を5世紀第三の四半期と考える。

茶塚古墳の周辺には先述の第I期の大型古墳が集中し，本墳もこれらと位置関係から何らかの関連を有したことは想像に難くない。

古墳相互の関連については，後円部の中心を結ぶ直線がつくる角度の法則性をもとに，築造順を求めたものや（原島 1970），古墳群を主に周溝外側線・主軸による連関規制が考えられた（石部他 1971）。これらは古墳相互の位置的な関連の存在を明らかにしたものであるが，方法論的な問題もあり一般化されるまでに至っていない。

茶塚古墳周辺の古墳の場合周溝の有無も不明瞭で，墳形も確実なものは銚子塚古墳一例にすぎず，ここでは位置関係の指摘にとどめる。茶塚古墳に関連するものとしては，銚子塚古墳の主軸の延長線が茶塚古墳の後円部先端付近に，また大丸山塚古墳の前方部前面の延長線が茶塚古墳の主体部付近を通過する可能性がある。その他では銚子塚古墳前方部側線が丸山塚古墳北端に，大丸山塚古墳の前方部側線が銚子塚古墳後円部端に接する可能性がある。逆に銚子塚古墳より大丸山塚古墳への規制は位置的に可能性は少なく，この点を重視すれば，大丸山塚古墳→銚子塚古墳の順が考えられるが，ここでは相互の関連を認め占地に企画性が存在したことを指摘するに止める。しかし茶塚古墳は前者の墳丘と比べ著しく小形化しているものの遺物においては中期古墳の代表的な副葬品が認められ，位置的にも先行する大型墳に匹敵する支配層の墳墓であることは想像に難くない。墳丘規模の縮少は何らかの外的要因を求めることが必要であろう。全国的視野に立ち5世紀代の古墳の規模が時期的に変遷し，5世紀前半には帆立貝型前方後円墳・円墳が主流を占め，中葉に前方後円墳の復活を見，その後また帆立貝型前方後円墳・円墳が主となり墳丘の縮少する現像を認め，前者を第一次規制，後者を第二次規制としてとらえられた（小野山 1970）。

本県の場合5世紀代の前方後円墳は，4世紀末から5世紀初頭に位置づけられた大丸山塚古墳・銚子塚古墳が存在し，銚子塚古墳に近接する丸山塚古墳は円墳であり，石室の形態等からも年代が幾分下る点，第一次規制を丸山塚古墳が受けた可能性がある。続いて築かれた前方後円墳天神山古墳の後円部径が，丸山塚古墳と同じ67mである点から，第一次規制後第二次規制が実施されるまでの間に天神山古墳を位置づける。そして，第二次規制を受けた古墳として茶塚古墳を当てることにより，全国的な動行と本県のそれとが一致をみることになる。しかし位置的に丸山塚古墳に直接関連する茶塚古墳に先行し，距離的に隔たりのある天神山古墳が築かれ

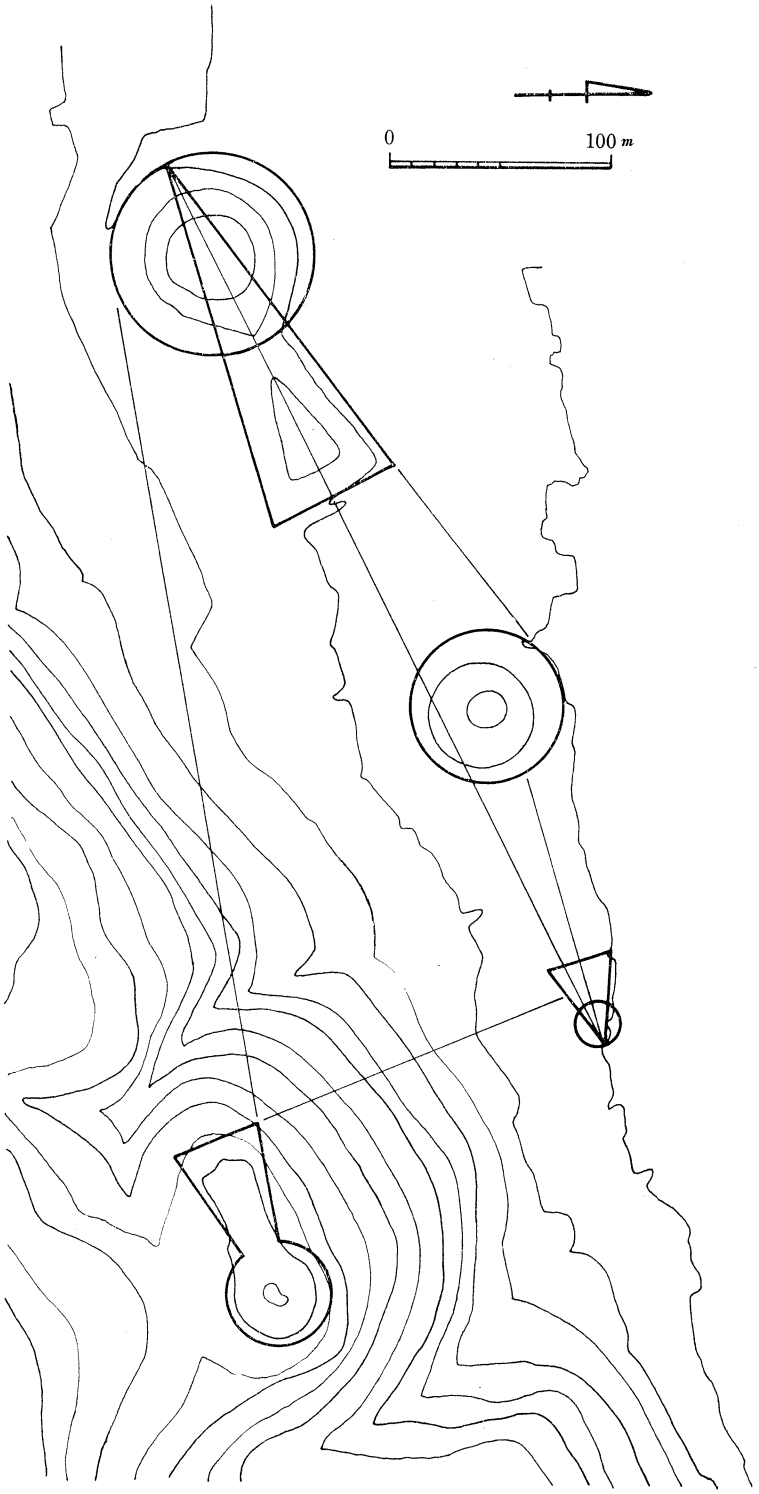


図 22　東山古墳群関連図

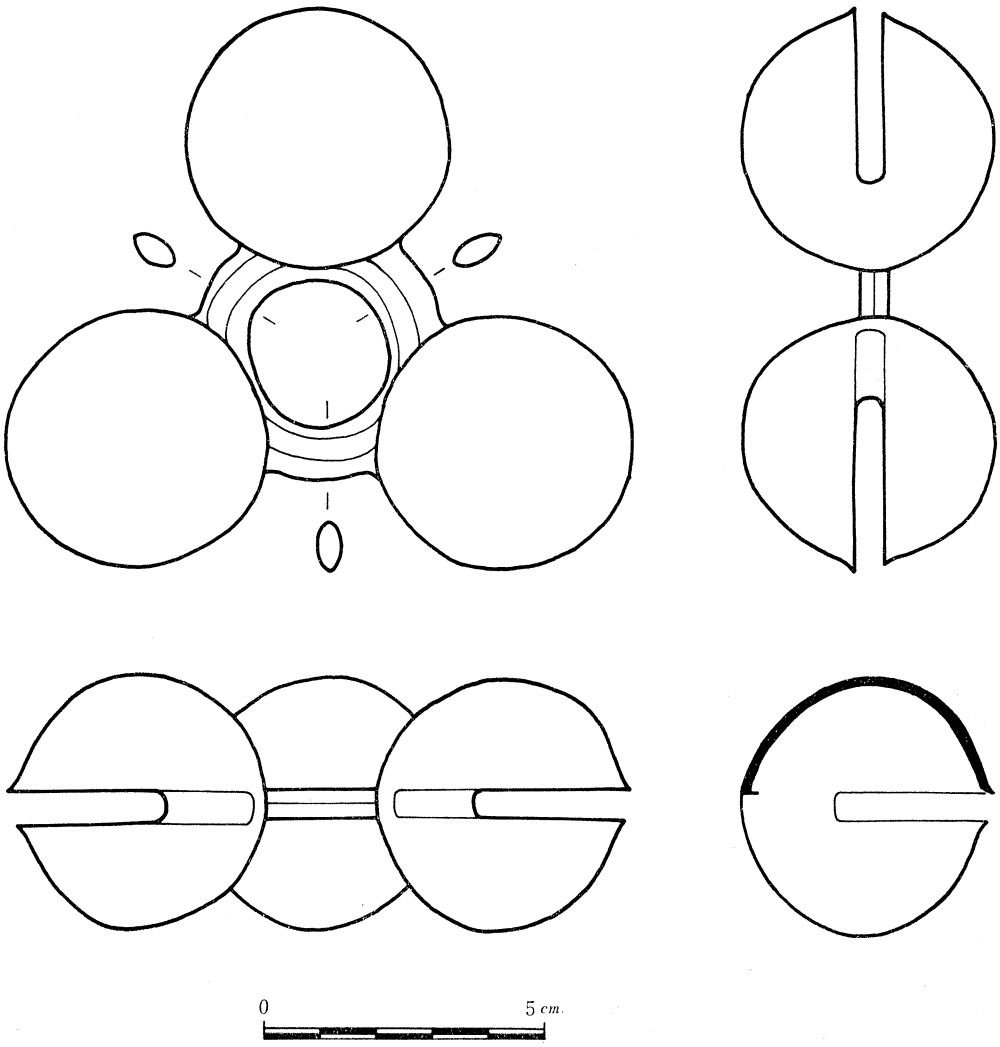


図 23　三 環 鈴 実 測 図

46%

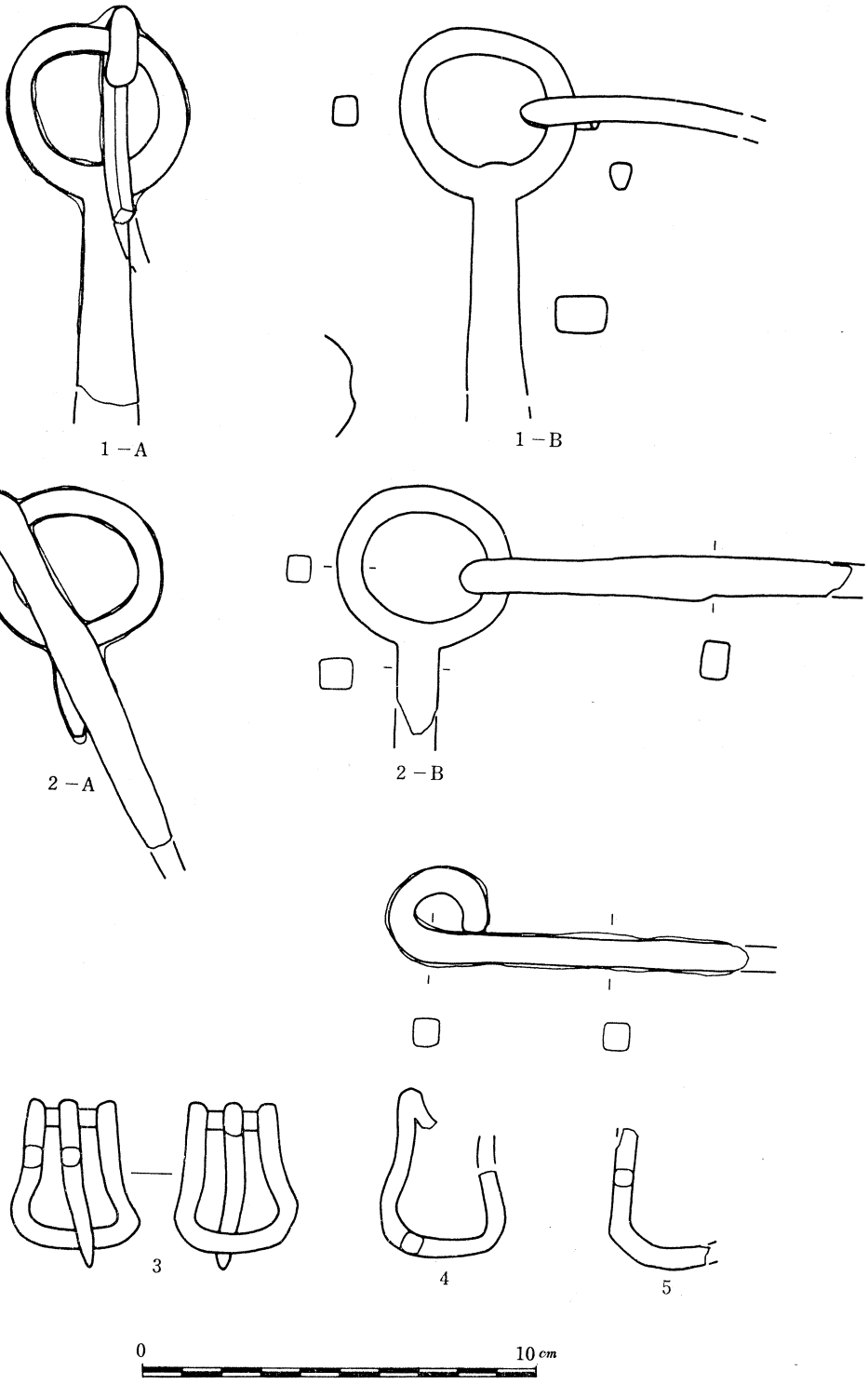


図 24　馬 具 類 実 測 図

たとした場合位置的な問題が残る。また第一次規制を受けた古墳は馬具に杏葉を含まない点を特徴としたことから，茶塚古墳を第一次規制あるいは第二次規制前に位置づけることも可能なようであるが，他の遺物から茶塚古墳の年代がそこまで古くできないことから，やはり第二次規制にあたるとしてよいと思われる。以上本地域での古墳の変遷を整理すると，小平沢古墳→大丸山塚古墳→銚子塚古墳→丸山塚古墳→天神山古墳→茶塚古墳となるのである。

茶塚古墳は外的な規制が働いたとはいえ，先行古墳との規模の差は著しいものがあり，茶塚古墳に続く有力古墳が本地域に築かれないことから，甲府盆地の覇権が他地域に移行するものと考えるが，その前兆が茶塚古墳にも反映したのかもしれない。

4. 東国における本墳の位置

茶塚古墳と同様中期古墳として著名なものは何といっても，近年鉄剣文字が検出され話題となった埼玉県稲荷山古墳であろう。主体部は人頭大から拳大の河原石で作られた礫槨で，問題の鉄剣の他に，画文帯環状乳神獣鏡・勾玉・銀環・金銅製帯金具・直刀・剣・鉾・石突・挂甲・鉄鏃・轡・雲珠・鈴具・辻金具・三環鈴・鈴杏葉・鞍橋金具・鞦・木芯鉄板被輪鐙・鉄斧・鉈・鉗・鑷子・刀子・砥石が検出された（埼玉県教育委員会 1979）。茶塚古墳と共通する出土品名は，鉾・石突・帯金具・挂甲・鉄鏃・鈴具・三環鈴・木芯鉄板被輪鐙があげられる。稲荷山古墳の報告が概報の段階であるため，数多くの論説が発表された鉄剣以外詳細は知り得ないが，三環鈴は茶塚古墳と同様の大型三分の一食込み式であり，関連する要素も認められる。墳丘は前方部が発達する点では共通するが，規模は稲荷山古墳が全長 117m を計り，大型である。また遺物中に杏葉が認められる点上記の三環鈴も茶塚古墳例より大型である点からも，稲荷山古墳の方が新しい要素が認められる。稲荷山古墳は鉄剣の銘文中に年紀が示されるが，古墳築造年代については西暦 500年前後を中心に議論百出の感があり一定しない。しかし，茶塚古墳の場合遺物から得られた年代，5世紀後半（第三の四半期）という位置づけは，稲荷山古墳の例から考えても妥当なところであろう。

（小林広和・里村晃一）

参　考　文　献

石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川徙：1971「古市・百舌鳥古墳群における 主要古墳の連関規制について」『古代学研究』 60

石山　勲：1968「環鈴の形態・年代と用途について」『金鈴』 20

上田三平：1930「銚子塚古墳附丸山塚古墳」『文部省史蹟調査報告』 5

上田三平：1945「大丸山古墳主体部構造の特異性」『考古学雑誌』32－9

上田宏範：1975「前方後円墳」『日本考古学の現状と課題』所収

小野山節：1966「日本発見の初期の馬具」『考古学雑誌』52－1

小野山節：1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』16－3

小林謙一：1974「甲冑製作技術の変遷と工人の系統（上）」『考古学研究』20—4

小林広和・里村晃一：1975「山梨県境川村八乙女古墳群の現状」『信濃』27－6

小林広和・里村晃一：1978「甲斐小平沢古墳の墳形と編年的位置」『信濃』30－2

小林行雄：1961「同笵鏡考」『古墳時代の研究』所収

斉藤　忠：1978『弘法山古墳』

埼玉県教育委員会：1979『稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報』

仁科義男：1931「大丸山古墳・大塚古墳」『山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告』 5この報告の大塚古墳が王塚古墳にあたる。

原島礼二：1970「畿内における巨大古墳の編年と性格」『考古学研究』66～68

藤森栄一：1966「古墳文化の地域的特色（中部高地）」『日本の考古学』（Ⅳ）所収

三木文雄：1975『中道町史』

茂木雅博：1976「信濃の前方後円墳」『信濃』28－4

森　和敏：1975『八代町史』

山本寿々雄：1960「甲斐天神山前方後円墳出土の埴について」『富士国立公園博物館報告』 3

山本寿々雄：1968『山梨県の考古学』

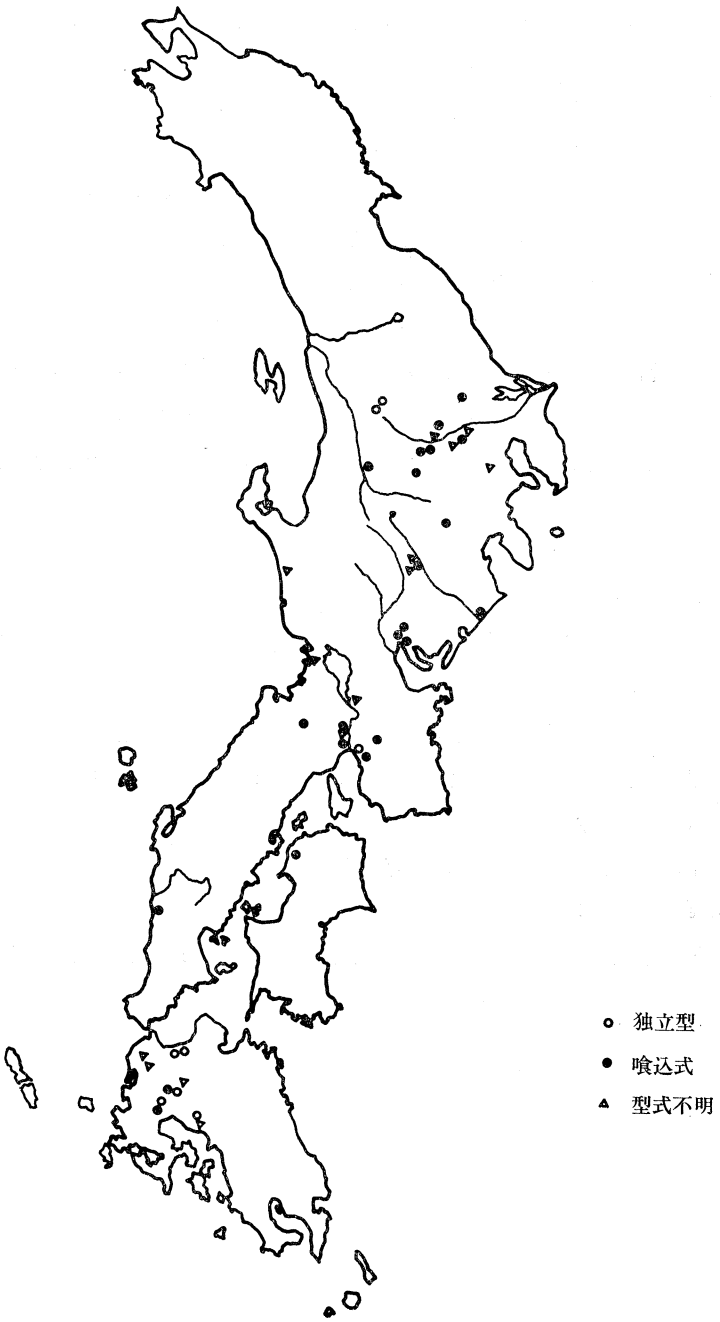


図 25　三 環 鈴 分 布 図　（仲子和美）

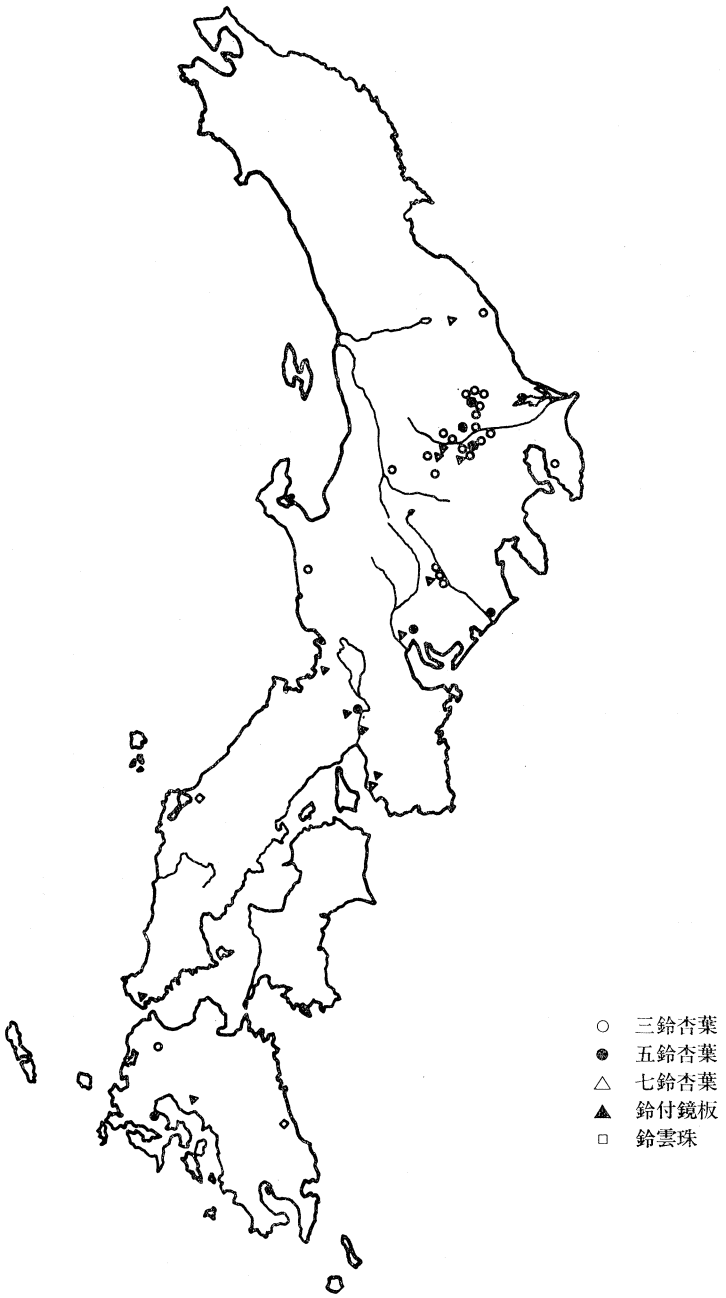


図 26　鈴杏葉分布図　（仲子和美）

第四節　成　果　と　課　題

今回の調査は，県内における古墳の発掘調査の数少ない例であり，近年，後期横穴式石室墳の発掘例は増加したものの，前期から中期にかけての竪穴式石室の調査例としては唯一のものであると言ってよい。

銚子塚古墳・大丸山塚古墳に代表される豊富な前期古墳の遺物群も正式な調査過程を通したものではなく，昭和46年に実施された大丸山塚古墳の調査は，墳丘埋葬主体部の実測ではあったが，既掘品の実測図が公表されて，資料的には著しく充実した感がある。

茶塚古墳の調査からは，石室内が一部盗掘を受けたことが判明したものの，残存する遺物の状況の把握から，副葬状態，持ち去られた遺物も含めたその全貌を窺うことができたのは重要であろう。遺物の中では初期の馬具類の検出，さらに鉄鉾の形状等は特徴的なものである。これらの遺物発見例は本県では他には見られず，仲子和美氏の御好意により掲載することが出来た環鈴・鈴杏葉の地名表に一例を加え，分布図の空白を埋めることができた。「空白を埋めた」この一言が本墳調査の成果であり，また課題である。たしかに調査により資料的には増加したが，その大半が唯一の例であり，県内では比較検討する資料をもたない。そのため畿内，関東と遠隔地の資料との対比に終始した。汎日本的な視野に立つ場合，常に外部からの影響に注意をはらい，他地域での編年に変化が起これば，その波をまともに受けることになる。地域単位での古墳の変遷はこの弱点を補強してくれるが，相対的な編年にすぎない。今後本県における古墳の変遷を考える上では，この両者から押し進めなければならないことは言うまでもない。

埼玉県稲荷山古墳の成果は，東国における中期古墳文化の様相が明らかになる日も遠くはないことを示している。この様な外部の成果を待ちながら，県内の資料の充実を図っていくことが必要であり，茶塚古墳も今回の調査では対象外となった後円部，さらに不充分な墳丘の調査等の実現に努力していかねばならない。

（小林広和・里村晃一）

環　　鈴（表1）

（仲子和美・作成）

番号	遺跡名	所在地	墳形	規模(m)	立地	内部主体	外部施設	鈴径(cm)	形状	伴出遺物
1	十二天塚古墳	栃木県足利市助戸	方	17		木炭槨		6.0	食込式、鈴の位置1/3	鈴境・鈴訓・鈴・鈴杏葉・剣・刀・馬具・鉄棒
2	牛塚古墳	〃 宇都宮市新富町	帆立貝	56.7	台地	木棺直葬(?)	埴輪、周溝	大形	食込式、鈴の位置1/3	金環・鈴釧・鈴杏葉・鈴・鏡・玉類・鈴鏡・鉄鏃・短甲・馬具
3	鬼塚古墳	群馬県甘楽郡新屋村字白倉西大小	円			舟形石棺		大形	食込式、鈴の位置1/3	鈴杏葉・石製模造品・玉類・鏡
4	観音山古墳	〃 高崎市綿貫町観音山	前方後円	90	平地	横穴式石室	埴輪・周溝・段築	大形		鈴付大帯・鈴鏡・玉類・大刀・馬具・石突・鏃・刀子・直刀・須恵器
5		〃 群馬郡箕輪町大字上芝						6.0	食込式、鈴の位置1/3	鈴杏葉
6		〃 新田郡								
7	稲荷山古墳	埼玉県行田市埼玉	前方後円	110(?)	低台地	礫槨・粘土槨	埴輪、周溝	5.2	食込式、鈴の位置1/3	鈴杏葉・鏡・玉類・直刀・鉾・刀子・馬具・斧・鍬・剣・砥石
8	楓山古墳	〃 大里郡吉見村堅木山					埴輪			鏡・石製模造品・勾玉
9		〃 埼玉郡忍領清水								
10		〃 橘樹郡多摩川西岸								
11		神奈川県浦賀								
12	飯綱山10号墳	新潟県南魚沼郡六日町余川	円		丘陵	竪穴式石室		1.6	独立式、鈴の位置1/4	鈴・馬鐸・馬具・鏡・短甲・鉾・鉄鏃
								3.5	独立式、鈴の位置1/3	
13	金鎧山古墳	長野県中野市新野	円	21	山頂	合掌式石室	積石	5.4	食込式、鈴の位置1/3	鈴鏡・鏡・玉類・貝輪・刀剣・鉾・鏃・斧・鋸・馬具・須恵器・土師器
14	金子二子塚古墳	〃 下伊那郡かなえ町上川路	前方後円	49.1	台地端	横穴式石室		5.5	食込式、鈴の位置1/3	鈴・刀・馬具・・玉類・砥石土師器・金環・冑・砥石
15	代田獅子塚古墳	〃 〃 〃 松尾	前方後円	63.6	台地	横穴式石室	埴輪、葺石			鈴・玉類・刀・剣・須恵器・土師器
16	古城古墳	〃 〃 〃 〃			台地					玉類・直刀
17	二子山古墳	静岡県磐田市三ヶ野	前方後円	64.0	台地	礫槨(?)		6.2~6.6	食込式、鈴の位置1/3	鈴杏葉・鈴・馬鐸・管玉
18	おつくり山古墳	愛知県名古屋市瑞穂町井戸田	円	24.5				5.4~5.6	食込式、鈴の位置1/3	鈴釧・鏡・小玉・刀・剣・短甲・挂甲・鉄鏃・鉾
19	大塚1号墳	〃 〃 守山区上志段味	前方後円	50	山麓	粘土槨	埴輪・葺石	5.4	食込式、鈴の位置1/3	鈴鏡・鈴杏葉・鈴付鏡板・馬具・挂甲・鉄鏃・鉤帯
20	勝川神社址古墳	〃 東春日井郡勝川村北東山						5.5	食込式、鈴の位置1/3	鏡・刀剣・槍
21	埴田後山2号墳	石川県小松市埴田町	円	20(?)	丘陵					短甲・刀
22	獅子塚古墳	福井県三方郡美浜町大字郷市								
23	新開1号墳	滋賀県栗東町安養寺	円							馬鐸・馬具・十字形蛇行鉄器
24	新沢千塚109号墳	奈良県橿原市川西町	前方後円	25.4	丘陵	木棺直葬	埴輪	5~6	食込式、鈴の位置1/3	鏡・玉類・垂飾付耳飾・直刀・剣・鉄鏃・短甲・挂甲・鉾
25	以久田野古墳群	京都府綾部市栗町以久田野	前方後円	36	台地	礫床		4.0~4.5	食込式、鈴の位置1/4	馬具
26	塚原86号墳	大阪府高槻市塚原				横穴式石室				刀子・釘・須恵器・土師器
27	七観古墳	〃 堺市旭ヶ丘中町	円	50		粘土槨	埴輪・葺石・段築	2.5	独立式、鈴の位置1/4	馬具・直刀・鉄鏃(他槨より・短甲・冑・斧・帯金具・剣など)
28	南天平塚1号墳	〃	円	20		粘土槨	埴輪			鏡・短甲・刀・剣・鹿角製刀装具(他棺より馬具)
29	百舌鳥耳原古墳群	〃 堺市(南郊一帯)						大形	食込式、鈴の位置1/3	
30	(神峰山寺蔵)	〃 高槻市大字原						大形	食込式、鈴の位置1/3	
31	めんぐろ古墳	島根県浜田市治和	円(?)	20(?)	台地上	横穴式石室		5~6	食込式、鈴の位置1/3	鈴釧・鏡・玉類・馬具・二輪玉・刀・槍・石突・馬鐸・須恵器
32	蛇塚古墳	香川県綾歌郡綾南町大字羽床下	円			箱式石棺		5.4~5.6	食込式、鈴の位置1/3	短甲・冑・斧・刀剣・小札・耳環鏡・馬具・須恵器
33	浮島神社古墳	福岡県遠賀郡水巻町				箱式石棺				
34	稲童21号墳	福岡県行橋市稲童字石並	円	22	海岸砂丘	横穴式石室	葺石	2.4	独立式、鈴の位置1/4	短甲・刀・剣・三輪玉・鹿角刀・装具・鉄鏃
								2.9	食込式、鈴の位置1/4	馬具・小札類
35		〃 嘉穂郡稲築村								
36	茶臼山古墳	〃 朝倉郡福田村小田	前方後円			石室(?)	埴輪	4.3~4.4	4鈴、食込式	短甲・玉類・刀子・槍・鉄鏃・馬具・肩鎧・衝角付冑
37	月ヶ岡古墳	〃 浮羽郡吉井町若宮	前方後円		沖積平地	竪穴式石室	埴輪	小形		鈴・馬鐸・馬具
38	塚堂古墳	〃 〃 〃 宮田	前方後円			横穴式石室				
39	関行丸古墳	佐賀県佐賀市久保泉町大字川久保	前方後円	55	丘陵	横穴式石室		大形	食込式、鈴の位置1/3	鏡・玉類・貝釧・冠帽・刀子・鉄鏃・留金具・鈕具・辻金物
40	花納丸古墳	〃 〃 〃 〃						2.5	独立式、鈴の位置1/3	鏡・玉類
41	江田船山古墳	熊本県玉名郡菊水町江田清原	前方後円	47	丘陵	横穴式石棺	石人・段築	2.5~3.0	独立式、鈴の位置1/3	鈴付鏡板・剣・大刀・槍・鏃・刀子・甲冑・金製耳飾・玉類・金環帯金具・沓・馬具・鏡・須恵器・土師器
42		〃 〃 高瀬町付近								
43	茶塚古墳	山梨県東八代郡中道町	前方後円	60	小丘陵	竪穴式		4.6	食込式	短甲・鐸・鉾・刀子・冑破片・鐙(木芯)

鈴杏葉（表2）

（仲子和美・作成）

番号	遺跡名	所在地	墳形	規模(m)	立地	内部主体	外部施設	鈴数	大きさ(cm)	形状	伴出遺物
1	中田横穴	福島県磐城市沼の内字中田	(横穴)		丘陵			3	長さ11.1	剣菱形	鈴・玉類・馬具・挂甲・刀子・直刀・鉄鏃・銅釧・鏡・銅蓋・金銅方板
2	大槻古墳群	〃 郡山市大槻字堂山東	円	30～35	台地	石室		5	長さ21.2		鈴釧・車輪石・金環・銀環・玉類・挂甲・銅鏃
3	馬場古墳	茨城県筑波郡筑波町大字国松	円(？)			箱式棺	埴輪	3	長さ11.9	剣菱形	鏡・刀・土器
								3	長さ12.5	剣菱形	
4	十二天塚古墳	栃木県足利市助戸	方	17		木炭槨		5		剣菱形	鈴鏡・鈴釧・環鈴・鈴剣・刀・馬具・鉄棒
5	天王塚古墳	〃 芳賀郡益子町道祖土	前方後円	43	台地	横穴式石室	埴輪・葺石・周溝	3	長さ16	剣菱形	鈴・鏡・玉類・挂甲・鉄刀・鉄鏃・刀子・馬具・衝角付冑・金環
6	宮下古墳	〃 宇都宮市瓦谷町宮下	前方後円	43	丘陵	横穴式石室		3	長さ10.5	剣菱形	鈴・玉類・馬具・直刀・槍
7	桝塚古墳	〃 下都賀郡壬生町	円			横穴式石室		3			馬具
8	中山古墳	〃 〃 大平町皆川中山	円			横穴式石室		3			馬具
9	牛塚古墳	〃 宇都宮市新富町	帆立貝	56.7	台地	木棺直葬(？)	埴輪・周溝	5	長さ12.8	剣菱形	鈴鏡・鈴釧・環鈴・鈴・鏡・玉類・金環・鉄鏃・馬具・短甲
10		〃 河内郡横川村下栗本郷山						3			馬具
11	鬼塚古墳	群馬県甘楽郡新屋村字白倉西大山	円			舟形石棺		3	長さ10.5	剣菱形	環鈴・石製模造品・玉類・鏡
12	薬師塚古墳	〃 群馬郡群馬村保渡田	前方後円	70	丘陵	舟形石棺		7		剣菱形	鈴付鏡板・馬鐸・金銅製馬具
								7		変形剣菱形	
13		〃 〃 箕輪町大字上芝									環鈴
14		〃 館林市大字高根									
15		〃 勢多郡粕川村庚申山									
16		〃 〃 芳賀村大字鳥取									
17	稲荷山古墳	埼玉県行田市埼玉	前方後円	53	低台地	礫槨(粘土槨)	埴輪・周溝	3	長さ10.8	剣菱形	環鈴・鏡・玉類・直刀・鉾・刀子・馬具・鉈・斧・鉈剣・砥石・帯金具・挂甲
18		〃 大里郡岡部村字富後						5			鉄鏃・直刀・槍・甲・鏡
								3			
19	四拾坂古墳群	〃 〃 〃 岡									鏡・玉類・刀・鏃・釧・鉄環・銅輪・短甲
20	目沼9号墳	〃 杉戸町	円(？)			木棺直葬		3	約11	剣菱形	
21		千葉県木更津市鶴巻						3	長さ10.5	剣菱形	
22	鎧塚2号墳	長野県須坂市大字八町字鎧塚	円	25	扇状地	組合式石棺	埴輪・葺石	3	幅6.6	剣菱形	玉類・刀・剣・帯金具・鉄鏃・馬具
23	正清寺古墳	〃 下伊那郡川路村久保田	前方後円	47	台地	横穴式石室		3(？)		剣菱形	鈴鏡・鈴・金環・玉類・馬具・鉾・石突・須恵器・土師器
24	戦争塚(下毛賀5号)古墳	〃 〃 松尾村毛賀	円	18.9	台地			3	幅10.9	剣菱形	鈴・直刀・勾玉
25	若宮2号墳	〃 飯田市下市田	円		台地	横穴式石室					鈴・馬具・石突・紡錘車・切羽・須恵器・土師器
26	二子山古墳	静岡県磐田市三ヶ野	前方後円	64	台地	礫槨(？)		5	長さ15.5	剣菱形	環鈴・鈴・馬鐸・管玉
								5	長さ14.2	剣菱形	
27	大塚1号墳	愛知県名古屋市守山区上志段味	前方後円	50	山麓	粘土槨	埴輪・葺石	5	長さ約11	剣菱形	鈴鏡・環鈴・鈴付鏡板・馬具・挂甲・鉄鏃・鈎帯
								5	長さ約6	剣菱形	
28	西山9号墳	石川県能美郡辰口町西山	円(？)		独立丘	横穴式石室		3	長さ13	剣菱形	鏡・管玉・馬具・馬鐸・鹿角製刀子・鏃・須恵器
29	大谷古墳	和歌山県和歌山市楠見大谷	前方後円	70	丘陵端	石棺直葬	埴輪	7	長さ17.0	剣菱形	鈴鏡・鈴・鈴付鏡板・鏡・玉類・馬具・武器・武具・農工具
30	穀塚古墳	京都府京都市左京区下山田	前方後円	30.5(？)	台地	竪穴式石室	埴輪・周溝	5	長さ11.5	剣菱形	鈴付帯金具・鈴・鏡・馬具・刀子・斧・槍・異形鉄器・須恵器
31	漆生古墳群	福岡県嘉穂郡稲築町大字漆生	(横穴)	(2.4×2.2)							鈴・刀身・馬具
32	潮見古墳	佐賀県武雄市橘町潮見	円	25	山腹	横穴式石室		5			鏡・耳環・管玉・冠・刀・剣・刀子・鏃・鉈・斧・馬具・馬鐸・須恵器

鈴付鏡板・鈴雲珠

（仲子和美・作成）

鈴付鏡板

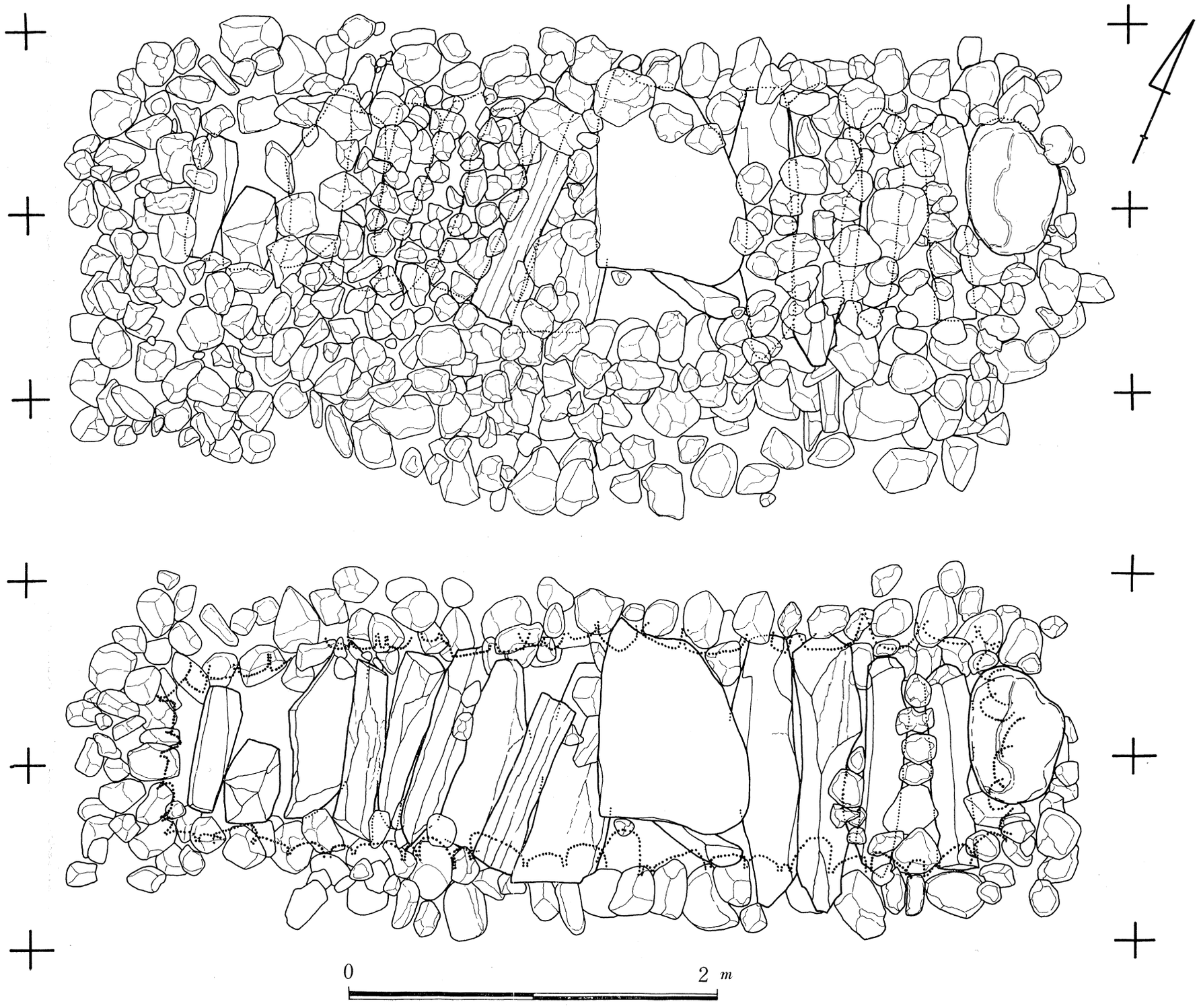
番号	遺跡名	所在地	墳形	規模(m)	立地	内部主体	外部施設	鈴数	大きさ(cm)	形状	伴出遺物
1	薬師塚古墳	群馬県群馬郡群馬村保渡田	前方後円	70	丘陵	舟形石棺		9		f字形	鈴杏葉・馬鐸・金銅製馬具
2		埼玉県児玉郡広木						6		楕円形(珠久)	
3	権現3号墳	長野県下伊那郡竜丘村上川路	円	18.5	台地	横穴式石室	埴輪	7	長さ8.2	f字形	鏡・直刀・鉄鏃・短甲・鉄塊
4	大塚1号墳	愛知県名古屋市守山区上志段味	前方後円	50	山麓	粘土槨	埴輪・葺石	5	長さ10.7	楕円形(珠久)	鈴鏡・環鈴・鈴杏葉・馬具・挂甲鉄鏃・鈎帯
5	十善ノ森古墳	福井県遠敷郡上中町大字天徳寺	前方後円	60弱	山麓の水田中	横穴式石室	埴輪・葺石	5		透彫・鍍金(双竜久)	鏡・玉類・帯金具・刀剣・鏃・馬具
6	大谷古墳	和歌山県和歌山市楠見大谷	前方後円	70	丘陵端	石棺直葬	埴輪	5	長さ19.3	t字形(唐草久)	鈴鏡・鈴杏葉・鈴・鏡・玉類・馬具・武器・武具・農工具
7		京都府						5		楕円形(珠久)	
8	芝山古墳(伝)	大阪府枚方市石切町	前方後円	30	山腹	横穴式石室		5	径11～12	五角形	三輪玉・玉類・馬具・直刀・短刀鉄鏃・須恵器
9		山口県豊浦郡川中村大字綾羅木						7		f字形(珠久)	
10	江田船山古墳	熊本県玉名郡菊水町江田清原	前方後円	47	丘陵	横穴式石室	石人、段築	不明(各1鈴残存)		"両端が両方向に曲った形"(変形蛟龍文)	環鈴・金製耳飾・金環・帯金具・沓・剣・大刀・槍・鏃・刀子・甲冑玉類・馬具・鏡・須恵器・土師器

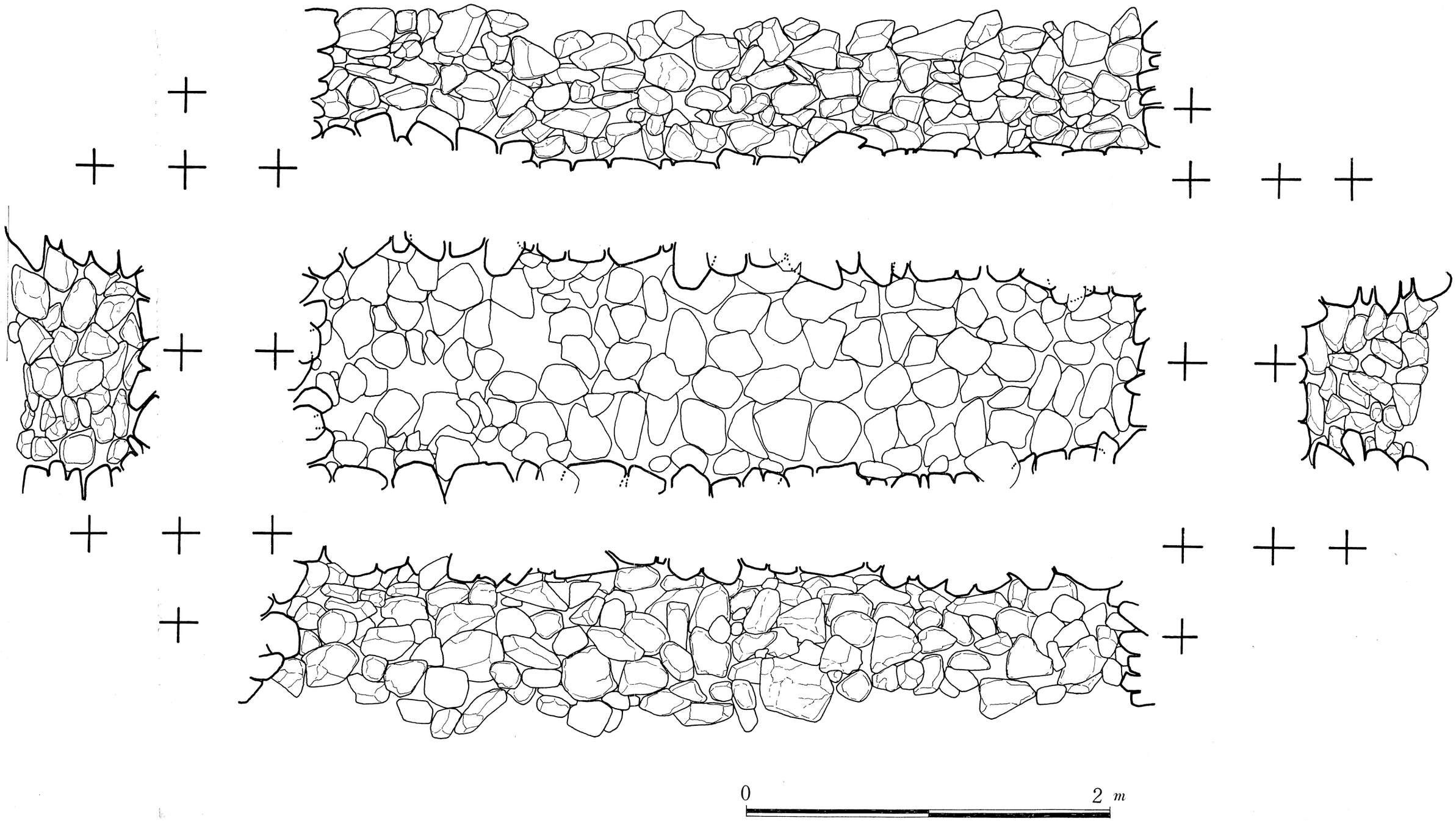
鈴雲珠

番号	遺跡名	所在地	墳形	規模(m)	立地	内部主体	外部施設	鈴数	大きさ(cm)	形状	伴出遺物
1	宗像1号墳	鳥取県末子市宗像	前方後円	37		横穴式石室		1			鈴・銀環・帯金具・玉類・円頭大刀・直刀・刀子・鉄鏃・須恵器
2	法恩寺4号墳	大分県									
3	西都原百塚原古墳	宮崎県児場郡西都原	円					(3種)	大:10.0	金銅透彫	鈴・鏡・銀製金具・大刀・刀・剣・耳環・玉類・馬具・鉄鏃

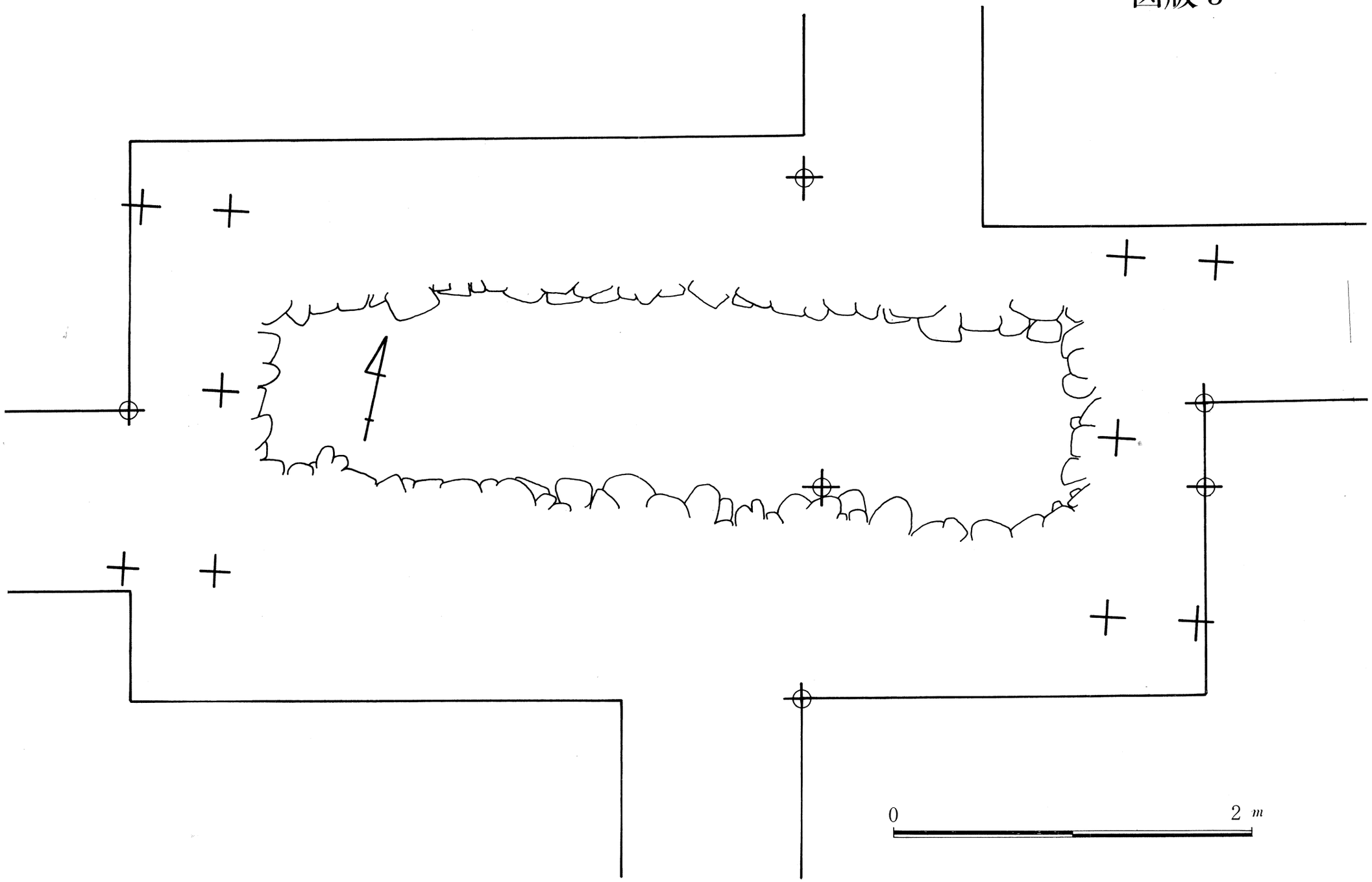
図　　版

図版 1

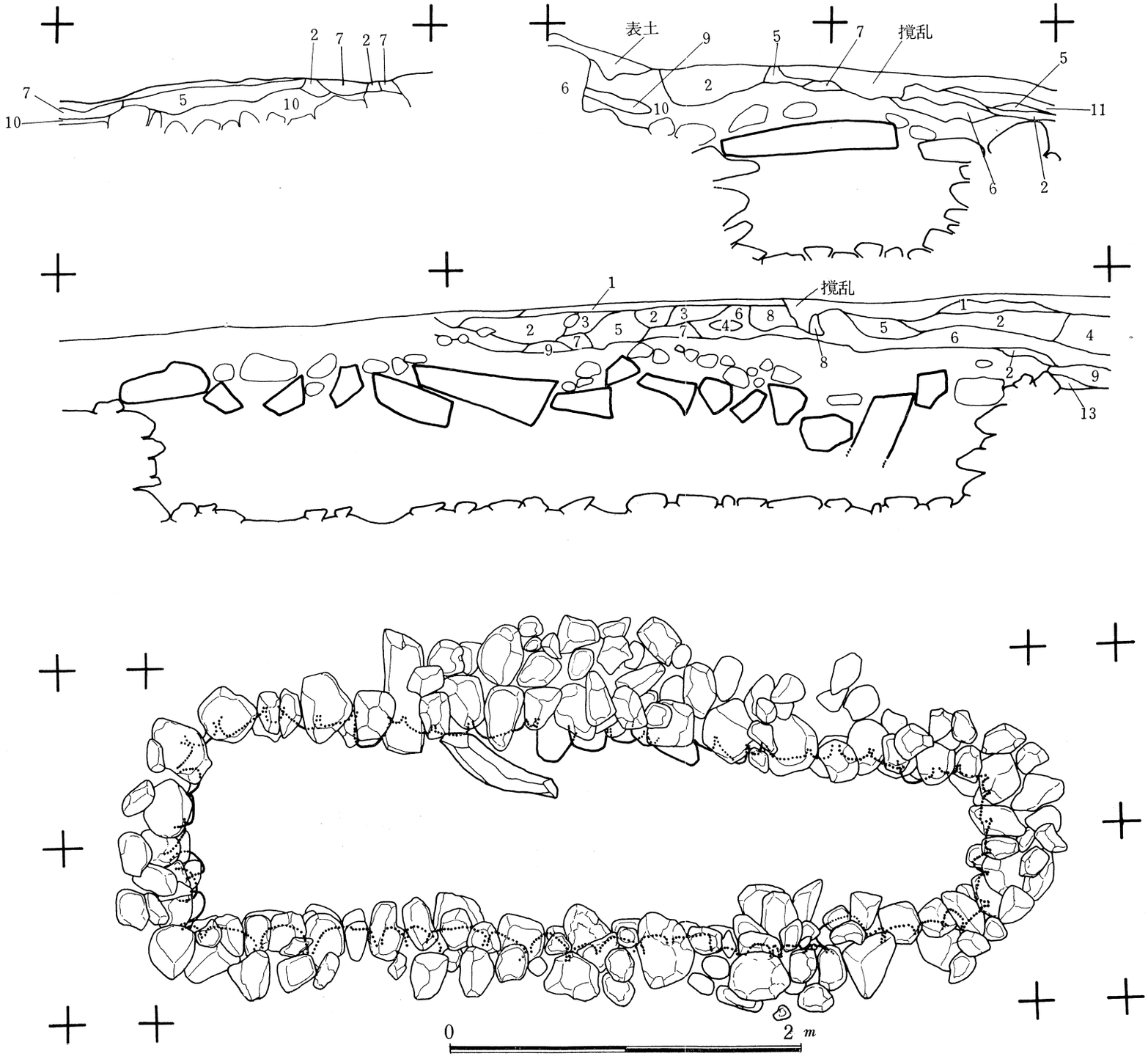



0
2 m

図版 3



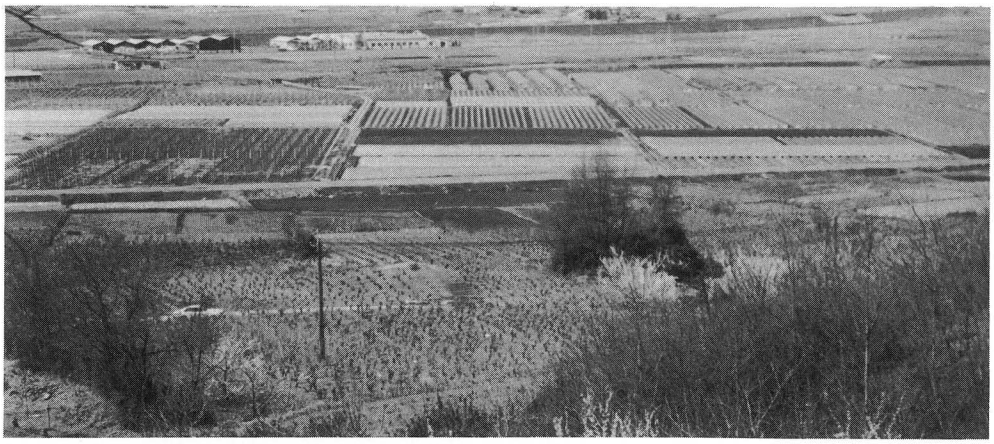
図版 4



図版 1

図版 2

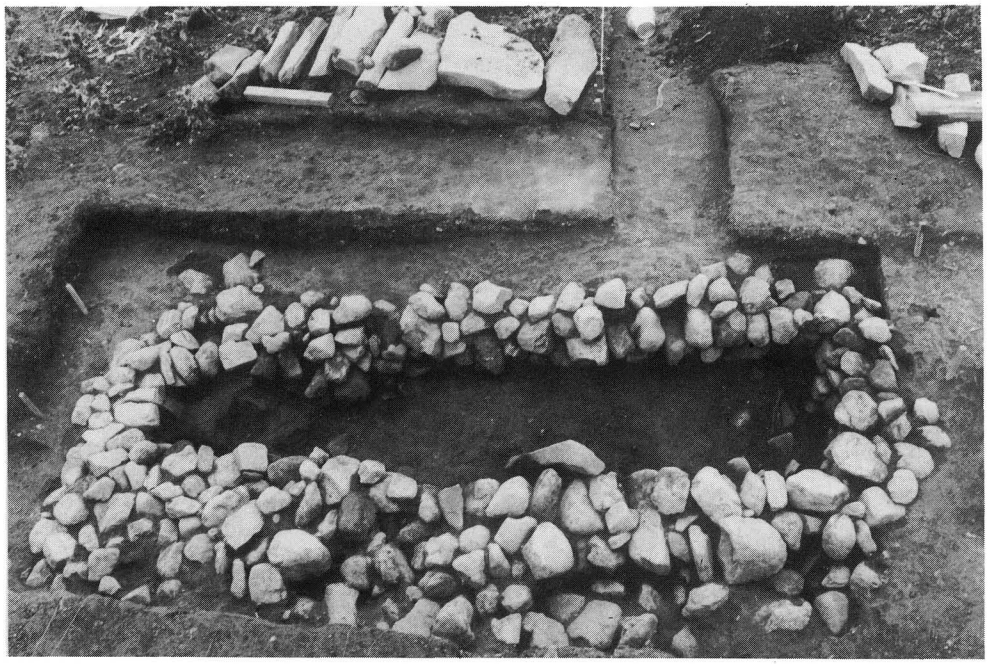
図版 3

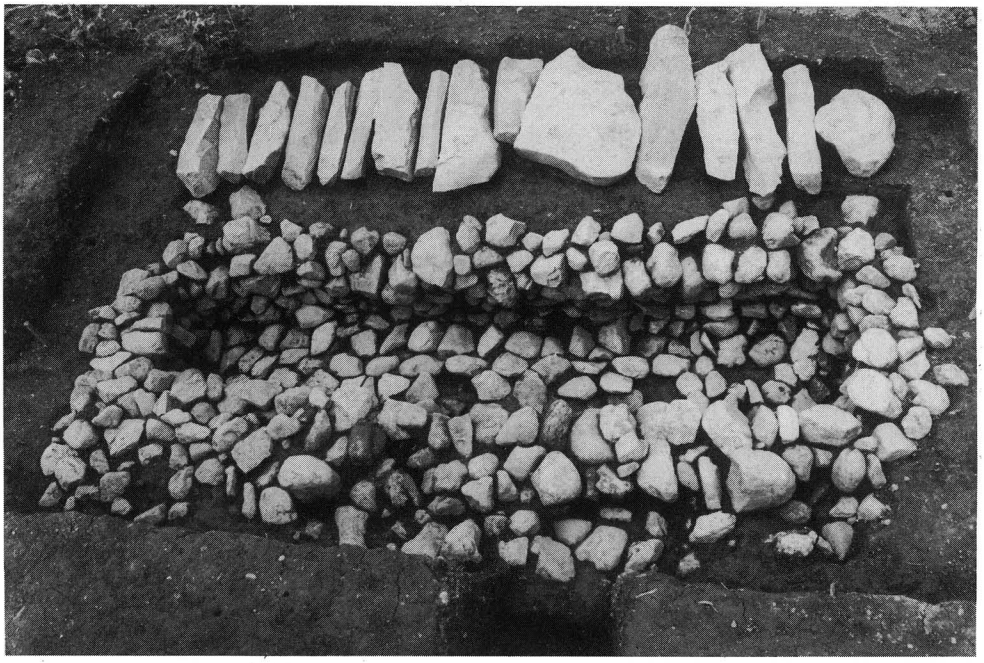


茶塚遠影　上段より・南方・西方・前方部を観る

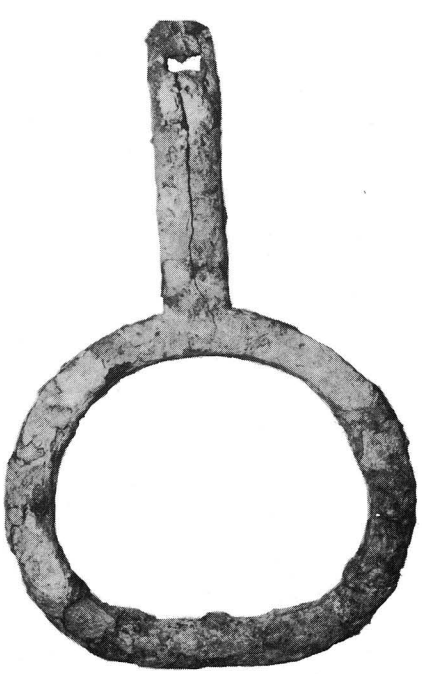
図版 4

図版 5

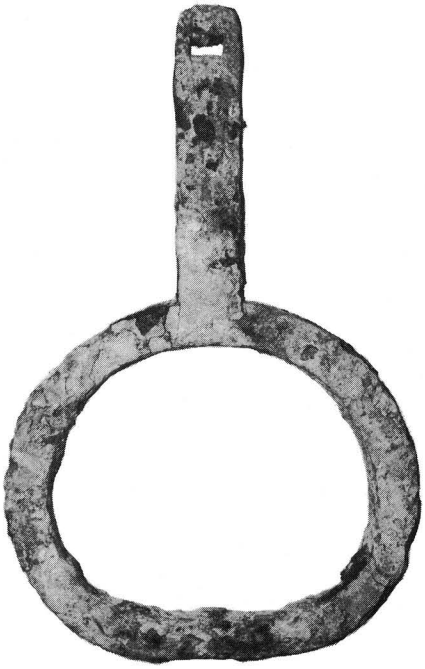




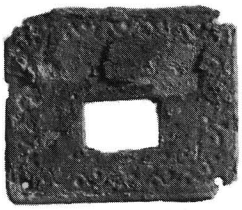
図版 6



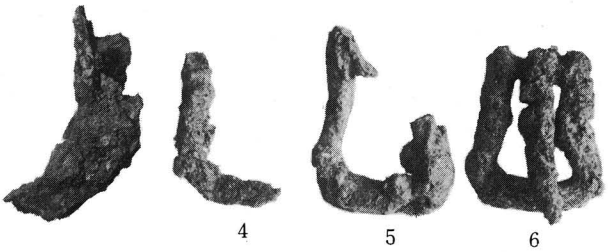
1 A



1 B

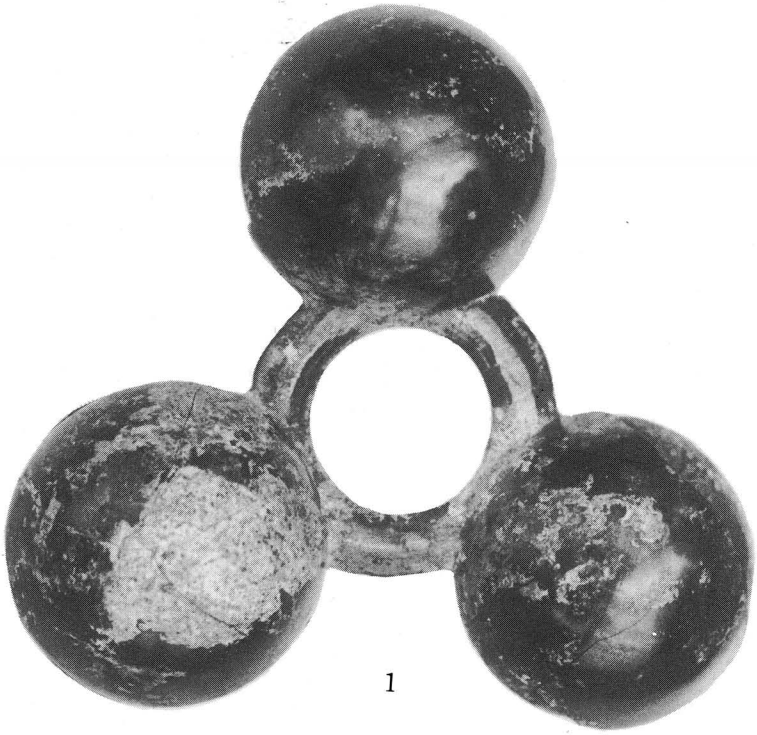


3

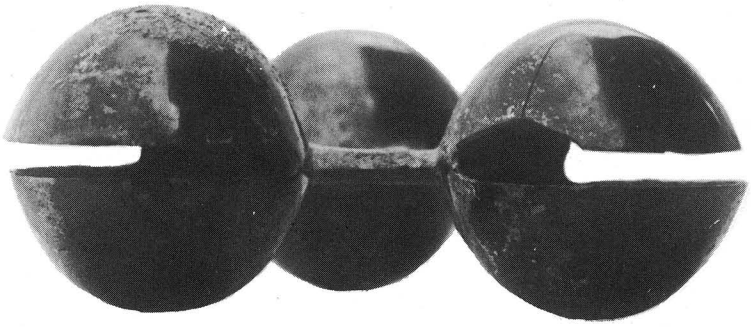


2 4 5 6

図版 7

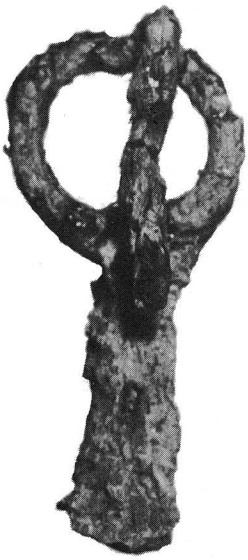


1

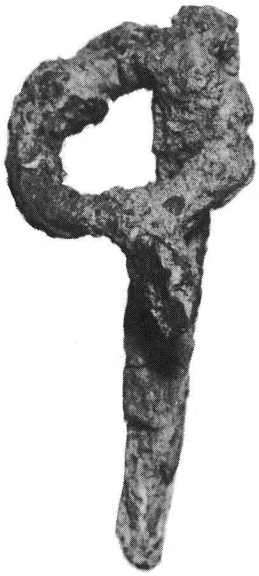


2

図版 8



1



2

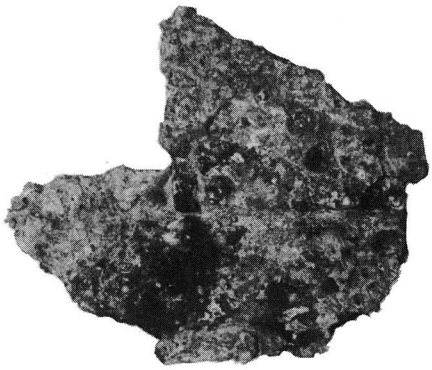
3

4

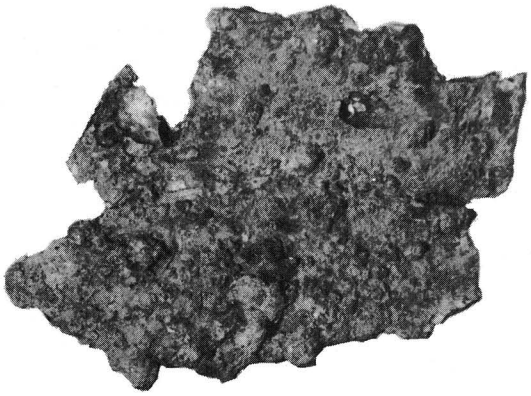
5

6

図版 9

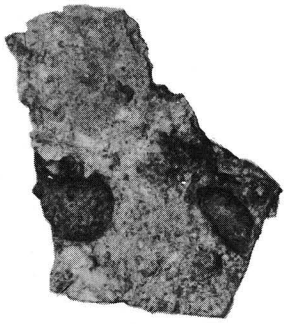


1

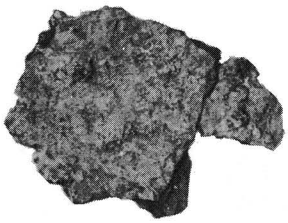


2

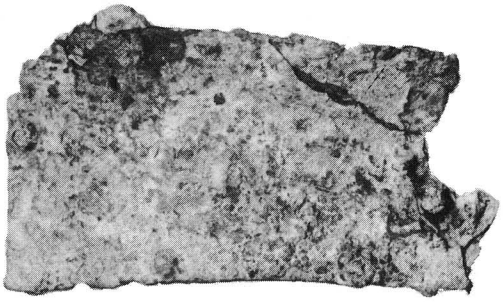
3



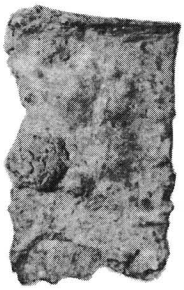
4



5

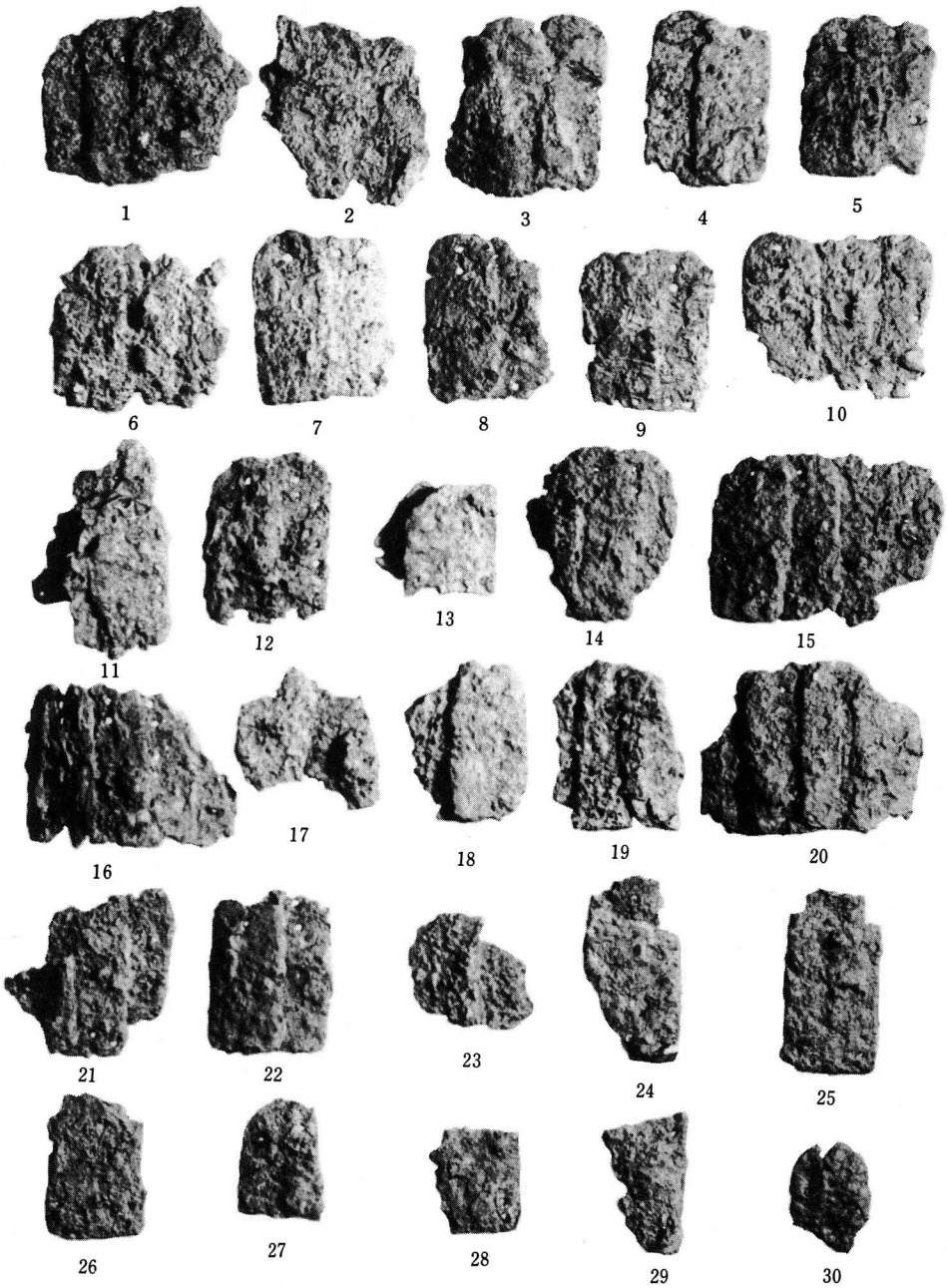


6

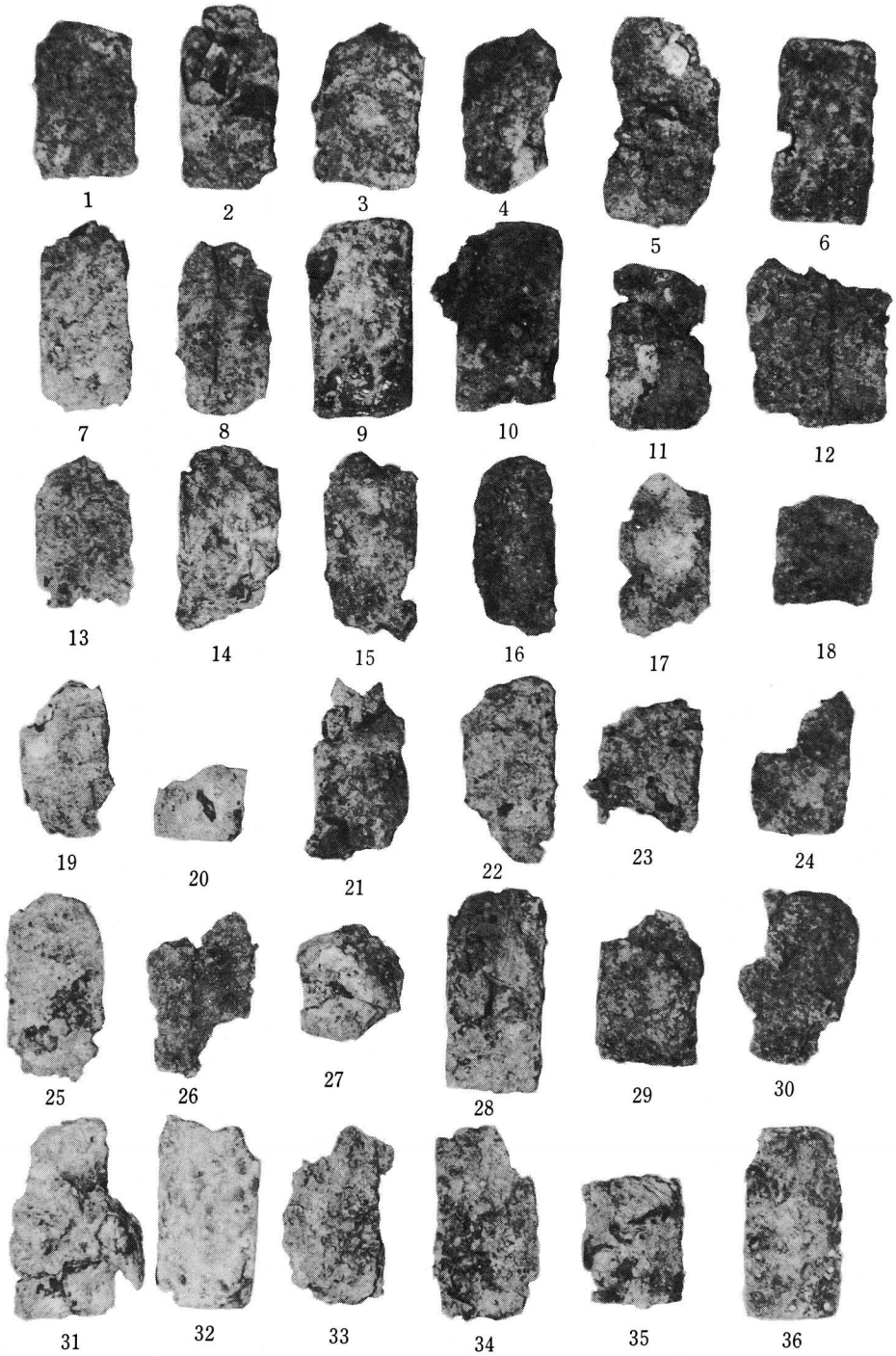


7

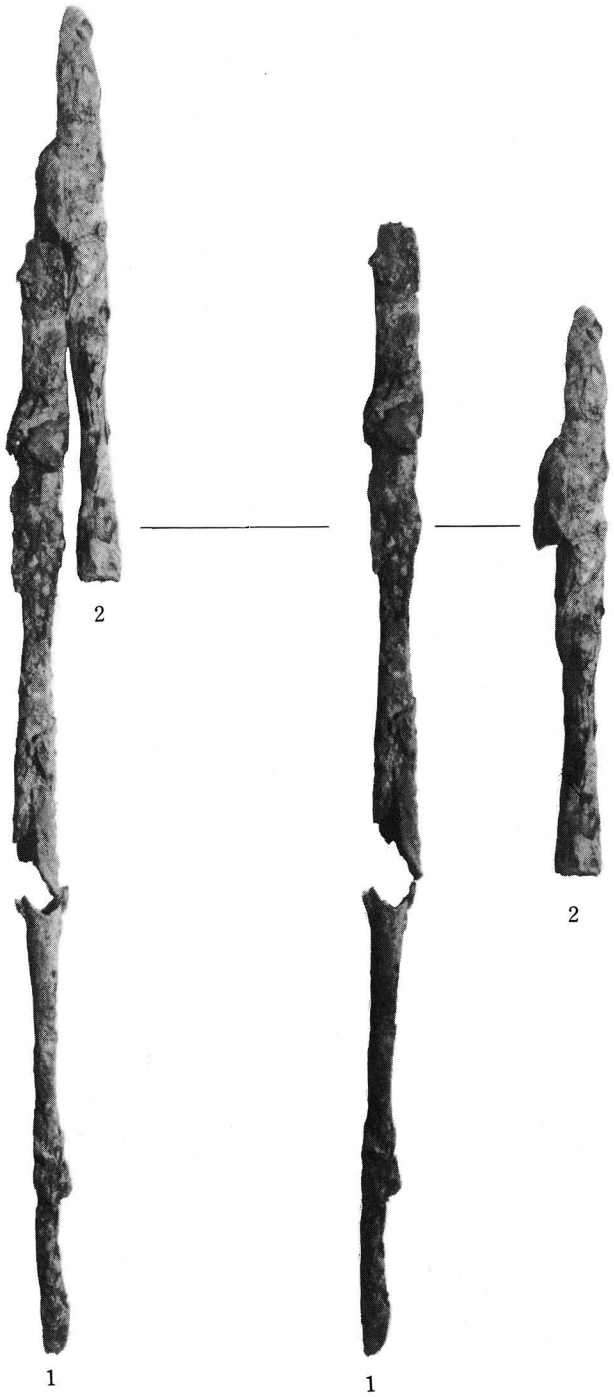
図版 10


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

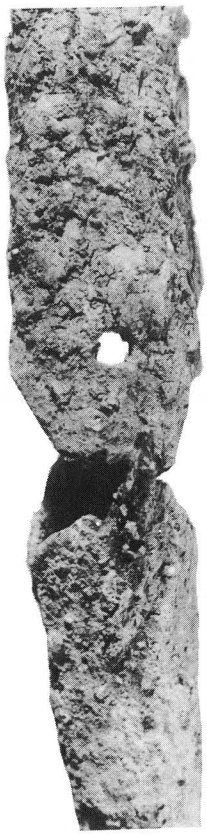
図版 11

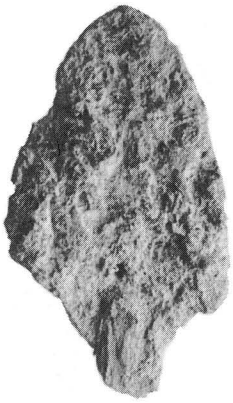

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

図版 12

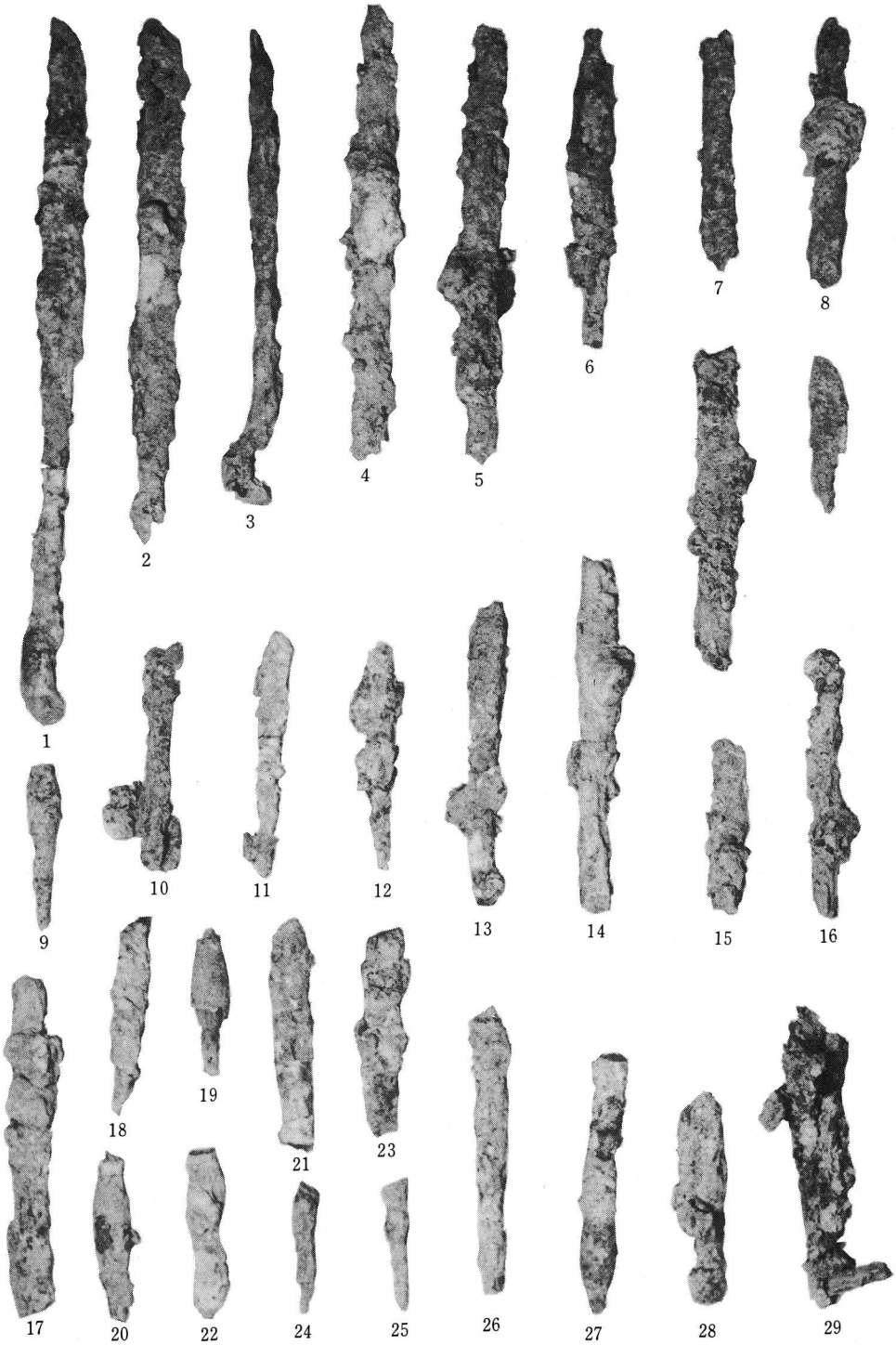


図版 13



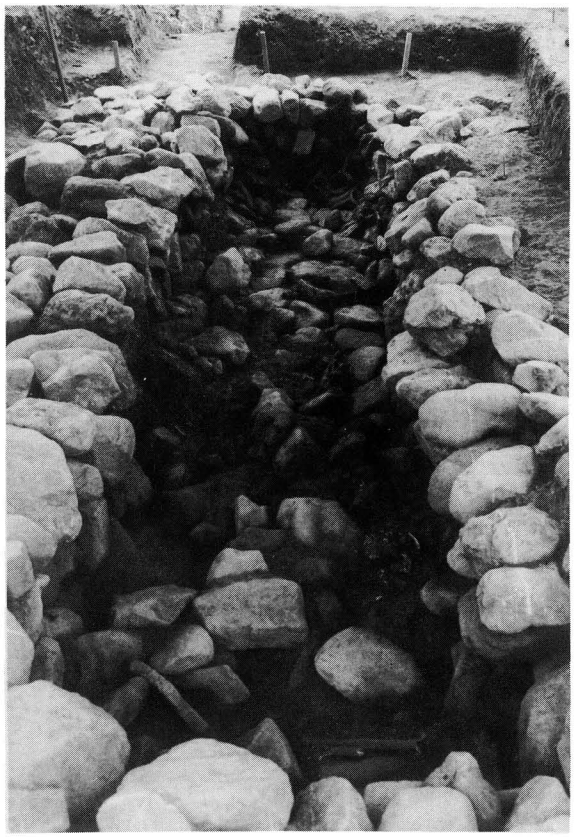


図版 14



版 15

図版16



甲斐茶塚古墳

印　刷　昭和54年3月25日
発　行　昭和54年3月31日
編　集　小林広和・里村晃一

発行所　山梨県教育委員会